Z32-B88

金の星

二月号

国立国会
8. 3. 26
図書館

第七卷　第二號

大正十四年一月九日印刷納本　大正十四年二月一日發行　大正十一年六月十三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）

Kodak Color Control Patches
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Kodak Gray Scale
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
© Kodak, 2007 TM: Kodak

巖谷小波閲（岡野榮・太田三郎・橋本邦助・細木原靜峡・杉浦非水畫）

オハナシ

鹿鳥鳴秋著

文部省認定圖書
四六倍判洋製全五册　定價各一圓　送料各八錢

巖谷小波著（岡野榮・小林鍋吉・杉浦非水畫）

日本一の畫噺

四六半截全廿五册各廿五錢送料各四錢

巖谷小波著（文部省認定通俗圖書）

オトギウタエ

第一卷より第三卷迄　四六倍判全三册
定價各八十錢　送料各六錢

都下有數の小學校では特に本書を生徒の補助教科書として採用せられました。

この本はお噺の問題です、みなさんがいくら仕入れても仕入れても盡きない種蒔山積であります、クリスマスやお正月のよきお贈物にもなります。

ひらがな文・桃太郎・舌切雀・花咲爺・勝々山・猿蟹合戰・文福茶釜・一寸法師・瘤取・浦島

カタカナ文・天神樣・清正・浦公爲朝・牛若丸・象・遊ビ・兎ノ世界・シ・猫ノ世界・猿・牛・熊・アヒルト鶏・ポチノ藝ヅク・古・水アソビ・軽業動物園・蟲ノ世界・車ト舟・オ馬ノ精・海軍・龍宮メグリ・山メグリ・會我兄弟・兵隊ゴッコ・

日本一の先生が日本一のお噺を日本一の美しい日本一の面白いご本にして下さいました、ひらがな殺とカタカナ殺りの二通りあります。

一二三お伽の歌を唱ひましよ、あきたら皆で畫を見ましよ、繪の面白さ唱ひましよ。

(一)お馬が三匹ヒヨン〳〵白馬黑馬栗毛馬
(二)うつかりすると直ぐ落ちる
(三)ちるよ櫻の花片が馬の背中へヒラ〳〵
(四)平首平手でなでゝやれ
(五)馬はだまつてあばれない（第二卷馬づくし一節）

金の星社 世界少年少女名著大系

四六判箱入顔美本・定價各冊金九十錢送料金十五錢

第十二編 日本神話
古事記物語

「古事記物語」ほど立派な神話は、恐らく世界の何れの國にもあるまい。實際驚く程立派な、面白い物語りである。日本の國がはじめて出來た話から始つて神々の誕生や、天照大神や、大國主の命の話や、それからずつと末になつて、雄略天皇の御代までの神話である。

第十編
グリム童話

グリムの童話は改めて述べるまでもなくドイツの有名な傳說研究家グリム兄弟の作つたもので各篇ともドイツの各地に傳へられた國民童話である。しかし、グリムの童話は今ではドイツ一國のものでなく、少年少女の珍寶として尊ばれてゐる程有名なものになつてゐる。本書の中に集められた作はグリムの數多くの作の内、最も有名な面白いものばかりである。童話の愛好者及研究家の御一讀を待つ。

第十一編 繪入
イソップ物語

イソップ物語は古くから知られてゐる話だけに、これまでに、隨分澤山の本が出てゐる。しかし本書の如く、一つのお話に一枚づゝの立派な畫を入れて、お話と畫と兩方で面白く讀ませる本は他にない。金の星社が最も自慢の本の一つとして、是非皆さんに見ていたゞきたい。

第十三編 ギリシヤ神話
イリヤード物語

（近刊）

「オデツセー物語」と共に世界的に有名な物語りであつて、勇壯なトロイの戰爭を書いた他に無い面白い長篇物語り。御愛讀下さい。

小島政二郎先生譯（英國文豪キツプリング原著）

狼少年

附錄 白あざらし

世界少年少文學叢書第二編

【最新刊】寺内萬治郎畫伯裝幀 四七判箱入總クロース 内容三百數十頁挿繪澤山 定價金壹圓九拾錢 送料金十五錢

冒險と驚異を愛する少年は讀め!! 世界的名篇を渴仰する少女は讀め!! 全國の圖書館は本書を備へて藏書を完備せよ!!

この物語は印度の森林の中で、狼に育てられた少年の物語である。印度の大自然の中で、いろ〳〵の猛獸と共に生活する不思議な運命を持つたこの少年の物語は、如何に大きな驚異を以て讀者に迫るであらう。世界的文豪キツプリングの名作を、小島先生の麗筆によつて譯述されたもので、日本には珍しい一大名篇である。尙附錄の『白あざらし』も同じ作者によつて書いたもので頗る〳〵面白い物語りである。裝幀と口繪共に寺内萬治郎畫伯の苦心になる。

東京市外田端三五一 金の星社 振替東京五九五五 電話小石川九三八六 番

沖野岩三郎先生著。蕗谷虹兒畫伯裝幀並ニ挿畫

長編 森の祈り

四六判箱入美本
本文二四〇頁
挿繪三色版外數頁
定價金壹圓八拾錢
送料金拾五錢

『金の星』愛讀者中未だ本篇を讀まざる人ありや？。本篇は發行以來日淺けれど、各方面より熱狂的大歡迎を受け、新聞紙は筆を揃へて、本篇を激賞せり

本篇は紀州の漁村に育つた兄妹の哀れな物語りである。父が行方不明になつた後、祖父と母と共に世の荒波にもまれつゝ奮闘努力を續け、遂に父に再會する迄の血涙記である。著者の信仰生活によつて生れた名篇だけに、一度本書に接すれば生涯忘れ得ぬ深い感銘を與へられるであらう。最も健全にして有意義な讀物として金の星社が責任を以て世に問ふ一大傑作である。尙裝幀と數頁の挿畫とは蕗谷虹兒伯の苦心になり、他に見られぬ高雅極りなく、しかも頗る安價な本である。

東京市外田端三五一
金の星社
振替東京五九五九六番

ハクビ音樂辭典

白眉社編輯部編纂　伊庭孝監修

四六判總クロース箱入美裝約三百頁　定價貳圓八十錢　送料十八錢

英、獨、羅、佛、伊、西等の樂譜一萬二千余を集め、これに正確なる發音と懇篤なる說明をなし數十個の銅版樂譜を插入せり、本文の他に管樂器の圖、前記各國語の發音法の規則並に簡單なる文法、轉調表、各樂器音成表、オーケストラ座席表、音樂巨匠人名錄（約六百名家）等の附錄あり、苟くも音樂研究家なるものは必ず座右に一本を備ふべきである

ワーグナーとその音樂

堀内敎三著

四六判上製二百餘頁　定價一圓五十錢　送料十五錢

ワーグナー研究家として我國の第一人者である著者が歐米各地を遊學して、歸朝後最初の著述で彼地に於て親しくワーグナー劇の演出を觀、其のフルスコーアに就て研究せる引證該博の好著である。

東京市外下目黑町　白眉出版社發行　振替東京四五九八五

目次

日向ぼっこ（表紙・原色版）……寺内萬治郎
も一度ワン（口繪・三色版）……岡本歸一
火を吐く鬼瓦（口繪・一色版）……寺内萬治郎
雀踊り……（一）野口雨情
同作曲……（二）本居長世
睨めッ競の鬼瓦……（六）沖野岩三郎
小鳥は空に……（一六）加藤武雄
拿謡舞踊 證城寺の狸囃……（二四）林きむ子
だいどころへ一里……（二六）小島政二郎
オルゴールの歌……（三四）織田小星
お正月まで……（三一）夷石龍樹
ホシローヒルム（泥棒捕りの巻）……（三三）白井長三郎畫
波の鳥……（四六）野口雨情選
出目助さん道中記……（四八）三島霜川
狐の子……（五一）仙波しげる
やなぎ……（五三）海達公子
名曲・嘆きの薔薇……（六四）三井信衛
シーグフリード王子物語……（七四）山野虎市
河馬の自惚……（七四）久米桂一
甘えたい……（八二）野口雨情選
ナイチンゲールの友達……（八四）大木雄三
霜枯れ……（八四）達崎龍
片手を失くした話……（八六）森川一朗
（一〇六）若山牧水選
とんだ御馳走……（一〇八）山崎豐
仙術修業……（一一〇）澁澤壽三郎
春と小鳥……（一一八）若山牧水
日本一の粗忽者……（一二〇）松平三千夫
植木（自由畫）……（一二二）山本鼎選
お風呂場（級友）……（一二三）齋藤佐次郎選
通信……（一二〇）
讀者だより……（一二三）
挿畫……寺内萬治郎・水島爾保布・岡本歸一・石川寛

も一度ワン

（金の星叢書）

岡本歸一畫

火を吐く鬼瓦

寺内萬治郎畫

第六頁の「脱めッ鎧の鬼瓦」を御覧下さい。

吾が交蘭社の書籍が何故多数の讀者と選良の容内ほそ？かるれさ迎歡らかる有で故がるな廉低の格價と美優の幀裝

東京市神田區南神保町　交蘭社　振替口座東京四〇二七九番

▽野口雨情先生著
童謠作法問答　金一、二〇　送一、二二

▽蕗谷虹兒先生著
睡蓮の夢　金一、七〇　送一、一五

▽西條八十先生著
詩集　砂金　金一、七〇　送一、一五

▽水谷まさる先生著
詩集　水色の花　金一、五〇　送一、一五

▽吉屋信子先生著
花物語　金一、三〇　送一、一三

▽荻原井泉水先生著
俳句の新しい味ひ方　金一、九〇　送一、一五

▽西村醉香先生著
歌物語　金一、三〇　送一、一三

▽蕗谷虹兒先生著
銀砂の汀　金一、三〇　送一、一三

▽西條八十先生著
現代小曲選集　金一、三〇　送一、一三

▽下田惟直先生著
小曲集　胸より胸に　金一、三〇　送一、一三

◀兒童讀物界の最高標準▶

ある夜の星だち

小川未明著　齊田喬裝畫

最新刊
四六判三五〇頁
定價二圓十錢
送料書留十二錢
尋五、六高學年向

吾が文壇の明星小川未明先生の童話。生命と愛とを盡すなかでの美しい想像。深い深い清らかな美しさに示いてゐます。

青い鳥

文學士　近藤宗男譯　齊田喬裝畫

最新刊
四六判百八十頁
定價一圓三十錢
送料(書留)八錢
尋三、四、五、六年向

メーテルリンクの名作。伽藍高鳥の美しい青い鳥。誰でも讀んでいるのです。

こどもイソップ

成城小學校訓導　岸英雄譯　齊田喬裝畫

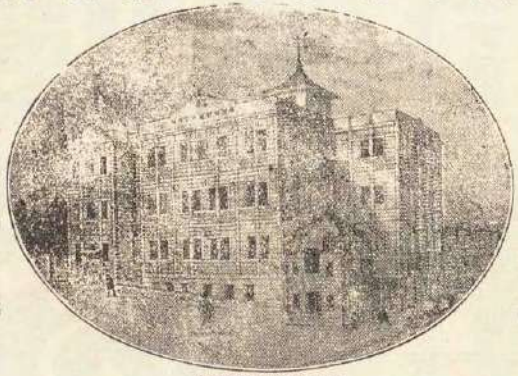
最新刊
四六判二百頁
定價一圓四十錢
送料(書留)八錢
尋一、二、三年向

カタカナ、ひらがな、中心の邦譯とさしたる學年で讀む低學年向の非常に好評です。

發兌　東京市牛込區山伏町一四　イデア書院　電話牛込三六五六　振替東京一五四二三

天下青少年の登龍門

會長、正三位　尾崎行雄
顧問、理學博士　山內繁雄
文學博士　遠藤隆吉



（本會事務所設計圖）

目下新學期開講中
入會の最好期は今也!!
講義錄見本つき會則
—申込次第無料進呈す—

大日本國民中學會あり!!

天下の青少年諸君　意を強うして可也

識君は學校萬能の迷夢より覺めなければならぬ、中等教育を受くるには必ずしも中學校に入るを要しない、識君は居ながらにして中學校に學ぶことが出來るのである。大日本國民中學會の最善をつくせる講義錄は學校以上の學校、教師以上の教師として諸君に臨むであらう。

一本會二十二年の試練と經驗とはこゝに次の如き一獨自の特色を獲得せり。

- 講義の新いこと……模範的通信教授として推奬せらる。
- 會費の廉いこと……全科の學費一ヶ月分の遊學費にも當せず。
- 學課の正いこと……正確に中學校令に從ひ全く中學校と同樣也。
- 指導の良いこと……通信教授に永き經驗を有するを以て指導懇切を極む。
- 講師の善いこと……中等教育者として令名ある實驗家を選ぶ。
- 卒業の早いこと……僅か一ヶ年半の短日月にて卒業の榮冠を得らる。
- 基礎の固いこと……創立以來二十二年國家的事業として一般に認めらる。
- 成功の確なこと……本會の門より出でたる成功者の多きこと讃ふを用ひず。

東京神田
錦町
大日本國民中學會
振替口座　東京一〇〇番　電話神田三〇〇二番、三〇〇三番
名古屋四二八〇番　特設牛込五〇九五番

沖野岩三郎先生著。蕗谷虹兒畫伯裝幀並ニ挿畫

長編 森の祈り

『金の星』愛讀者中未だ本篇を讀まざる人ありや?。本篇は發行以來日淺けれど、各方面より熱狂的大歡迎を受け、新聞紙は篋を揃へて、本篇を激賞せり。

本篇は紀州の漁村に育つた兄妹の哀れな物語りである。父が行方不明になつた後、祖父と母と共に世の荒波にもまれつゝ奮闘努力を續け、遂に父に再會する迄の血涙記である。著者の信仰生活によつて生れた名篇だけに、一度本書に接すれば生涯忘れ得ぬ深い感銘を與へられるであらう。最も健全にして有意義な讀物として金の星社が責任を以て世に問ふ一大傑作である。尚裝幀と數頁の挿畫とは蕗谷畫伯の苦心になり、他に見られぬ高雅極りなく、しかも頗る安價な本である。

四六判 箱入美本
本文二四〇頁
挿繪三色版外數頁
定價金壹圓八拾錢
送料金拾五錢

東京市外田端三五一
金の星社
振替東京五九五九六番

小島政二郎先生譯（英國文豪キップリング原著）

狼少年

附録 白あざらし

世界少年少文學叢書第二編

四七判 入絶クロース 定價金貳圓廿錢
内容三百數十頁挿繪澤山 送料金十五錢

寺内萬治郎畫伯裝幀

【最新刊】

冒險と驚異を愛する少年は讀め!! 世界的名篇を渴仰する少女は讀め!! 全國の圖書館は本書を備へて藏書を完備せよ!!

この物語は印度の森林の中で、狼に育てられた少年の物語である。印度の大自然の中で、いろ〳〵の猛獸と共に生活する不思議な運命を持つたこの少年の物語は、如何に大きな驚異を以て讀者に迫るであらう。世界的文豪キップリングの名作を、小島先生の麗筆によつて譯述されたもので、日本には珍しい一大名篇である。尚附録の『白あざらし』も同じ作者によつて書れたもので頗る〳〵面白い物語りである。裝幀と口繪共に寺内萬治郎畫伯の苦心になる。

東京市外田端三五一
金の星社
振替東京五九五九六番
東京石川小日向
電話 九五三八 九五五六番

童謡集 青い眼の人形

野口雨情先生著

裝幀 蕗谷虹兒畫伯
挿畫 寺内萬治郎畫伯
武井武雄畫伯

「五版」總絹表紙箱入美本、紙數約二百三十頁、定價壹圓八拾錢、郵送料十五錢

雨情先生の童謡集で目下發行中のものは本書あるのみ。先生の最も圓熟せる時代の傑作のみを集めた本書こそ、童謡研究家の座右に無くてならぬ名著である。好評忽ち五版!!!

東京市外田端三五一
金の星社
振替東京五九五九六番
電話小石川五三八七番

繪入童話集 ブウ太郎鍛冶屋

武井武雄先生著並畫・四六判箱入頗る美本・定價金壹圓六拾錢・本文二度刷三百頁・送料金十五錢

第三版

（目次）
ブウ太郎鍛冶屋
蜂の貸間
竹の着物
化けマンドリン
陸軍大將
お嚏の卵
流れ星玉園
眼不朽の花
世間話
又取つたよう
木魂の靴
其他數篇

おなじみの武井武雄先生の繪入童話集ですから、幾度讀んだつてあきが來ません。讀めば讀む程面白味が出ます。お正月こたつにあたつて讀む本には、是非此の『ブウ太郎鍛冶屋』をお選びなさい。鍛冶屋のブウ太郎をはじめ、いろ〳〵のものが出て來て、それは〳〵面白いお話を皆さんにしますから。

童話の畫とお話の作者に、武井先生のやうな方が日本に生れた事は、全く日本の誇でこんな面白い方は、世界のどこを探したつて他にありません。

東京市外田端三五一
金の星社
振替東京五九五九六番
電話小石川五三八七番

金の星

二月號

（通卷六拾參號）

日本童謠作曲界の代表大好評を

金の星童謠曲譜集

第一輯　人買船　本居長世作曲・野口雨情作謠
（目曲）人買船、青い目の人形、九官鳥、日傘、鴉ろ燕、十五夜お月さん

第二輯　一つお星さん　本居長世作曲・野口雨情作謠
（目曲）一つお星さん、七つの子、鵙と雀、鶏さん、象の鼻、四丁目の犬

第三輯　青い空　本居長世作曲・野口雨情作謠
（目曲）青い空・燕、雨夜の傘、でん〳〵蟲、雀の酒盛り、呼子鳥

第四輯　赤い靴　本居長世作曲・野口雨情作謠
（目曲）赤い靴、山彦、三ケ月さん、姥捨山、朝鮮飴屋、眠り龜の子

第五輯　夢とり　小松耕輔作曲・野口雨情作謠
（目曲）夢とり、おしやれ椿、つば子、十と七つ、雲雀の水汲、雀の機織り

第六輯　子守唄　本居長世作曲・野口雨情作謠
（目曲）子守唄、櫻と小鳥、乙姫さま、霜柱、煙坊主、藪の下道

第七輯　お人形さんの夢　本居長世作曲・野口雨情作謠
（目曲）お人形さんの夢、釣鐘草、啼いた啼いた雉子、芒の穂、お馬のお耳、草遊び、霜柱

第八輯　ぺんぺん鳥　小松耕輔作曲・達崎龍作謠
（目曲）ぺん〳〵鳥、螢のお使、仔牛、赤い小馬車、紅殼結鈴、さみだれ

東京市外　東田端三五一　金の星社　振替東京五九五五　電話小石川五三五七八　番六九七番

東京市外　東下目黒四六八　白眉大賣出部　振替東京五四五九五八番　捌版

社の梅

作曲　本居長世
作謠　野口雨情

一の鳥居を
くぐろとしたりや
ホウホケキヨと
一聲啼いた
三の鳥居を
くぐろとしたりや
ホケキヨホケキヨと
二聲啼いた

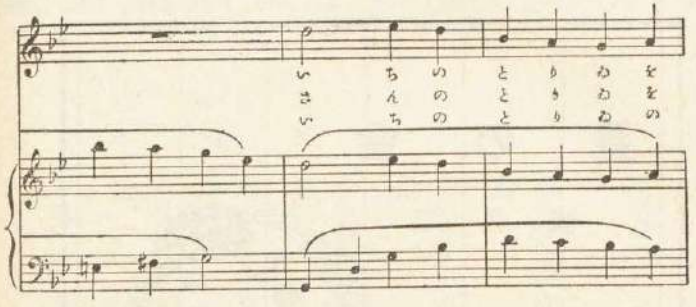
一の鳥居の
鶯さんよ
三の鳥居の
鶯さんよ
わたしやたづねる
社の梅は
花が咲いたか
咲きましたろか

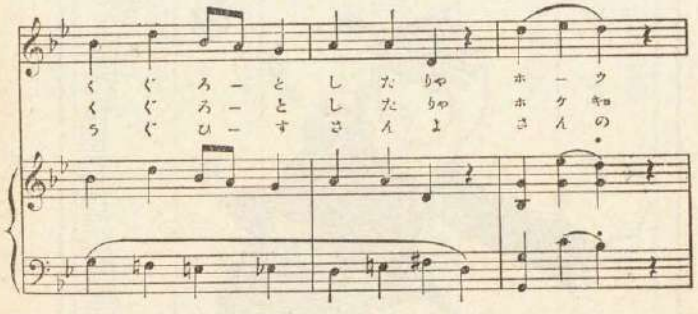
一の鳥居の
鶯さんは
一つ咲いたと
申されました

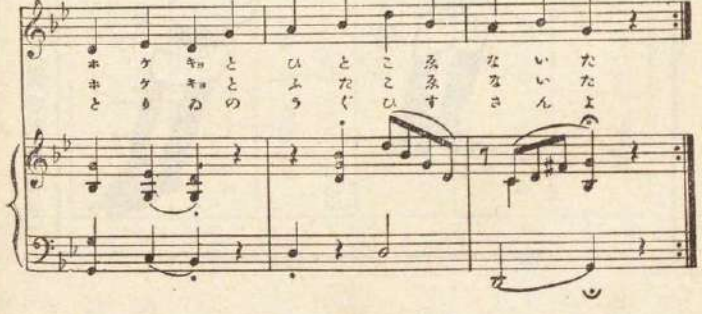
三の鳥居の
鶯さんは
三つ咲いたと
申されました
三つ咲いたは
いつ咲きました
一つ咲いたは
いつ咲きました

一つ咲いたは
今朝咲きました
三つ咲いたも
今朝咲きました
三の鳥居の
鶯さんよ
花は十まで
いつ咲きまする
一の鳥居の
社の梅は
花は十まで
明日咲きまする

Andante



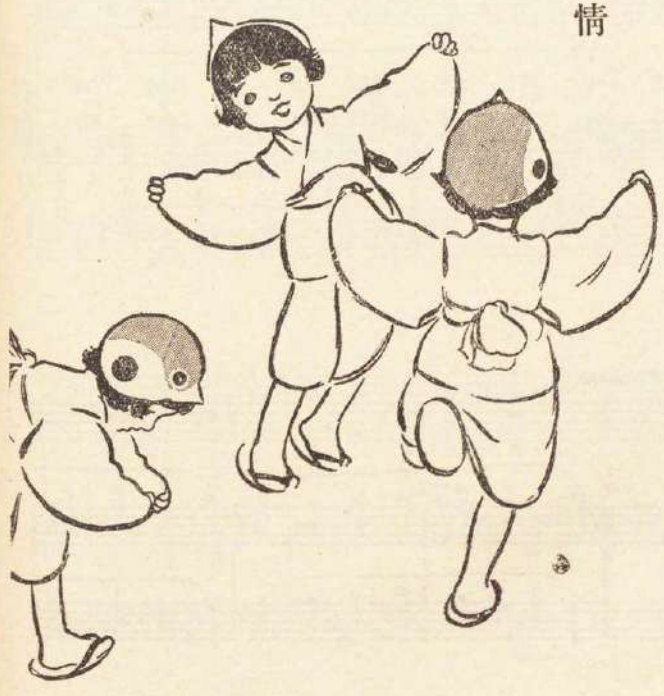




雀踊り

野口雨情

雀踊りは
面白や　面白や
手拍子そろへて
面白や
チン〳〵チンノチン
ソリャチン〳〵チンノチン
手拍子そろへて
面白や
はぐれ雀も
來て踊れ　來て踊れ



手拍子そろへて
來て踊れ
チン〳〵チンノチン
ソリャチン〳〵チンノチン
手拍子そろへて
來て踊れ
雀可愛や
ようそろた　ようそろた
手拍子そろへて
ようそろた
チン〳〵チンノチン
ソリャチン〳〵チンノチン
手拍子そろへて
ようそろた

睨めッ競の鬼瓦

沖野岩三郎

今雄さんは五年級甲組の一番でした。
京一さんは五年級乙組の一番でした。

今雄さんのお父様は、權七さんといふ名で、東山の中程に、大きな家を建てゝ瓦屋を營んでゐました。京一さんのお父様は、權八さんといふ名で、西山の中程に、立派な家を建てゝ瓦屋を商賣にしてゐました。

東山の瓦屋と西山の瓦屋とは、いつも競爭をして御互ひに自分の家で燒いた瓦のお自慢を言ひ合つてゐました。

東山へ瓦を買ひに行きますと、權七さんは、自慢らしく、

『私共の瓦は、西山さんのやうに、寒さに減げて破れるやうな事はありません。』と言つて、こつ〳〵と石ころで瓦を打いて見せます。

西山へ瓦を買ひに行きますと、權八さんは、得々として、『手前共の瓦は、東山さんのやうに、粗末なものではありませんから、この通り投げつけたつて、破れるやうな事はありません。』と言つて、瓦を庭の上に投げつけて見せます。

兩方の瓦屋で毎日々々さうしてゐるうちに、

「打いても破れない瓦。」

「投げても破れない瓦。」

といふ評判が高まつて、遠くの村や町から、續々と註文がまゐるやうになりました。で、二人はもう仲よくすれば善いのに、東山の權七さんは意地惡でしたから、何とかして西山の權八さんをたゝき落して自分の店だけを繁昌させたいと思つてゐました。西山の權八さんもまけぬ氣の人でしたから、東山から意地惡をしかけられると、默つてはゐませんでした。

其年の秋、村の小學校に秋季運動會がありました。學校中で一番よく走るのは今雄さんと京一さんでした　今年の二百メートル競走で、一番を取るのは今雄さんだらうか、京一さんだらうかといふ事が村中の評判になりました。

いよ〳〵運動會の日になりますと、村の人達は、東山派と西山派とに分れて、手々に旗を押立てゝ學校の運動場へ乘込みました。東山派の今雄さんびいきの人達は赤い旗を、西山派の京一さん組の人達は白い旗を造りました　そして源氏と平家のやうに東と西とに分れて、應援をする事になりました。

運動會の競技は、段々と進んで、いよ〳〵最後の

二百メール競走になりました。
東の方では、生徒の父兄達が赤い旗を打振つて、
『打いても破れない方、しつかりしろ！』
と叫びますと、西の方では、
『投げても破れない方、しつかりしろ！』
と呼びつゞけました。
けれども競技の結果は、京一さんが二足程早く決勝點へ入つたので、
『投げても破れない方萬歳……』の聲が西の方から起りました。すると東の方から、
『今一度やり直せ！　不公平だ！』と呼ぶ聲が起りました。そこで校長さんは、
『番外として、も一度二百メートル競走をいたします。』と呼びました。
『打いても破れない方、しつかりしろ！』
『投げても破れない方、しつかりしろ！』
東西から起る聲は百雷の一時に鳴りはためくやうでした。所が今度は今雄さんが二足ばかり早く決勝點に入りました。
今度は東の方から、しきりに、
『打いても破れない方萬歳！』を繰返して叫びました。けれども今雄さんと京一さんはにこ〳〵笑ひ乍ら手を握つて別れました。

權七さんは瓦がよく賣れるので、お金がうんとたまりました。で、東山の景色のいゝ所へ立派な二階造りのお座敷を立てました。
權八さんはそれを見て、西山の景色のいゝ所へ三階造りをたてました。
權七さんは負けてはならないと思つて、二階の上に又一階を立て添へました。
權八さんは三階の上　又た一階を建て添へました
權七さんも三階を四階にしました。
權八さんは一間四方もある大きな鬼瓦を作つて四

階の屋根の上に載せました。其の鬼は恐ろしい顔をして、權七さんのお家の方を朝も晩も睨めつけてゐます。
權七さんも負けぬ氣になつて、一丈四方の鬼瓦を作つて、四階の棟

に載せました。それは世にも珍らしい、恐ろしい顔付の鬼瓦でした。それが朝も晩も西山の鬼瓦を睨みつけてゐます。

今雄さんと京一さんとは、相變らず仲よく遊んでゐました。二人は、勢の生徒達から離れて、毎日小い紙の旗をもつて　學校の裏庭の櫻の木の下で、ひそひそと談ごをしてゐました。

或日今雄さんがお家へ歸ると、權七さんは、大きな聲で、

『今雄、四階の屋根に登つて、うちの鬼瓦に元氣をつけてやれ。そして西山の鬼瓦を睨み潰すやうに、一生懸命に赤旗を振つて應援してやれ！』と申しました。で、今雄さんは直ぐ四階の屋根に登つて赤旗を振りました　すると西山の四階からも、京一さんの白い旗がちら〳〵と動いて見えました。

二人は又た學校で、旗の振り方を相談しました。

權七さんは朝早く起きてみますと、西山の鬼瓦は朝日を受けて、勢よくこちらを睨みつけてゐますが、自分の家の鬼瓦は薄白く霜を置いて、凍えながら慄へてゐるやうに見えました。

權八さんは夕方仕事を終へて、東山の方を見ますと、東山の鬼瓦は夕日に輝いて、てか〳〵と赫黑く光つて本當に咬みつきさうに見えますが、自分の家の鬼瓦は、打ちしをれたやうに泣顔に見えました。

權七さんも權八さんも考へました。

今雄さんも京一さんも、お父樣のする事に氣をつけました。

或日京一さんが學校から歸つて、四階の屋根に登りますと、今雄さんは赤い旗を振つて、

ボクノウチノ　オニガハラヘ　コンヤ　キンバクヲヌル

と信號しました。そこで京一さんは、お父樣の權八さんに、

『お父樣、僕、毎日一生懸命に旗を振るんだけど、東山の方が元氣がいゝから、うちの鬼瓦は東山の鬼瓦に負けさうですよ。だから、鬼瓦へ金箔を塗つて下さい。さうすると、うちの鬼瓦が强くなつて勝つに決つてるから。』と申しました。

權八さんも、うちの鬼瓦を强くしたいと思つてゐた所でしたから、

『それはいゝ智慧だ、では早速さうしよう。』と云つて、俄かに大騷ぎをして、一晩中に鬼瓦の顏一面に金箔を塗りつけました。そして、

『見ろ、明日の朝は、東山の鬼瓦奴、おつかなびつくり眞二つに破れてるぞ！』と申しました。

夜が明けました。太陽が東の山からきら〳〵と輝きました。雨戸を開けた權七さんも、權八さんも兩方ながら、

『おや〳〵、どつちの瓦も金色だ！』と同じやうに叫びました。

今雄さんと京一さんは、學校の門の所で出會ひました。そして默つてにつこり笑つて、手を握りました。

其の夕方今雄さんは、學校から歸つて、四階の屋根の上に登りますと、京一さんから、

ボクノウチノ　オニガハラノメニ　コンヤ　デンキヲ　トリツケル

といふ信號がありました。そこで今雄さんは、お父樣の所へ行つて、

『お父樣、うちの鬼瓦が金箔をぬると、西山の鬼瓦も金箔をぬるんだもの。今夜はネ、鬼瓦の眼に百燭の電球を二つ取つけて下さいよ。ね、大急ぎで……さうすると屹度西山の鬼瓦は降參して眞二つに破れてしまひますよ。』と申しました。それを聞いた權七

さんは、

『成程、それはいゝ考へつきだ。』と言つて早速電燈會社へ頼んで、大急ぎで鬼瓦の眼に百燭の電燈を取つけました。そして五時になると、ぱつと鬼瓦の目に電氣のつくのを樂んで待つてゐました。

五時前から權七さんは四階に登つて、障子を開けて西山の方を眺めてゐました。同じやうに權八さんも四階の窓から東山の方を眺めてゐました。そして電燈のついた時、二人は一度に、

『おや〳〵！　これはどうした事だ！』と叫びました。

翌る朝、學校の入口で京一さんと今雄さんとはばつたり出會ひました。そして二人は默つて手を握り乍ら、につこり笑ひました。

夕方、京一さんが四階の屋根に登りますと、今雄

さんは旗を振つて相圖をしました。

ボクノウチノ　オニガハラノ　クチヘ　ハナビヲ
シカケテ、五ジカラ　三十ブンオキニ　ヒヲフク
ヤウニ　シマス

それを見た京一さんは、お父樣の所へ行つて、

『お父樣、こつちの鬼の眼に電氣をつけると、向ふの鬼瓦にも電氣がつくんだもの、今夜はあの鬼瓦の口から三十分毎に火を吹くやうに、花火を仕掛けてやらうぢやありませんか。さうすれば東山の鬼瓦も降參して、角を折つてしまひますよ。』と申しました。

權八さんは大變喜んで、直ぐ花火屋さんを呼んで來て、鬼瓦の口へ花火を仕かけました。そして家内や職人達が皆な庭へ出て、

『見ろ！　今にこつちの鬼瓦は火を吹くぞ！　そしたら東山の鬼瓦奴、一度に閉口して角を折るにきまつてる。』と云つて手を拍いてゐました。

五時十分前になりました。權八さんの家の庭には五六十人の人達が出て屋根を見てゐました。

五時五分前になりました。權七さんの家の庭には家内も職人も皆な出て來て、

『今に見ろ！　こつちの鬼瓦は火をふくぞ！　そしたら西山の鬼瓦は閉口して眞二つに破れて落ちるぞ！』と云つて居ました。

五時一分前になりました。もう堪らなくなつて、東山の方では、

『今に見ろ！』と呶鳴りました。其聲を聞いた西山の方でも、

『今に見ろ！』と呶鳴り返しました。

五時になりました。兩方の鬼瓦は同時は、シューシューと火を吹きました。

權七さんも權八さんも首を傾げて考へました。

京一さんと今雄さんとは、翌る日又た學校の裏庭の櫻の木の下で、ひそ〳〵と話しては笑ひ合つてゐました。すると、俄かにゴウーッゴウーッと、地の下が鳴り始めました。

『京一さん、地震だよ！』と今雄さんが言つた時、建物が、がた〳〵と動きました。二人はひしと抱き合つて、櫻の木の下に立つてゐますと、何所かでドーン！ガラ〳〵ガラ……と大變な響きが致しました。

『あ、うちの鬼瓦が落ちたのだ！』

二人は同時に叫びました。そして門の所へ走つてゐて、行つてみますと、多勢の生徒が其所に立つてゐて、

『東山の鬼瓦‥　西山の鬼瓦‥』と言つて騒いでゐました。

東山の鬼瓦は眞ッ倒にお濠の中に落ちたので、角が滅茶々々に折れて、顏は八つに破れてしまひました。

西山の鬼瓦は庭石の上に落ッこちて、顏の眞中にぽつこりと大きな穴が開いて、眼も鼻も口も無くなりました。

權七さんは滅茶々々に破れた鬼瓦を拾ひ集めながら、

『下らない競爭をして、肝心のお仕事を一月も休んだ。もうこんな下らない競爭は止しませう。』と言ひました。

權八さんは顏の眞中に大穴の開いた鬼瓦を眺め乍ら、

『下らない爭をして、註文の瓦を燒く事をすつかり忘れてしまつた。もうこんな下らない競爭は止しませう。』と言ひました。

權七さん所の四階は三階になりました。

權八さん所の四階は二階になりました。

權七さん所の三階は平屋になりました。

權八さん所のお座敷は取拂はれて、其所は瓦の乾場になりました。

權七さん所の平屋は取除けられて、其のあとは瓦の竈場になりました。

翌る年の四月に、京一さんも今雄さんも、同じ一番で六年級になりました。

權七さんの燒く瓦は、石ころで打いても破れないといふ評判が日本中へ擴がりました。

權八さんの燒く瓦も投げたつて破れないといふ評判が高くなりました。

そして東山も西山も段々商賣が繁昌しました。

東山の新しい竈場から赤い旗ッ振つて、

キミノトコロヘ　キンノホシガ　ツキッシタカ

と信號しますと、西山の乾場から、

ツキマシタ　キミノ　アカイトリヲ　カシテクダサイ　ボクノ　キンノホシヲ　カシテァゲマス

と返事をしました。

權七さんは今雄さんの旗を振つて居る所へ來て、

『もう鬼瓦がないんだから　旗を振る必要はないちやないか。』と叱るやうに言ひました。

權八さんも、京一さんの旗を振るのを見て、

『もう下ない競爭は止せ。』と叱るやうに言ひました

翌る日今雄さんと京一さんとは、學校の裏庭で相談しました。そして其日の夕方、お家へ歸つて、今までの事を、すつかり白狀する事にしました。

權七さんも權八さんも、二人ながら、自分の子供さんの智慧に感心しました。

それから東山と西山とでは、毎日赤と白との旗を振るやうになりました　それは東山へ瓦の註文があつても、瓦の足りない時は、西山へ旗へ振つて、足りないだけを直ぐ持つて來て貰ふのです。その代り西山へ瓦の註文が有り過ぎた時は、其の半分を東山で燒いて貰ふやうに、旗を振つて賴むのです。其の信號手はいつも京一さんと今雄さんでした。

東山と西山とが中よくなつた時、世間の人は兩方の瓦を、

『打つても投げても破れない瓦。』だと云つて賞めました。（をはり）

小鳥は空に（長篇）

加藤武雄

二

（前號の梗概は一一七頁にあります。）

なんといふ美しい空であらう。朝まだき咲く露草の瑠璃色に似て更に明るく輝いてゐる空である。例へ霜柱たつ冬にしても、空の晴れた日は、村の子供達は幸福だ。大枯なんかなんでもないのだ。頬を紅に染めて聲を揚げて跳躍しなければ居られないのだ。

村の學校が午後二時に退けて、一度び家に歸つた子供達は、やがて再び學校の庭に集つて來た。前にもいつたやうに、鹿ヶ谷の村は黒谷山の若王子山の溪谷にあつて、平地と云つては稀である。高臺の麥畑を平にならして作つた學校の運動場は　また唯一の村の子供の遊戯場であらねばならなかつた。どこから搜し出したのか石油箱をうつぶせにして、それにのつた子供の一人が、しかつめらしく、叫ぶのであつた。

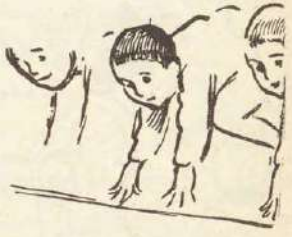
『オン、ユアー、マーク』

それを合圖に十人ちかくが、白墨で描いた出發線に並ぶのである。それでも、ひとかどの短距離走手のやうに開いた兩手を輕く地上について居るではないか。その十人の外側から四番目に、岩村の義雄が、まるで眞物の選手のやうに合圖を待つて頑張つて居るのであつた。

『義チャン、もつと前に出ないかい。』

少年審判官が注意した。

『僕、これで可いんだよ。でないと健ちやんの邪魔にならあ。』



何れも右の足先をラインに置いて、

義雄は、ちよつと横むいて笑つた。その刹那に、玩具のピストルがなつた。みんなは、さつと出發して、それから五十米突ばかり走ると小さな木馬があつた。みんなは其れを廻つて、もとの場所に歸つた。義雄が一着で、駈在巡査の息子の健吉が二着であつた。

『長距離だと僕の方が勝つと思ふよ。』

健吉は口惜しさうに、喘ぎながら、だれに云ふともなく訴へた。

『それなら義ちやんと健ちやんと二人きりでグラウンドを十回まはつて見るといゝ。』

審判官になつた少年が、稍々義雄の肩を持つやうな口調でいつた。

『さうだなあ、僕は其麼に走れるかしら。だが健ちやんが、やると云ふなら、僕もやるせ。』

義雄も昂然として云つた。そして、その競走には他に三名の少年が加はる事になつた。

『いゝかい。だれかグラウンドの四隅に立つてくれないかい。選手がそれを十回まはるんだから。』

四五人の少年で面白がつてかけ出した。それでトラックが出來た。それから義雄と健吉と外の三人がスタートに着いた。

五人は隼のやうに驅けだした。二周目までは健吉が先頭を切つた　三周目で義雄が抜いたが七周目で

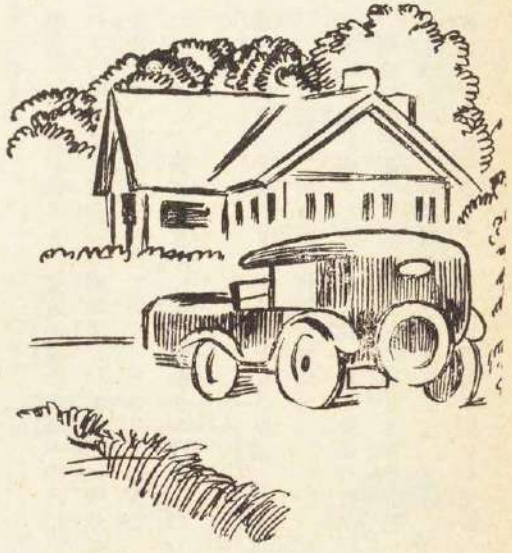
また健吉が先頭に立つた。他の三人は遙かに遅れた。だが、決勝點では義雄が一米突ばかり勝つた。

『義ちやん、萬歳!!』見物の少年達は凱歌をあげた。義雄は幾らか得意げに肩を聳かして、息をはづませて居た　健吉は今にも泣き出しさうな、澁面をするのであつた。事實、僅か一歩の差で敗れたのは口惜しかつたに相違ない　意得　義雄が失意の健吉の悲しさうな顔を見た。その刹那、彼の勝誇つた微笑は掻き消すやうに其の頬から去つた。

義雄は健吉の肩に腕をかけて、斯う云つた。

『健ちやん、僕が勝つたのは、僕の脛が君の脛よりも三寸ほど長いからだよ。ねえ君、僕は君より三日早く生れて居るだらう。だから其れが僕の得になつたんだよ。僕と君とが同じ日に生れて、脛の長さが同じだつたら、それやあ僕の方が敗けて居たさ。』

此の言葉は皆を喜ばせた。敗けた健吉もさうきいて見ると、何だか自分の方が勝つたやうにも考へら



れて來たので、まもなくニコ〳〵顔になつた。

競走に飽きると、こんどは野球をしやうと云ひだした。義雄が投手で健吉が捕手になつた。そして其の組がシートに着いて、將に一回戰が始まらうと云ふところへ、お美津が來た。お美津の顔色は蒼かつた。明かに何か興奮して居るやうだつた。

『もう御飯なの?』

義雄は、夕飯の時間が來たので、お美津が迎へに來たのだと思つた。

『いゝえ、御用事なんで御座いますよ。直ぐお歸りなさらなくてはいけません。』

お美津は、さう云つて凝と義雄の顔を見た。いつものやさしい彼女ではなかつた。

義雄は、皆に別れて、お美津の先に立つて驅け出した。

『坊ちやま、お美津より先にお歸りになつてはいけません。』

家の前に自動車が停つて居た。鹿ケ谷で自動車を見る事は珍らしかつた。

『さあ、こちらへいらつしやい。お母様はお客様とお談中です。』

日本室になつた母の室に伴れ込まれた。お美津は默つて、綠色のスコッチで編んだ他所行の洋服を義雄に着せた。釦をかけながら、彼女に不機嫌になつて、ぶつぶつ云つた。

『華族樣が何だらう、お世嗣だつて、つまらない事もあつたものだ。』

義雄は身支度が終ると、畫室の儘の客間へつれ出された。ストーブの前の安樂椅子に、丈の高い痩せた老紳士が、規帳面にかけて居た。そして、むきあつた籐椅子に、蒼ざめた顏の母が俯向きかげんにかけて居た。

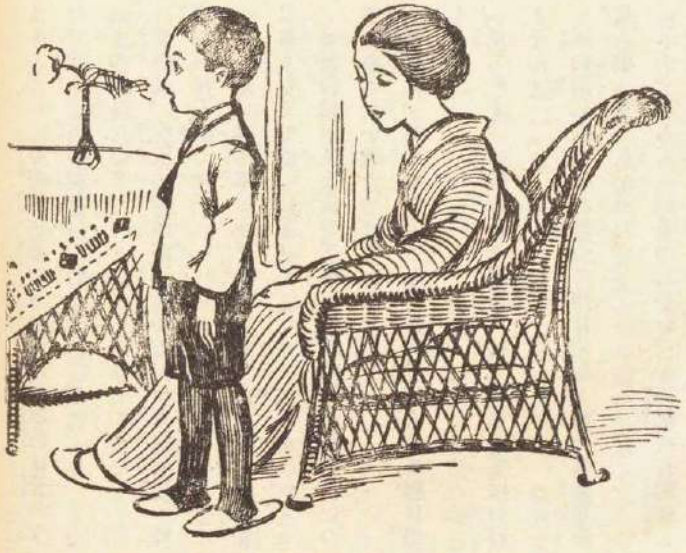
『義雄、東京の小父さまに御挨拶をなさい。』

母の聲は顫へて居るやうに思はれた。

老紳士は鋭い眼をして義雄を眺めた。骨ばつた手で、痩せた顎を撫でながら、ふいに椅子を離れた

『いらつしやい、御機嫌よう、小父さま。』

義雄は、だれにでもするやうに、元氣のいい挨拶



をした。

『ほゝあ、この方が五位樣で。』

老紳士は、可成り滿足さうに、初めて笑顏をみせた

『私は東京の御邸の仙石の申す爺やで御座います、以後お見知りおきを願ひます。』

さう云つて、小さな義雄の前に丁寧に腰をかゞめた。

臺所の方で、お美津が、いやに荒々しく、瀨戸物を洗ふ音がした。

老紳士は、やがて信子未亡人の方をむいて、ゆつくりと云つた。

『奥樣から、若樣に御說明を願ひたいもので御座います。』

何だか、嚴かに命令でもするやうに。

『餘り突然なので、何う話しましてい

いのか私には解りません。何れ靜かに考へましてから、此の兒の將來に惡い影響を殘さぬやう、話しはいたすでございませう。』

信子未亡人は、冷かに、そして物靜かに答へた。

間もなく老紳士の自動車は鹿ヶ谷の村を離れた。

そして、その夜は靜かな時雨になつた。あんなに晴れた空が、しめやかな寒い北山時雨になつた。

信子は、自分達の上に、特にいとしい吾が兒の身に、突然もたらされた此の一大事に就て、何の誤解も疑念も殘さぬやう、この幼い者に、如何に話すべきかに就て考へた。

間なく母と兒が相別れねばならぬ、その堪へ難い悲愁を思ふまへに、矢張り冷靜に考へなければならぬのは、自分の一語が吾兒の將來に何れだけ重大な影響を與へるか、であつた。靜かな雨の夜を、母は母らしく想ひ惱んだ。

讀者諸君、此の謎のやうな事件に就て、筆者である私は、簡單な說明を申し述べたいと思ひます。ここで說明なんかいたしましては、折角の物語を何だか、めちやくちやに壞すやうにも氣遣はれますが、矢張り、これだけのお話をして置いた方が、次の事件を語るためにも、ひどく都合がよいやうです。

此の物語の主人公である義雄の父の義澄は岩村伯爵の三男でした。

伯爵家の當主義興氏は、四國の、ある小藩の藩主でしたが、維新の際は夙に山內容堂公の幕下に參じて勤王の事業に與り、勳功に依つて伯爵を授けられたのであります。もはや七十歲に近い老齡ではありますが、貴族院の重鎭として吾が國の政治になくてならぬ人物であります。

長男の義朋は大學に入つて法律を學びましたが、少しも勉强はせず、徒に時間と金錢を浪費し父の老伯を失望させたばかりか、時には屈辱さへ與へました。そして遂々自動車の衝突で變死してしまつたのです。

次男の保之は、學習院を途中で放校處分にあつたと云ふ、長男に劣らぬ不良少年でした。嚴格な父の怒に觸れて勘當されたのを幸ひと、相場師の仲間に入りましたが、その後、滿洲方面を放浪し、熱病に罹つて客死しました。

三男の義澄こそは、人間としてはまことに缺點の少い人物でした。

老伯も彼を心から愛し、その將來に矚目して居ましたが、一朝、伯母の侍女信子と戀に陷つたゝめこれも亦、富と名譽を捨てゝ、遙かに西の京都に移り、幸福な家庭を作つて居ましたが若くして遂に逝いたのであります。

長男、次男、三男を失つた老伯は、差し當り血緣の中より世嗣を搜さなければなりませんでした。長男は獨身で終つた。次男は滿洲に渡る以前に同棲して居た婦人がありましたが、その後の消息を知る事ができません。

其處で、當然、三男義澄の遺子義雄が伯爵家の世嗣に擇ばれる筈でありましたが、老伯は嗣子たるべき者の母が、植木屋の孤兒であり、妹の侍女であつた事に、根强い不滿を感じ、今日まで其の世嗣問題を決定する事が出來ませんでした。

それが、愈々、寄る年波の寂さに、母の信子は邸に入れる事はできないが、その兒の義雄を迎へて世嗣に定めたい、といふので、伯爵家執事の仙石彌市老人を遙々京都へ遣したのでありました。

此の複雜な家庭の事情、殊に因習的な頑固な老伯が、斯くも貞淑にして賢明なる信子未亡人を、身分が卑賤であるために、公然と排斥して居る此の事實は、これからの物語に重大なる關係を持つて居る故に、篤と御記憶を願ひます。（つゞく）

童謡舞踊

證城寺の狸囃

（前月掲載曲譜參照）

振付　林　きむ子　　作謠　野口　雨情

表現　高千穗　寵子　　作曲　中山　晋平

(1)『證證證城寺〳〵の』

膝を折り左足から次に右走と爪立ちながら前方へ二足出て、次で左方へ左足から三足しやくふ様にすゝみ、右方にも右足から三足同様にする。

親狸一人、子狸七人、合せて八人。
八は多數、または無數を表はす數字故、
實演に夫以上の人數となる事は差支なし。

(2)『庭は』

兩手で前方へ半圓形を描き　三拍子で圓の様に廻る。

(3)『つゝつゝ月夜だ』

右方より始めて次に圓の如く左にかへ、そのまゝ下手へ廻る　地に印した影を見る心持で

(4)『みんな出て來い來い來い』

斜に後方に向つて初二度大きく招き後三度、手くび丈動かして後ずさりしながら招く。
（こゝで子狸七疋出る用意する。）

(5)『己等の友達ア』

斜後方から前に向つて圓の如く交互に足をあげながら廻る
（七疋の子狸も列なゝし、同じ形同拍子にあはせ、前に出て來てならぶ。）

(6)『ぼんぼこぼんのぼん』

初め一足に立つて右手で腹部を一つたゝき、次に左手でたゝき、同時に足は右から、拍子に合せ、かへながら『ぼん』で圖の如くきまる。（子狸も同じくする。）

(7)『負けるな〳〵和尚さんに負けるな』

圖の如く足と手を交互にあげながら圓を描いて大きく一廻りする。（子狸は、三拍子に腹をたゝきながら足拍子を合せて親狸の後について廻る。）

(8)『來い來い來い〳〵〳〵』

一廻して前に來た時右から次に左、再び右から左と四度一足のまゝで招くし但しかゝとで拍子をとる。（子狸はこの時まで腹をたゝいて歩いて來る。）

(9)『みんな出て來い〳〵〳〵』

正面に向つて、前の通り初二度大きく、次に三度手首ばかり動かし拍子に合せ、右足で前へ三足すゝみながら招く（此時子狸は正面を向いて並んだまゝ親狸と同じ事をする。）

伴奏の間、親狸リーダーの形をとり子狸、足拍子をふむ。

(10)『證、證、證、城寺〳〵の』

一節の始と同じ形で正面で一度きまり次に圖の如くに三足、續いて左へ爪ひち膝を折つた形で三足出る。

(11)『萩は』

上から漸次下るやうにして圖の形でとめる。（子狸も同じ。）

(12)『つッつッ月夜に』

拍子に合せて兩手を漸次に上方に圓味を見せてあげ、最後に圖の如き形となる。（子狸も同じ。）

(13)『花盛り』

前の「月夜」の形のまゝ一齊に後を向いて、兩手は輪形を描きながら下げ圖の樣に床につけ、すこしそるやうにして、稍上方を眺める。（子狸も同じ。）

「已等の友達」以下は、前節の撥の通り前に向ながら、一同おなじ形にきまる。伴奏の間も前と同じ。

ダイドコロへ一里

小島政二郎

或晩、草や木も眠ると云ふ夜中の一時頃に、泥棒が三人、或町へ這入つて來ました。親分が、

「おい、新米。」と呼ぶと、

「へい。」と中の一人が返事をしました。

「お前は　泥棒になるまではこの町に住んでゐたと云つたな。」

「へい、さうです。」

「ぢやアこの町内のことは定めて明るからうな。」

「えゝ〳〵、もうランプや瓦斯や電氣や、何や彼やで明るうございます。」

「さうぢやない。町内の事は一から十までよく知つてゐるだらうな、と云ふのだ。」

「えゝ〳〵、一番地から十番地までなら殊によく知つてゐます。」

「えゝ、分らない奴ぢや。大金のある家を知らないかと云つてゐるのだよ。」

「な、成程。そりや私に聞かなくとも、三井か三菱に極まつてゐるぢやありませんか。」

「そんな事は三つの赤ん坊だつて知つてゐるわ。俺の云ふ　は、有金のある家を知らないかと云ふんだよ。」

「へい、そんなら向うの網屋さんが一番多い。」

「網屋？」

「へい。眞鍮に鐵、銅……」

「馬鹿野郎。それは金物ぢやないか。」

「金物ぢやないんですか。」

「塊つた金を持つてゐる家はないかと云ふのだよ。」

「塊つた金なら、鐵屋はどうです。」

「あるか。」

「あるの無いのつて。鉛にトタン、鉋屑、その外……」

「殴るぞ本當に……。どこか　懐の　暖な家はないかと云ふのだよ。」

「そんなら、角の饅頭屋か牡丹湯と云ふ風呂屋が。」

「懐は　暖いか。」

「そりやアもう　暖いのなんのつて、朝から晩まで大火を焚き通しですから。」

「貴樣　俺をからかつてゐるのか。金が澤山あつて、人數の少い家はないかと云つてゐるのだ。」

「そんならさうと早く云つて下さればいゝのに。ぢやア木村さんの家はどうです。」

「人は少いか。」

「旦那さんと奥さんの二人暮しです。」

「そりやア有り難い。」

「その代り夜になると、關取が泊まりに來ます。」

「ナニ　關取？　そりや駄目だ。どこかに年寄の二人暮しで　金のあるやうな家はないか。」

「あります。この四角から四軒目に、田中と云ふ表札の打つてある家。」

「年寄で金があるか。」

「お爺さんお婆さんの二人暮しで、金は腐る程ある代りに、劍術の先生です。」

『ナニ、劔術の先生？ブル〳〵。おお、恐や。そんな家へは迂濶には這入れない。――年寄で弱さうな處はないか。』

『年寄で弱いところと――。うん、そんなら、この露路の奥の突き當りの家がいゝでせう。』

『年寄で弱いか。』

『弱いどころか、お婆さんは中氣で、お爺さんは腰抜けです。』

『金はあるか。』

『町内の人がお金を出し合つて養つてゐます。』

『阿呆め、拳固でも喰へ　ポカリ。』

『アイタタ　わア〳〵〳〵。』

と、もう一人の辰と云ふ乾兒が、

『頭、そんな鈍馬を相手になさるな。それよりも、晝間から狙つて置いた家はないんですか。』

『あるとも。』

『そりや何處です。』

『そこの眼鏡屋さ。』

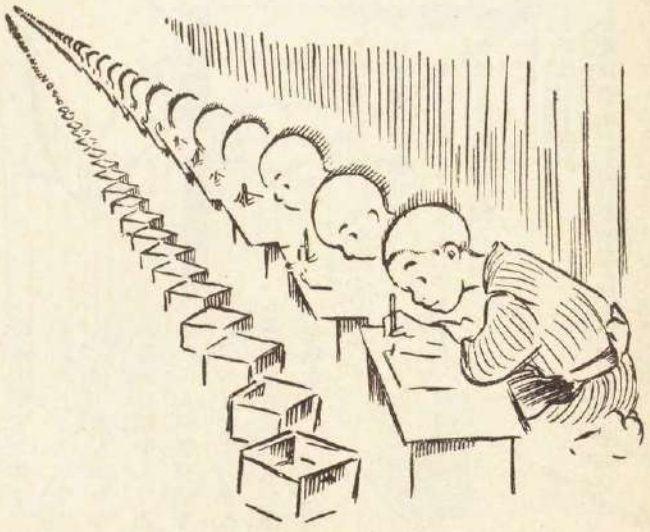
『ぢやアそこへ仕事に行かうぢやありませんか。』

『うん、さうしよう。――やい、新米、ガミ張つて來い。』

『へい、どこへ紙を張るのでございます。』

『誰が紙を張れと云つた。ガミ張れとは、覗いて見ろと云ふことだ。』

ところが、こつちは狙はれた眼鏡屋さんです。恰度主人が留守で、小僧さんが一人、旦那のお歸りを待つ間、お手習をして起きてゐました。すると、表で、さつきからモソ〳〵云ふ人の話し聲が聞えたので、耳を欹つて聞いてゐると、



『ガミ張れとは、覗くことだ。』と云ふ言葉がハツキリと聞えます。

『ハハア、こりや泥棒が狙つてゐるな。あの節穴から覗かうと云ふのだらう。よし〳〵、をいつ等を内へ這入らせずに、びつくりさせて追ひ拂つてやらう。待てよ』と、あたりを見廻すと、恰度幸ひ店に將門眼鏡と云つて、一つ物が澤山に見える眼鏡がしまつてあるのに氣が附きました。で、急いでそれを出して來て、節穴へ當てがつたまゝ、自分は今まで通り知らん顔をして手習をしてゐました

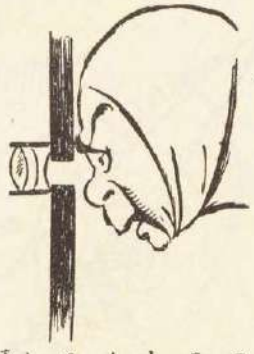
そんなことは夢にも知らぬ泥棒の方では、親分が、

『辰、まづお前ガミ張つて見てくれ。』と云つたのに對して、

『承知しました。』と答へて、そオッと節穴から覗いて見ました。

すると、

『おや　大變な子供の數だ。親分、こゝは眼鏡屋で



はなくて、手習師匠の家のやうですよ。それにしても、をかしいぞ。誰も彼もみんな同じ顔をしてゐる。一人が墨を磨ると、みんなも一緒に墨を磨る。一人が筆を執ると、みんな同じやうに筆を執る。をかしいぞ。』

これを聞いた親分は、

『辰、お前目がどうかしたんだらう。――新米、今度はお前ガミ張つて見ろ。』

『へい。』

中では、小僧が、

『今度は新米だな。新米なら、將門眼鏡ぢや駄目だかうしてやらう。』と。急いで將門眼鏡を外して顯微鏡に代へました。さうして自分は急いで顔を墨で眞黑黑に塗りつぶして、兩手の爪を開いて、齒を剝き出し、前の方を睨みつけて、恐い顔をして立ちはだかりました。

外では、新米が、

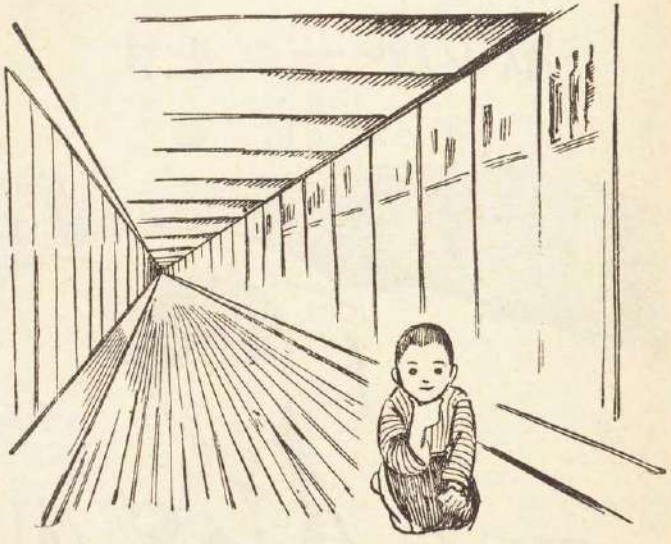
『ようし、今度は俺がガミ張つてやらう。』と云ひながら、恰度節穴へ目を押し附けたところでした。が、覗いたかと思ふと、

『ヒャア、化物屋敷。おゝ、あの眞黑な顔の大きな奴、うん、あれは豹だ。親分、こゝは化物屋敷ですぜ。』

『シシ、どいつも此奴も目が眩んでゐる。やい、新米、そこ退け。俺がガミ張つてやる。』

中では小僧が、

『今度は頭か。頭ならまた變へてやらう。』と云ひながら、望遠鏡を持ち出して來て、遠く見える方を掛けました。望遠鏡は正面から見れば遠方の物が手に



屆く程近く見えますが、その逆で、逆さまに見ると、つい手許にある物も、一里程遠くにあるかのやうに見えます。

ところが、外ではそんな仕掛の眼鏡が、つい目の先の節穴に當てがはれてゐるとは知りませんから、頭が覗くと、辰と新米とが兩方から、

『親分、大勢が手習をしてゐるでせう。』

『親分、化物屋敷でせう。』と聞きました。

しかし、親分はそれには答へずに、

『おい、もう何時だ。』

『さあ、無駄に時間をつぶしたから、もう彼此三時半頃でせう。』

『そんなら、とても今夜はこゝへは這入れない。』

『なぜです？』

『まあ、覗いて見ろ。廣い家だ。勝手先へ行くまでには、夜が明けてしまふから。』

（をはり）

オルゴールの歌

小田織星

母人の多くは年々にくり返へさるる我子の誕生日を此世なく樂しい日として喜ばれます。それは今迄知らなかつた子を思ふ親の心の生れ出た日で、それに又何かと心配を重ねながらも日一日と育てゝ來た誇りも加はつて、其日我子の姿に母の心を見出すためでせう。

眞一の母も同じ樣に其喜や誇りを、ふくよかな胸に抱いて今日の誕生日を祝はうと朝から弄具店など、あれやこれやと其贈り物を探し歩いてゐましたが、とある樂器店の前で飾窓の中に在つたオルゴールにふと目を止めたのです。

『さうね、これがいゝわ、きつと眞一が喜んでよ……』と、そのままピアノ、オルガンなど所挾いまでに置き並べられた店の中に入つて行きました。

間もなく店員が持つて來たオルゴールは型こそ小さなものでありましたが中に仕込まれた曲は、優しい母の心そのまゝを歌ふ樣な、彼のブラームスの子守唄であつたのです。眞一の母は思ひがけない發見を喜びながら早速それを買ひ求め急いで家に歸つて來ました。眞一が母から其品を受け取つた時の喜びは今更申すまでもありません。

オルゴールは美しいクルミの木の小箱の中にたゝまれて、蓋を開けると金色や銀色の機械が恰度お伽の國の宮殿でもある樣に光つてゐます。

それからと言ふものは眞一は暇さへあれば中をのぞいて見ますが、其度に驚くことは、この宮殿には何か不思議の命がひそんでゐて、蝶の樣な鍵でゼンマイを卷くと、急に全ては息ふき込まれた樣に働き出し、齒車から齒車へと傳はる力に機械は定められた速さで、それ〴〵仕事を始めますが、やがて心をそゝる音樂となつて小箱の中に夢の樣に鳴りひびくのです。

眞一はそれを見てゐると單に機械の仕業とだけ思ひません。深い智慧がそこに籠つてゐてクリートの迷宮にも似たシリンダーの中を辿りながら妙へなる曲は人の心に響いて來るのだと思つてゐました。

其夜から眞一は、いつもオルゴールを枕もとに置いて、そのゆつたりと廣い牧場を渡つて來る樣な子守唄を聞きながら眠りに就くのを樂しみにしてゐます。今宵はいつもより遲く床に入りましたが南の窓にくぎられた秋の空には星が時々雲間に見え蔭れして、外の叢では小石を洗ふ水の音かとこほろぎがオルゴールの唄につれて、いつしか眞一を遠く夢の國にさそつて行きました。

はら〳〵と露の重みをふり落す木の葉のしづくに顔たゝかれて、ふと目を覺ますと、そこは光りも暗い夜の森、さつと梢を渡る風の冷たさ、頭の上にほ

の白く蟲の卵をつけたわくら葉がフラ〳〵とゆれてゐる。眞一は半ば自分を疑ひながら立ちあがつた。足もとには只一條の細徑が眞暗な森の奥へと糸を引いた樣に消えてゆく。見あぐれば上は不整ひの枝に蔽ほはれて處々まだらに夜の空がぼんやりと滲み出してゐる。眞一は何時の間にか一人この森の中に寢てゐたのであつた。

『をかしいな、いつ僕はこんな所に來たのだらう？ほんとに不思議だなあ』

と獨り言して暫くあたりを見廻はしてゐたが、かうしてゐても仕方がないと何處へ行くと言ふあてもなく其細路を奥へ歩き出した。

死人の墓にも似た森の靜けさ、何處やらで梟がホーと鳴いてゐる　何か頭から冷い水でも浴びせられた樣にゾッと身ぶるひをした時突然足もとでガサッと枯れ葉が鳴つた。今まで血管の中を流れる血球の擦れ合ふ音まで聞えるかと思ふ程鋭敏になつてゐた眞一には、それがびつくりする程大きく聞えた。さうして思はず飛びあがる樣に其場に立ち止つた。すると葉を踏む音は又ガサッ、ガサッと二ッ三つ續いた。眞一は息をこらして音するあたりを見ると、不思議や老樹の根もと埋れた木の葉の上に夜目にも知られる白ひげの小人が一人立つてゐてジロ〳〵と此方を眺めてゐる、豫想しなかつた眞一は驚いて聲をあげた。

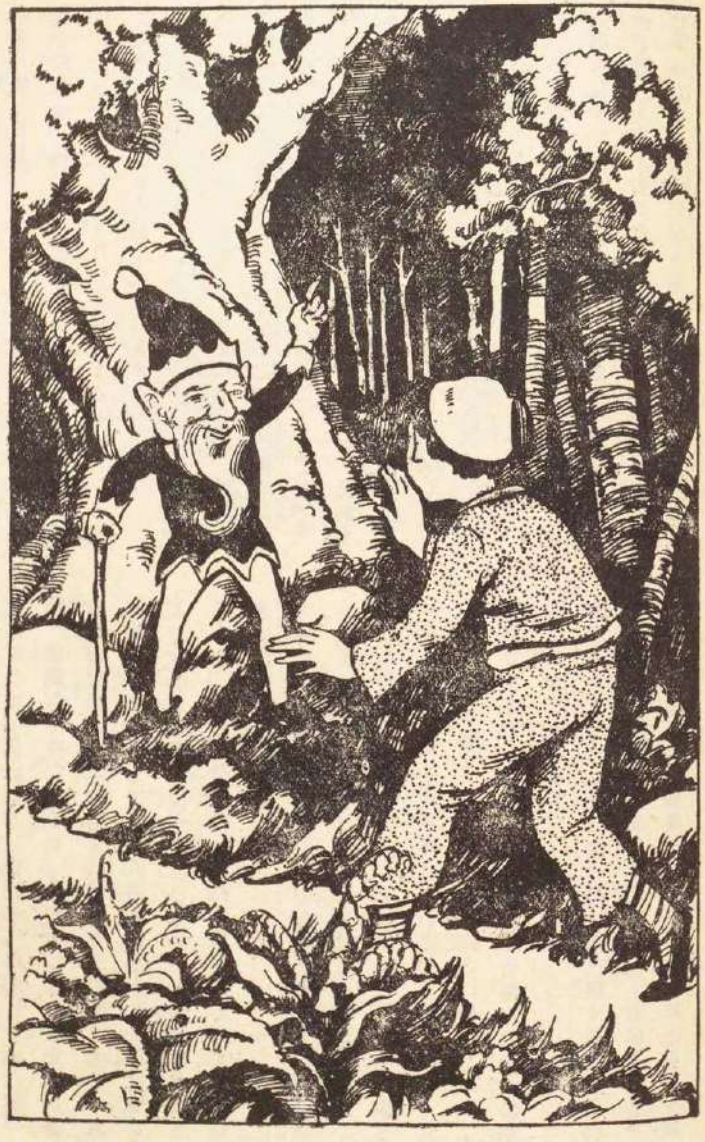
『誰れだ！　お前は？……』

すると小人は別段恐れる樣子もなく思つたよりは大きな聲で、

『さう言ふお前は誰れだい？　今迄見かけた事がないが一體其處で何してゐるのかね？』

とあべこべに聞く

斯う話かけられて見れば、別段驚く程の事でもなく、それに今まで人一人にも遇はず淋しかつた矢先なので反つて嬉しい氣持がして、



『あの僕は自分でも、どうして此處に來たのか解らないのだよ。目を覺ますと森の中にゐたのだが、僕はさつきから家に歸りたいと思つてゐるんだ。一體どちらへ行つたら人里に出られるの？』

小人は一寸そり身になり顎のおひげを扱いたが、

『フフーンさうか、お前全く不案内者だね、ここはお伽の森だよ。どつちへと行つた處で別段決つた方角なんて無いさ、東と言つた方が西になる事もある、今お前の歩いて來た道でも何處へ行くと言ふ目あてもなく限り無しに續いてゐるので永年森に住んでゐる私さへそれを行つたら、何處へ出るのか知らないよ、それにお前の言ふ人里つて言ふのは、あの人間の住んでゐる所だらう？　ハッハ、、私は今まで、ついぞ人間のゐる處にどうしたら行けるか考へて見た事もなかつたがね：：それに人間つて言ふのは隨分我儘だと言ふぢやないか自分の都合のよい樣な事ばかりして、お金にならない物と來たらまるで馬鹿にしてゐると聞いたせ、俺はそんな淋しい處は眞平だ　此處ぢや花にも石にも命が有つてな、それが皆自分の思つてる事を有りの儘に話し合つてゐる、私は此の年になるまで一日も淋しい思をした事は無いよ、お前も人里の事など考へないで此森の中にゐてごらん、どんなに面白いか知れやしない、惡い事は言はないからね』

眞一は小人の話に始めて自分の居處を知つた。さうして一種の好奇心さへ湧いて來たが其時傍の太い苦むした楢の木の枝で梟が又ホホーと鳴く。すると小人は一寸その方を振り向いて、

『ほう家で梟が呼んでゐる、歸らにやならぬ：：ぢやアバよ』と言ふとその儘枯葉を踏んで老木の空洞に入つてしまつた。

小人の去つたお伽の森は今は深い眠りに入つたのであらう。風も止んで草の葉一つ動くものもない。眞一はさてこれからどうしてよいものかまるで見當

がつかなくなつた　小人は森に居て見よと言つたものゝひし／＼と胸にしみる淋しさにいつか母の面影が心に浮んで二聲三聲『母さん』と呼ばずにゐられなくなつた　呼んだ其聲は黑い森に吸ひ込まれて力ないこだまと消えて行つたが、ふと耳をそば立てるとこだまの消えた森の奥からかすかに、とぎれ／＼の歌が聞えて來る。極はめてかすかではあるが確に誰れやらで歌つてゐる。眞一は急に元氣付いたそして歌ふ者の誰れかを考へる暇だになく辭もなく聲を頼りに眞一文字に森の中へと分けて入つたのである。

歌聲は一足ごとにはつきりと響いて來る。而も其ふしは何處かで聞き覺えのあるのに一層懐しい氣がして近よるほどに、とある明るく開けた草原に出た。空には細い月が懸つて銀の杖の樣に立ち並ぶ白樺の幹を青白く照らしてゐる。其木立の中、見れば京人形の姿した女が色こそあせたが振袖の模樣も美はしく露にしとつた袖ふり合はせ、ゆすぶりながら何ものかを求める樣に仰いでは歌ふのである。

『おゝお前は何處へ行つたの？　この母さんを一人殘して何處へ行つたの？　母さんの歌が聞えたら歸つておいで』と獨り言して又歌ひ出す。

あげ羽の袖に　色そめて
すみれ、たんぽぽ　げんげ草
春がつくつた　花みつを
お前のおみやに　買うて來た。
あの山越えて　野を越えて
羽の破れるも　いとはずに
お前のために　母さんは
重たいみつを　持つて來た。

女は又空を眺めたが、ほつと吐息しながら、『お前はどうしても戻つて來ないの？　母さんがこんなにお前を待つてゐるのに……』

と泣きじやくる樣に見えたが又弱々しい聲で歌を續ける。

このまゝ母は　秋風に
野末の霜と　凍えても
優しい春の　小鳥さんは
きつと……さうよ　きつと……

冬の向ふで　待つてゐる
冬の向ふで　待つてゐる

と今はあきらめる樣に繰り返し歌つてゐたが其中段々聲が細れて消えると共に女の姿も雪の溶ける樣に消え失せて　秋枯れの名も無い草の葉の上に、羽も破れた蛺蝶が横ばつてゐた。

それを見た眞一は、もう堪らない淋しさに襲はれた。さうして胸にあり〳〵と現はれた母の笑顏。

『おゝ、お母さん〳〵』

と手を高く差しのべ大きな聲で母を呼んだ。

眞ちやん、どうしたの？

と優しい聲にゆり起され　びつくりあたりを見れば眞一の母は枕元に笑ひながら坐つてゐる。今迄のそれは一場の夢であつたのです　けれども眞一の耳には今なほ蛺蝶の歌が日頃聞き慣れたブラームスの子守唄と結ばれてはつきりと殘つてゐました。

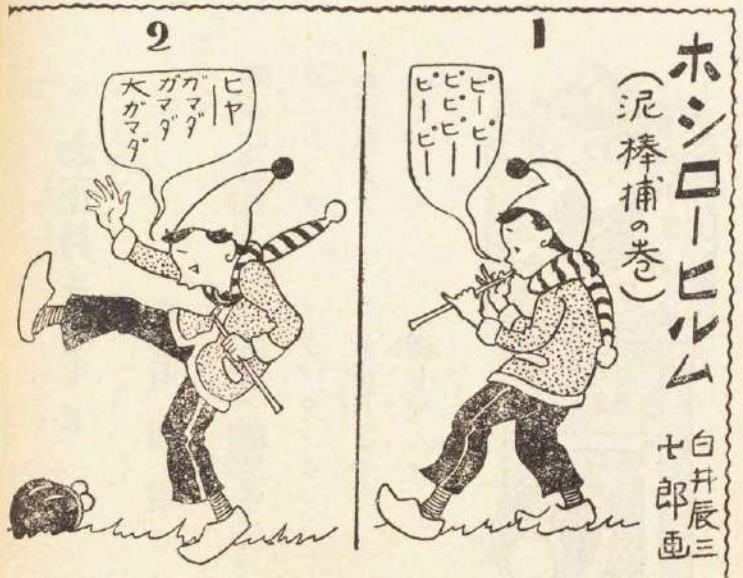
お正月まで（推薦）

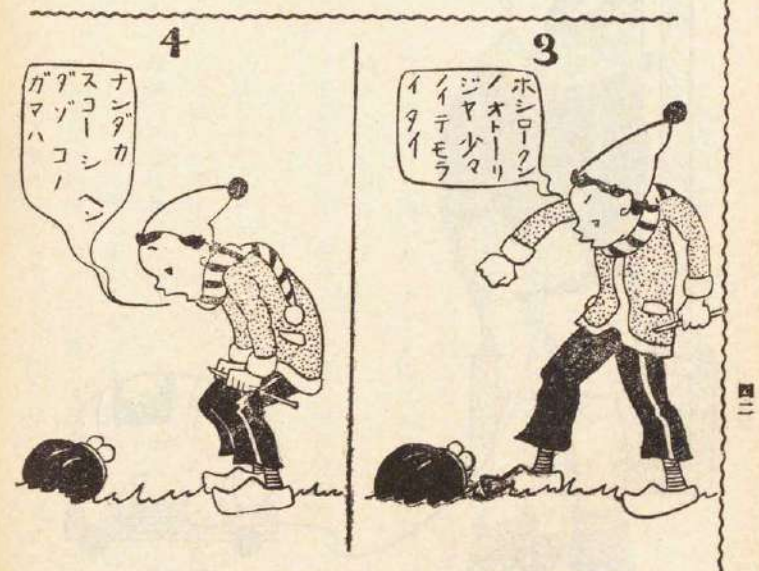
夷石龍樹

時計の足音　早足　驅足
タッタッタッ　タッタッタッ
お正月まで　お正月まで
いそがんせ　廻りやんせ

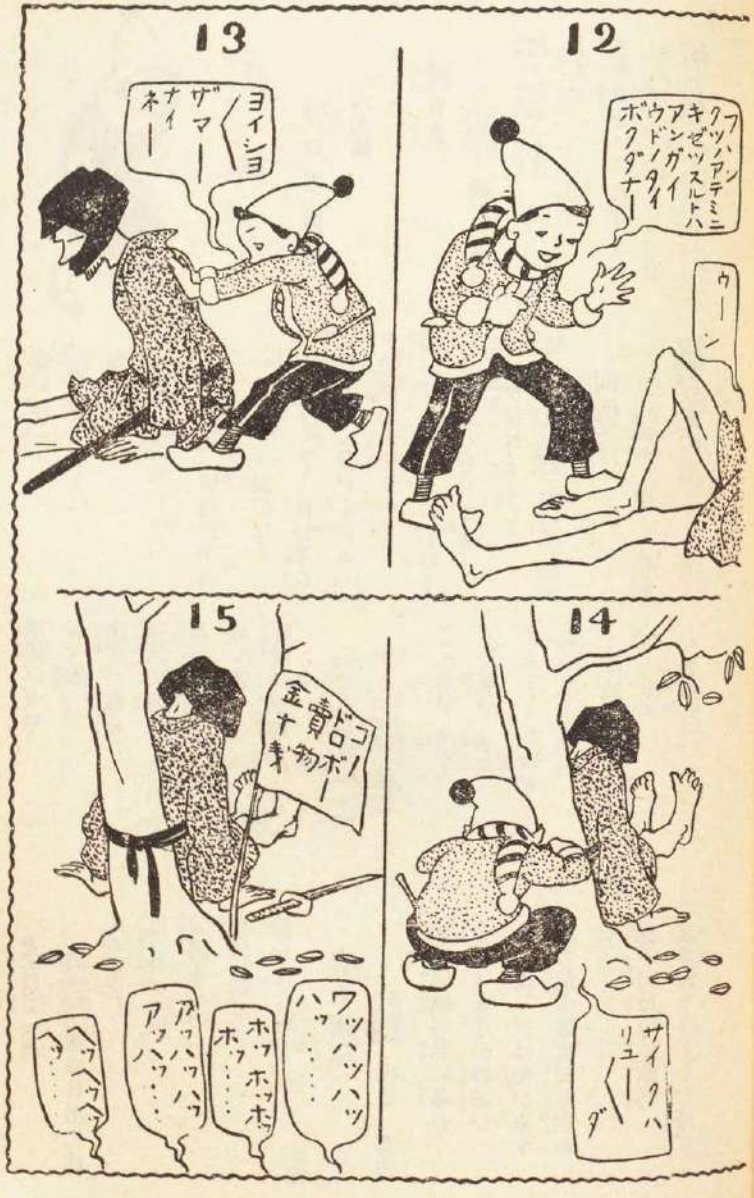
ホシローヒルム
（泥棒捕の巻）

白井辰三七郎画





9
トボケルナー イマ
グズ〳〵ユハズニ
ヒロッタモノヲ オイテユケ
オカナケリヤコレダゾ
何御用デス カ？
10
サテハキサマハドロボーダナ
ヘン！ ドロボーニコレヲ
ワタシテ オタマリコボシグアル
モンカイ コノ本ホシローノ
顔ガスタラー
11
ナニヲ！
クッナト
クラヘ！


12
フッハアテミニ
キゼッスルトハ
アンガイ
ウドノタイ
ボクダナー
ウーン
13
ヨイショ
ザマー
ナイ
ネー
14
サイクハ
リュー〳〵
ダ
15
コノ
ドロボー
金貸ス物ナ
ワッハッハッ
ホッホッホッ
アッハッハッ
ヘッヘッヘッ

童謡

野口雨情選

（大人篇）

渡り鳥

大阪府穴師村　華江　宏佳

渡り鳥やアー
とんだ
三ケ月さアーんを
とんだ
渡り鳥やアー

ないた
芒の穂のやうに
ないた

鶴の村のうた

山口縣三輪村　伊藤三千夫

ツルカア〳〵　鶴がなく
つるがなく〳〵　日が暮る
八代の里に日がくれる
夕焼赤い山のうへ
鶴がなく〳〵日がくれる
山は氷上の七不思議
赤い夕陽は七ふしぎ
鶴ねる山は七ふしぎ

河原で

中京市丸の内　原　勝利

河原の風に
凧揚げりや
おゝ寒
淺間が眞白だ
河原の風に
耳が鳴りや
おゝ寒
赤城が夕焼だ

どん栗

佐賀縣久間村　齋藤　利治

どん栗やまの
どん栗が
どん〳〵お山を
すべこけて
くぼ地で
伸び伸び
めを出した

正月こい

大阪市中之島　横井日出之進

コホイ〳〵
正月こい
天狗さんの
羽にのって
飛んでこい

賽の河原

山形縣櫻澤校　山口　喜市

賽の河原の秋の暮れ
七つなる子が砂遊び
一つ積んでは母が來ず
二つ積んでは父も居ぬ
賽の河原の地藏樣
三つ積まうとした時に

めんめん盲目の子が一人
河原の砂を行きました
賽の河原で砂遊び
いちんち朝から石たゝき
ちよんちよん日暮れに飛
んだけど
母さん居ないで泣ました

道眞さま

愛知縣一宮市　森　ほたる

筑紫へ流れた道眞さま
今宵も月が寄ござる
筑紫で月見て道眞さまの
お目々は月よりまだ青い
筑紫へ流れた道眞さまの
梅は今年も咲いたぞえ
梅の匂ひはは〳〵と
筑紫へ流れて泣いたぞえ

お茶畑

高知市帶屋町　羽田　敬和

ホロホロ小鳩は
豆畑
茶をつむ娘は
お茶畑
茶の木畑に
ちらちらと
茶の木に實れて
ほゝかぶり
ホロホロ小鳩は
豆たべた
茶の木畑ぢや
茶をつんだ

霜枯れ

茨城縣八原村　櫻木袈裟彌

田圃は霜枯れ
かんからかん
畦まで
枯れた
ほういほい
河原も霜枯れ
かんからかん
石まで
枯れたぞ
ほういほい

あられ

群馬縣粕川村　青柳　花明

あられ
さらさら
笹やぶ小やぶ
雀さん
お米が
降つて水たぞ

出目助さん道中記

（篇　長）

三島霜川

三

（前號の梗概は一一七頁にあります）

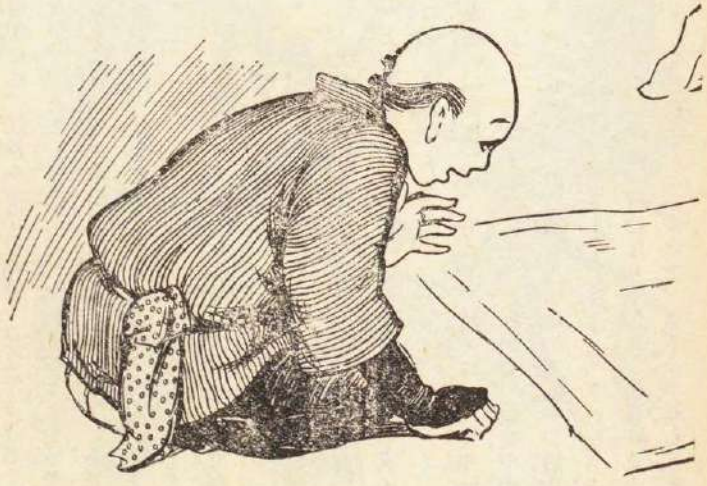
東海道五十三次――その雙六繪をひろげて御覽なさい。

すると、江戸の日本橋を振出しに、品川、川崎、神奈川、程ヶ谷、戸塚、藤澤、平塚、大磯といふやうに、だん〳〵と西の方へ進んで、京の五條の橋が上りになるのでございます。

それを、あべこべにしますと、京の五條の橋を振出しに致しまして、大津、草津、石部、水口、坂の下、關、鈴山、庄野、石薬師、四日市、桑名、――さういふやうに、だんだん江戸の方へ進むのでございます。

出目助さんは、つまり、この五十三次のうちの大津の宿にゐたのです。

都筑家のお姫様は、高姫と有仰いました。お宿は「本陣」と云ひまして、大名や身分のあるお待た



ちが泊る、格式のある、立派な旅籠屋でございました。

出目助さんは、お姫様のお召で、その『本陣』へ出かけて行きました。そして、今度は、地べたではなくて、立派なお座敷のお次の廊下のやうなところへ坐らせられました。

そのお座敷には、百目蠟燭が、ぴか〳〵光る燭臺に、幾つとなく灯されて、さながら眞晝のやうに、明く、パッと耀いてゐました。

そこには、金屏風を後ろにして、古めかしいお雛様よりも、もッと〳〵お美しいお姫様が、お行儀よく坐つておいでになりました。そして、そのお傍には、頭の眞つ白な老女が、おかひどりを着て、むづかしい顔をして控へて居りましたが、その他にまだ、恰度『叔母さん』と云はれるほどの年恰好の中老が、二人。これも、おかひどりの裾を廣くさばいて、つつましやかに、お附添申して居りました。さうして、その兩傍には、江戸みやげの錦繪で見たやうな若い腰元衆が、ヅラリと居並んで、お褥は緞子・曲彔やお手文庫は金蒔繪——出目助さんは、まるで金に輝く夢のお國一にでも來たやうな心もちでございました。

『ヤ、がうぎだな。大名のお姫様つて、こんな立派なもんかな』

と、さう思つて、きよろ〳〵、そこらを見廻したりして、びつくりして居りました。そして、『膳所の殿様』よりも、このお姫様の方が、よつぽど、えらい方のやうに思ひました。

お姫様の『御用』は、やはり、第一に『馬子唄』をうたふことでございました。それから老女や中老が、かはる〴〵、出目助さんの身の上話や、道中筋の話、馬方仲間の話——そんなことを、それから夫へと、いろ〳〵おたづねになりました。出目助さんは、少しも、ぐづ〳〵しないで、ささくに話しさし

た。と、云つて、餘計なことは、一と言も喋りませんでした。たづねられたゞけのことを、はき〳〵と、有りの儘にお話したゞけのことでございました。

それが、たいそう、お姫様のお氣に入りました。そして、始終、にこ〳〵なさいまして、何時までも〳〵、聞いておゐでゞございました。老女や中老たちはまた、互に顏を見合はせては、不思議に、それを悅んで居りました。といふのは——後になつて、出目助さんが、腰元たちの噂話から聞いたことなんですが、一たい、お姫様は、江戸にお出でになるのをお嫌ひになつて、お國をお立ちになつてから、づつと、御機嫌が惡かつたのださうでございます。それが、

今夜、出目助さんの馬子唄やお話のお伽がお氣に召して、いつになく、お顏までがはれ〳〵しかつた――それを、老女や中老たちが、悅んだのでございました。

かうして、出目助さんのお話も、もう『おしまひ』になりかけました時分に、『よう、面白い話をしやる！　そして、そちの名は、出目助といふのかいな』

と、むづかしい顏をした老女が、ふいと、さう、たづねました。

『はい』

と、出目助さんは、目をくりッ〳〵させて、猶豫なくこたへました。

お姫樣も、中老も、腰元たちも、くすり〳〵笑ひました。

『をかしい名ぢやの。親から貰うた名かいな？』

と、老女はまた、眞面目くさつて、たづねました。

『いえ〳〵……』と出目助さんは、大きな頭をふりました。そして、『眞ンとの名は、喜之助といふんだよ』

と、無雜作に云ひました。

『喜之助といやるのか。好い名ぢやな』

『でも、皆なが出目助〳〵ッて云ふから、出目助になつて了つたんだよ』

と、出目助さんは、やりつぱなしに――どつちだつて、かまはないといふやうに云ひました。それが、何んとはなしに、ひようきんでございました。

お姫樣は、またお笑ひになりました。つまり、出目助さんには、どこかに、さうして他に好かれる、『おあいけう』が、自と備つてゐたのでございました。

四

春の月は、朧々に霞んで、靜な、ノンドリとした夜でございました。

出目助さんは、結構なお菓子と、それから二さしのお鳥目とを戴いて、ホク〳〵悅びながら、家へ歸つて來ました。

その途々も、『お祖母さんが居たら、さぞ、悅んだらうな』

と、さう思つて、出目助さんは、何度となく、ふところのお菓子を、そつと、いじつて見ました。

しかし、その『悅しい』心もちも、古い〳〵小さな家の戸口に立つた時分には、もう、すつかり消えて了ひまして、『おいらは、眞んとに、ひとりぼつちだ』

と、只、その事ばかり考へて居りました。そして、『おいらには、どうして、母あさんも居ないんだらう』

と、思つても見たりして、うなだれて、ションボリとして了ひました。

何處かで夜鴉が、二聲ほど啼きました。それは、淋しい聲でございました。

出目助さんは、その啼聲のする方を見上げました。そして、何んといふことはなしに、堪らなく悲しくなつて來て、シク〳〵泣出して了ひました……と、すぐ傍の厩のなかから、『ごん』の藁を踏む音が、かさこそと、聞えて來ました。

『ごんよ、起きてるのか』

出目助さんは、一人語のやうに、さう云つて、厩の方へ行きました

その足音を聞きつけたのか、『ごん』は、その長い顏を、ませの外へ、ひよいと突出しました。

『お前も、淋しかつたらうな。よし〳〵……』

と、出目助さんは、すりついて來るやうにする、『ごん』の鼻頭を撫でゝ遣りながら、『おいらは、結構なお菓子を、どつさり貰つて來たんだけれど、お前が、たべられないから、つまらないよ。お前が、人間だと好いんだがな』

と、シンミリと、さう云つて聞かせました。そし

て、瞼に流れて來る冷い涙を拭きながら、シミ〳〵と、『孤兒』の淋しさを感じたのでございました。

そこへ、もや〳〵した夜氣に、ぽつと浮んだやうになつて、提燈の火影が一つ、大急ぎでやつて來ました。人は、二人でございました。そして、その一人は、お姫樣のお供をして來た宰領（荷物の世話をする役）で、一人の方は、出目助さんと馴染の『馬借』の親方でした。

二人は、出目助さんの所へ來たのでございました。

『お姫樣が、お前に、江戸まで通し馬で、お供せえと有仰るのぢや。どうぢや、行かないか』

と、『馬借』の親方が、まづ、さう云ひました。

『でも、おいらの馬は跛だよ』

と、出目助さんは、格別行きたくもないやうな返事をしました。

『跛は承知だ。荷物は輕いのをつけさせる……事によつたら、つけないでも、かまはない。お姫樣の强つての御所望ぢやによつて、お供をしてくれ』

と、宰領は、是非に、お供をしてくれるやうにと、賴みました。

出目助さんは、ちよつと考へてゐましたが、

『さうかえ。それじや、お供をするよ。どこへ行つたつて、同じだ！』

と、すつぱりと——竹を割つたやうに氣もちよく云ひました。さうして二人は、『急がせて氣の毒だが明日の朝は、六つ半時までに、問屋へ來てくれ』と、云つて、歸つて行きました。

五

翌くる日になりました。

街道筋には、菜の花、桃の花、唐崎の松も朧に霞んで、春の深い近江路——その街道を、都筑の姫の道中行列が、賑に、そして、しづ〳〵と練つて行きさした。

まづ、眞つ先きに、奴が、かつぐ挾箱、その太紐の紅は、牡丹の花かと間違へて、白い蝶がヒラ〳〵と、ついて行く。それから、長持——それが、芽出度〳〵の若松樣よの、長持唄で、幾棹となくつゞきました。次に、袋をかけた研出し蒔繪の柄の長刀を先きに立てゝ、お姫樣のお駕籠、その兩脇には警固の侍が、いづれも菅笠、ぶつさき羽織、たつつけ袴、脚絆に甲掛——さういふ揃つた旅姿で附添ひまして、その後から供頭の菅谷半左衞門が、槍を立てゝ、これも旅姿で、馬に乘つてつゞきました。さうして、その後に、侍や若黨が廿人あまりと、三挺の駕籠——それには老女と中老とが乘つて居りました。その後へまた、廿人ほどの腰元と、荷をかついだ仲間小者が拾五人あまり、凡そ百人あまりの同勢の後へ、三十幾駄のおつゞら荷物がつゞいて、その馬の鈴の音が、ぢやらん〳〵と、拍子を揃へて賑に鳴りました。その拍子に合はせて、出目助さんは、ひよッこり、ひよッこり、『ごん』の口を取つて、後について行きました。

さッても見事な

そんれは
おつゞら馬や

七つ蒲團に

そんれは
曲彔据ゑて……

出目助さんは、好い心もちになッて來ると、そんな馬方唄を、うたつたりしました。さうして、づッと、行列の先きの方を見渡しては、『どうも、すばらしい行列だな』

と、感心して、自分も、その行列に入つてゐるのを、何んだか、肩身の廣いやうに思つて居りました。

お姫樣の行列は、その晩、水口といふ驛に泊るこ

とになりました。宿はやはり本陣でございました。

出目助さんは、他の馬方たちと一緒に、問屋場に近い『下宿』と云つて、汚い宿屋に泊りました。『ごん』に秣をやつたりなどしまして、一と休みして居りますと、そこへお姫様のお使が參りました。さうして、その晩も、本陣の立派なお座敷へ行つて、お姫様のお伽――つまり、馬方唄をうたつたり、いろいろなお話をしたりすることになりました。

宵が過ぎて、夜も何時か、亥刻近くになりました。

その頃まで、出目助さんは、話をしたり、うたつたりして、おしまひに、懐中に大切にしまつてゐた道中双六と、投子――その四角な片面々々に、一、二、三、四と目を打つた投子とを取出して、それを双六の上に轉がして、双六の打方をお姫様の御覽に入れました。

この道中双六の繪は。東海道五十三驛の繪でございました。そして、その、やり方は、やはり、めい

めい投子を轉がしては、その出た目の數だけ、驛々を進むのでございました。只、今のと少し違つて居りますのは、振出しが、京の五條の橋で、上がりが花のお江戸になつてゐるだけのことでございました。

この双六の遊が、たいそう、お姫様のお氣に入りました。それで、御自分も、この遊をなさいまして、むづかしい顔の老女も、中老も、出目助さんも、それから腰元たちまでが、かはるゞ〳〵お仲間になつて、お相手をすることになりました。すると、お姫様が、二度もつゞけて、一番にお上がりになりました。

お姫様は、大悦でございました。そして、『もう一度、もう一度』と、有仰つて、いくらやつても、お飽きになりませんでした。いや、お姫様ばかりではありません、老女までが、畳の疲れを忘れて了つて、夢中になつて居りました。さうして、うか〳〵と夜を更かして了ひました。

恰度、出目助さんが、お暇をして歸らうとする時でございました。隣りの旅籠屋の前あたりで、犬が變に陰氣な啼聲で、三度ほどつゞけて啼きました。

『嫌な啼聲だな』

出目助さんは、さう思ひました。そして、何んだか氣味の悪いやうな何か『事』がありはしないかといふやうな　ある『怖れ』におびやかされました。

しかし、それは、眞ンの僅の間のことで、出目助さんは、すぐ、平氣になつて了ひました。そして、勝手口から出て　表、式臺の方へ廻つて行きました。そこらはもう　ヒッソリ寢しづまつて、半時毎に廻る夜警の拍子木の音が、これも、變に淋しく、中庭の方から聞えて來ました。『何んだか、變な晩だな』

出目助さんは、また、さう思ひました。

その晩も、ノンドリと、春らしい、いかにも静な晩でございました。

式臺口には、まだ高提灯が、物々しゝ灯れて居りました。そして、そこには、お姫樣のお駕籠が、いつでもお召しになれるやうに支度をして、傍の方に片よせて据ゑてありました　雨洛のところには、老女や中老の駕籠も三挺　並んでゐました

出目助さんは　うそ〳〵、そこへやつて來て、ふと、お姫樣のお駕籠に目がつきました。

『やア　お姫樣のお駕籠だ。立派だな』

と、ひどく感心して、出目助さんは、そこに立佇まつて了ひました。そして、その立派なのが珍らしくて　引きずられるやうに、うか〳〵と　その傍へ寄つて行きました　恰度、そこらには、人の影も見えませんでした。

そこで、裡を覗いて見たり、戸をあけたり、閉めて見たりしてゐるうちに、つい、柔かな褥の上に坐つて見たくなりました。——それが、眞ンのちよッとした出來心でございましたが、不思議に、我慢が出來ないほど、坐つて見たくて堪らないやうになりました

『よす方が可いや　もし、誰かに見つかつて、叱られちや充らない。第一勿體ないからな』

と、さうも思つて見ました。さうして、よほど慾圖々々してゐましたが　しかし、惡いと知りながらも、やつて見たい心もち——その心もちに負けて了つて、とう〳〵、つッと、入つて、ちよこなんと坐つて見ました　と、柔な褥が、ふウわりとして、何んとも云へぬ快さ——まるで、鶴にでも乘つたやうな心ちでございました

『好いな！』

出目助さんは、ック〳〵さう思ひました。そして、にこ〳〵しながら、『おいらも、こんなお駕籠に乘つて見たいな』

と、大得意で、兩の腕を拱みました。そして、背かを後ろの方にもたせて、ぐいと、反りかへつて見ました。

『エ、見つかつたら、あやまれ。少らく、かうしてゐて遣らう』

出目助さんは、たいそう、大膽になりました。そして、誰にも見つけられないやうにと思つて、そつと、お駕籠の戸を閉めて了ひました。とたんに、また、さつきの嫌な犬の啼聲が聞こえました。

けれども、出目助さんは、前ほどに氣にもかけませんでした。そして、兩足を伸ばしたりして、好い心もちになつてゐるうちに、いつか、ウト〳〵して、やがて、ぐッすりと寢込んで了ひました。

『狼藉者〳〵』

『いづれも、お出合なされ…』

『賊でござる、賊でござる』

『賊は多勢と相見えまするぞ』

さういふ、けたゝましい叫聲が、斷々に、あつちにも、こつちにも聞えて、バタ〳〵と、人の騒立てる物音、つゞいて、バリ〳〵、バタ〳〵と障子や襖の倒れる音……、チャリ、ッ、チャリ、ッと、斬結ぶ刀の刃音……『あれ、あれ——』と、腰元たちの泣き叫ぶ聲々——それが、入亂れ、ごッちゃになつて、まるで、この世が破壞される騒のやうに聞こえるかと思ふと、やがて、『うん』と、恐ろしい呻聲と共に、バッタリ、人の斬仆されるやうな響が、物凄く聞こえました。

出目助さんは、それを、恐ろしい夢に魘されてゞもゐるやうに、やゝ少らく、幻心で聞いてゐました。そして、ふッと、びつくりして　目を覺ましました。そこらは、只、眞つ暗でございました。

『ヤ……』と、出目助さんは、ちよつと變に思ひましたが、すぐに、自分が　お姫樣のお駕籠のなかに寢込んで居たのに氣がつきました　そして、その恐

ろしい騒が　夢ではないことも解りました。
『あッ、斬合だ……、大勢の斬合だ！……たいへんなことになつたな』
出目助さんは、胸さきがワナ〳〵顫へて來ました。
『ア、戰かも知れない、何百人ゐるか知れないな』
出目助さんは、たしかに、然うだと考へました、また、それほどに、あつちにも、こつちにも、斬結ぶ刀の刃音が聞こえました。そして　斬られて、苦む聲も聞こえて來ました　出目助さんは、やはり、恐ろしい夢を見つゞけてゐるやうな心もちでございました
するうちに、『お姫様は、どうしたらうな』
と、ひよつくり、お姫様のことを思出しました
と、同時に、『ひよつとしたら、お姫様、殺されて了やしないか』と、嫌なことも考へられました。そして、それが、心配で心配で、たまらなくなりました。その耳もへ、きやッと一聲、絹を裂くやうな女の悲鳴が、闇の中から突ッ走ッて來ました。

出目助さんは、惚つとして『あッ、また、誰か殺られた……、お姫様ぢやないか』
と、さう、思ひました
出目助さんは、もう恐ろしいのも何もれて、じつとして居られなくなりました。そして、ワナ〳〵する手をさし伸べて、そつと、お駕籠の戸をあけて、外の様子を覗はうとしますと、奥の方から、どかどかと、五六人の足音がして、それが、お駕籠のところへ集まつて來ました。出目助さんは、慌てゝ手を引つこめて、お駕籠の隅の方に、小さくなつて縮こまつて了ひました。と、誰か、さつと、お駕籠の戸をあけました
出目助さんは、ハッとして、前よりも、いつそ縮こまりました　外は、鼻をつまゝれても解らないやうな眞つくら闇でした。もう、月も落ちてゐたのでございます。　（つゞく）

狐の子（推薦）

仙波しげる

寒いこがらしが、びゆう〳〵吹き渡つてゐる夕ぐれでした。芒の原の中を、一匹の狐の子供が大いそぎで、お山の方家へ歸つてゐました。ところがあんまり、道を急いだので、つの間にかさつぱり方角のわからない所へ迷ひ込んでしまひました。どちらを向いても白い芒の花がゆれてゐるばかりでした。

狐の子供は悲しくなつて泣きながら細い道を走つてゐますと、石地蔵さんが、たつたひとり、しよんぼりと立つてゐる所へ出て行きました。そこで狐の子は大へん喜んで、
「お地蔵様、私のおッ母さんのゐるお山はどの邊でございませうか」といつて、道を尋ねました。
『狐の子供さんかね。　あなたのお家は、私の立つてゐる所から左の方へまつすぐに行らつしやい。二町ばかりも行くと、大きな白い岩が見えます。そこがあなたのおうちですよ』
お地蔵さんは左の手にもつてゐた、お團子を墓石の所へ置いて、ていねいに路を教へてあげました
其時狐の子供は、大へんお腹がすいてゐましたので、嬉しい事とは思ひながら、内證でそのお團子を取つて逃げました。

それを見たお地蔵様は、
『おい〳〵それは石のお團子だよ、駄目團子だよ』と申しました。けれども、狐の子供はそれをきゝませんでした。
その翌る日、山の中で、狐の子供は腹が痛いといつて、泣いてゐました。お地蔵さんの石のお團子を食べてみたからです

（作者住所　愛媛県温泉郡生石村北吉田馬場二）

幼年詩

やなぎ（推薦）

熊本縣荒尾北校尋二
海達公子

やなぎ

やなぎの
えだが
もつれたり
ほどけたり
してゐます

かひこ

私の
かひこさん
はことはことのあひだに
いとひいてゐます

くさぬき

花畠
つくらうと
おもつて
かたい土の
くさ
ぬきました

コスモス

コスモスの
そばに
たくさん
はえたくさ
みんな
ぬいてやりました。

ゆふだち

ゆふだち
やんで
日がてつた
白い
にはとり
こけこつこう

あり

大きなもの
ひいたあり
あつからう

まゆ

まつ白なまゆ
まるう
ひかつてゐる

山畠

むぎわら
ばちばち
けむりが
まつの木
おひこした

なつぎく

小さくさいた
かばいろの
きくのにほひは
にがいなあ

うめ

本箱に
入れておいた
あをいうめ
きいない
にほひの
し出した

かしはもち

かしはもち
むいたら
にほいひのした

かぜ

くもまで
とこいた
おみやの
まつの木
ざあざあ
ざあざあ
なつてゐる

やなぎ

おいけに
うつつた
やなぎのは
ひかつてゐる

かあちやん

せつかく
かいてゐた

かあちやん
うんうん
へんじしもつて
ねてしもた

なし

ひやしたなし
たべてゐたら
くだまきが
なき出した

きんぎよ

お池にしづんだ
きんぎよ
どうもせんけん
ういてこい

花うり

かみいよつたら
「お花いんなはらんか」と
うつて通つた

名鳥奇譚

名曲『嘆きの薔薇』

三井信衛

その二　兄弟の情

なたには兄様が……』

逸雄を乗せた自動車は、夕暮の町を眞直にお邸に向つて走つて行きました。すり替へられた九官鳥の籠を膝の上におきながら、逸雄はすつかりと淋しくなりました。

あゝ、何といふ恐ろしい世の中でせう　何といふ寂しい世の中でせう。人を疑ふといふことを知らなかつた逸雄は　何とも言へない厭な思ひに襲はれて行くのでした今日一日に起つたこの奇怪な事件は　今までは平和であつた逸雄の心を、すつかり亂してしまひました。人を疑ふといふことは惡いことだけれど、あの亞細亞蓄音器の二人も　また少年の芳雄も、逸雄の目には何となく迂散くさく見えるのでした　やがて自動車は音もなく、お邸の門前に着きました。それを知つて驅けつけたのは河野

でした。『やあ、逸雄さん、お歸りなさい吹込は如何でした？　無事に濟みましたか？』

『あゝ河野　』逸雄はにこ〳〵と元氣よく笑つて立つてゐる河野を見ると、急に胸が一杯になりました。『大變なことになつてしまつたんだよ。あの珊瑚がね　僕の知らない間に誰かの手で盜まれてしまつたんだよ。何うしたらいゝんだらうね……』

『えッ、珊瑚が盜まれた？　だつて、そこに持つてらつしやるぢやありませんか？』

『いゝや、これは珊瑚ぢやないんだよ……』

逸雄から鳥籠を見せられた河野は始めて心から驚いたのでした。

『おゝ、それぢや何時の間にか、このろくでもない汚い鳥と取り替へられてゐたんですな。ふうん……』

と腕を拱んだ河野は、考へ餘つたやうに歩いて行きました。逸雄もその後から從いて行つたのでした。やがて一室に入ると、初めて河野は口をきゝました。

『それで今日のことは、警察へも屆けたんですね。』

あゝ、屆けておいたよ。今に警察から誰かゞ訪ねて來るかも知れない』

『うむ……何にしても困つたことが出來またしね。虫が知らしたといふのか、先刻自動車が門を出る時に、何となく逸雄さん一人やりたくなかつたんだが……。こんなことゝ知つたら、僕が一緒に行くんだつた　何しろ、亡くなつたお父さまの　只つた一つの大切なお遺品ですものね。』

『あゝ……』

と逸雄は今更のやうに、深い溜息をついたのでした。けれども今はがつかりしてゐる時ではありません。父の遺品の名鳥を失つたことは、返すゞ〳〵もすまなく思つたけれど、一日も早くこの犯人を探し出して、珊瑚を取り返さなければならない時です。

『だが河野、僕は決してあれを、途中で盜まれたんだとは思はれないよ。僕は大切に確りと持つてゐたんだものね。』

『さうですとも、いや、河野には一寸思ひ當るところがあります。』
河野はぢつと目を瞑りながら答へました
『思ひ當る所つて　？』
『さうです。今まではあなたにも默つてをりましたが、實はこの市田のお邸に、害をしようとしてゐる者があるんです。』
『えッ、僕の家に害を・・・』
思ひがけない河野の言葉に、逸雄は驚いて目を見開きました。
『いや、お驚きになるのも無理はありませんが、そのことを申さうと思ひながら　逸雄さんのお心に傷つけるのがお氣の毒になつて、今まで秘してゐたのです』
もう黄昏の色がこの部屋にも迫つて、壁に沿つて置かれた石膏の像も、ぼんやりと白く漂つてゐました。河野は靜かに立ち上つて、電燈のスイッチを捻りました。灯の光は、いつになく二人の顏を蒼白く照らしたのでした
『逸雄さん！』突然河野は言ひました。
『えゝ？』
『あなたには一人の、お兄樣がおありなのですよ。』又もや突然河野は言つたのです。
えゝ　兄さんが？　僕に？』思ひもよらない河野の言葉に、逸雄は只茫然としてしまひました。『僕に兄さんがあるつて・・・本當の兄さんが？』
河野は默つて、肯きました。やがて三分五分　彼は部屋を立ち去つたが、手には一枚の紙を持つて入つて來ました。
逸雄さん、あなたはこの歌に、心おぼえはありませんか？』
河野はさう言つて、手にしてゐた紙片を逸雄の前に置いたのでした。それを手にとつて眺めた逸雄は　思はず『うゝむ　と低く聲を出したのでした　それこそ二三時間前、あの芳雄の唄つた歌でした。芳雄があれを唄つた時に、何故かしら逸雄は何故かで聞いたことがあるやうに思つたが、それでは今河野の言つた兄さんとやらが　逸雄の小さい時にそれを唄つてゐたのでせうか？
『おゝ河野、僕はこの歌に覺えがあるよ。ずつと小さい時、いつも誰かから唄つてもらつてゐたやうに思ふよ。』

『さうでせう。やつぱり小さい時の記憶といふものは、殘つてゐるものですな。その歌はお兄さんが御自分でお作りになつて、そして始終唄つてゐらしつたんです。』
さうして、お兄さんは何といふ名？』
芳雄さんと言ふんですよ。』
『えッ！』
又も逸雄は、驚いて

かう聲立てました。

2　意外な唄聲

芳雄と云へば、先刻お庭で友達になつたあの少年と同じ名ではないか。しかもあの芳雄は、今河野の示した歌と同じ歌　唄ひ、その上何故かしら謎のやうな言葉を殘して行きました　恰度年のころも逸雄よりは三つ四つ上だし、それが兄さんではなかつたかしら？けれども何故その兄さんは　これまでの永い年月の間、市田の家から離れて暮してゐたのだらう？さうして又、何故突然今日來たのだらう？

逸雄の胸にかうした疑問が、ぐるぐると渦のやうに起つた時、河野は靜かに語り出したのでした。

『今までは御心配をかけてはならないと、秘しに秘してはをりましたが、今は何も彼もを申さねばならない時が參りました。さあ、河野のお話し申すことを、何卒靜かに落着いてお聽き下さい。』

逸雄はぢつと膝に手を置いて、河野の語るのに耳を傾けました。

實は逸雄さん、お兄さんの芳雄さんは今から十年ばかり前、恰度あなたが二歳の折にお行方が知れなくなつたんです。』

『お行方が？』

『お兄さんのお行方が知れなくなつてから間もなく、お父樣はお亡くなりになつたのです。お父樣がお亡くなりになつたのも、その御心配が元でした　：』

逸雄の胸はだん〳〵と悲しみに溢れて來ました。それと共に彼の目には、あの芳雄の姿がはつきりはつきりと映つて來るのでした。

『お父樣がお亡くなりになる時、あなたのお母樣やこの私に　どうか一日も早く芳雄の行方を探してくれと、くれぐれも御遺言なさいました。けれども幾月經つても〳〵、そのお行方はわかりませんでした。：：そして到頭お母樣も御心配とお悲しみが元で、お亡くなりになつてしまひました：：』

『あゝ……』

いつしか逸雄の目には涙が溢れ遠くの梢で啼く夜の鳥の聲が、哀しく淋しく聞えて來るのでした。

『河野、一體どういふ風にしてお行方が知れなくなつたのか、それを詳しくお話しておくれよ』

『はい．．それは恰度、公會堂で催されたお父樣の音樂會の日でした。芳雄さんはお父樣に似て大の音樂好き、常々からお父樣に色々の曲を敎はつておゐでになりましたが、それがもう立派に御上達なすつたので、愈々その日お兄さんは、舞臺に立つて獨唱をなさる筈でした。獨唱は大成功で、公會堂の中は割れるやうな喝采でした。すると音樂會が終つて間もなく、立派な紳士が訪ねて來て、お兄さんの獨唱が聽きたいから家へ來てくれと言つて、お兄さんを自動車に乘せて公會堂を出ましたが、それ切り何の音沙汰もないのです。』

『さうしてその紳士は？』

『勿論、何處の誰だかわかりません。その人の言つた處を調べたが、それは眞赤な嘘でした。それから警察へも屆けて、八方手くばりをして探しましたが、あれから十年經つた今になつても、何の手掛りさへないのです。』

『おゝ、そんなこととは、僕少しも知らなかつたよ。だけど河野、僕には一つ不思議なことがあるんだよ：：』

と逸雄は、お庭で知つた芳雄のことを話さうとした時、不意に軒下に釣してあつた、あの掏り替へられた方の九官鳥が、高らかに歌ひ出したのでした！

僕の可愛い弟は
黑い瞳に紅い唇　：

おゝ、それこそは、あの芳雄の唄つた歌ではないか！　今河野の示した、紙に書かれた兄の歌ではないか！

3　奇怪に續く奇怪

『おや！』

『おや！』

九官鳥の唄聲が進むにつれ、二人は只大きな目を睜つたまゝ、お互ひに顏を見合せました。これは又、意外に不思議な出來事だ！が、九官鳥の唄聲が終るや否や、河野は鋭く叫んだのでした。

逸雄さん、わかりました！　わかりました！』

『えッ？』

『いや、やつぱり私の思つてゐた通り　珊瑚の犯人と、お兄さんを捕へた犯人とは、全く同一に違ひありません。』

『おゝさうだ、河野の言ふのは本當だ！』

思はず河野に同意した逸雄、彼は一體何事を想像したのでせうか！　外でもないが、代りに置いて行つたこの九官鳥が、兄さんの歌を知つてゐる以上は、これまで兄さんの側にゐたものに違ひないといふことは、兄さんを捕へた犯人が、この九官鳥を飼へてゐて、それと珊瑚とを擦り替へたのに違ひない。

然し、そこまで考へた逸雄も今日あの芳雄少年の來たことが、どうしても不思議な疑問でした。

再びこゝに繰返して言ふが、果して芳雄少年が逸雄の兄であるとしたなら、彼は何のためにこの邸へ來たのでせうか。惡人の手から脱れて歸つたのなら、遠慮をするまでもなく、どん〳〵とお邸の中へ入つて來ればいゝではないか？

『だけど河野、僕には一つ不思議なことがあるんだよ……』

と再び逸雄が芳雄少年のことを語らうとした時、チリ、ゝゝ――玄關のベルが喧しく鳴り渡つたのでした。

『おッ、ベルだ！』

言ふなり逸雄が玄關口に行くとそこには一人の男が鳥打帽を眞深に被つて立つてをりました。

『あなたは逸雄さんですか？』

『えゝ、僕逸雄です。』

『額田と言ひます。山手署の刑事です。』

額田探偵と言へば、この神戸の警察界でも一二を爭ふ名探偵でした。その名を聞いた逸雄は、すつかりと嬉しくなりました。百萬の味方を得るより、この一人の額田探偵！　逸雄は勢よくドアの把手を引いたのでした

『河野、額田探偵が來て下すつたよ。』

『おゝ、しめたッ……おゝこれは額田探偵さん、全く御足勞でございました。』

『いや、至急にお耳に入れておきたいことがありまして。』額田探偵は徐ろに腰を降しました　お喜び下さい。九官鳥の珊瑚の所在も　この一兩日中に判明します。』

『えゝ？　一兩日中……』

『さうです、今、嫌疑者を二人署へ同行しました。恐らくはそれが犯人と睨んでゐます。』

『犯人……それは亞細亞蓄音器の二人ぢやないんですか？』

『それは此處では申しかねます　で、調べの上に是非必要なので、

この九官鳥を持つて行きます。』
『どうぞ。』
河野と逸雄とは　聲を合せて答へました。
あゝそれにしても、額田探偵の言ふ犯人とは何者でせうか？　今探偵が口をつぐんで言はないのは固より彼に考へがあつての話であらうが、若しや逸雄や河野に言ふことを遠慮してゐるのではあるまいか？
兄！　兄！　今捕縛されたといふのは、事實兄の芳雄ではないだらうか！
長い間見も知らぬ間であつてもさすがに血を分けた兄弟の情が、ひし〳〵と逸雄の胸に迫つて來るのでした
『では鳥籠は拜借して行きます。』
河野から九官鳥を渡されると、額田探偵は二人に挨拶をして、市田家を去つて行きました。
再び河野と二人切りになつた時何故か逸雄は芳雄少年のことに就ては、もう何も言ひたくはなくなつてをりました。さうして逸雄が、それからそれへと思案を廻らしてゐた時、ヂリ、、、、又もや喧しく玄關のベルが鳴り響いたのでした。
『又ベルだ！
逸雄が急いで飛んで行くと、玄關口にはオートバイが乘り捨てゝそこに佇んでゐるのは一人の青年――逸雄の姿を見ると直ぐさま一枚の名刺を出しました。

それを眺めた逸雄、
『えゝッ？』
とその場に突つ立つてしまひました。おゝ、その名刺には――
『山手署刑事、額田貫三』
『――しまつた！』
逸雄は齒を食ひしばつて、ぶるぶると慄へました
『何うしたんだね？』
『額田探偵さん、すつかりやられました！　つひ今し方、あなたのお名を言つて、代りの九官鳥を持つて行きました。』
『ふうむ……』
と暫くは額田探偵殘念さうに目を閉ぢたが、
『いや、心配しないでゐらつしやい。何でもないことです。證據品を持つて行つたのは圖太いが、却つて犯罪の發覺を早める元です。兎に角、靜かな部屋へ通して下さい。お耳に入れたいことがあります。』
それが、本物の探偵だと知つた河野も、ハッと驚いてしまひました。
『犯人は森とシュライッではないらしいです。』
『さうでせうか。私には何うも、あの二人のやうに思はれてなりません。』
河野はさう言ひました。
『どうしてです？』額田探偵は探偵に有りがちな閃くやうな目で、河野を見ました。
『いや、別にどうしてといふ譯はありませんが、そんな思ひがして』
『ちやあ何故、森やシュライッに九官鳥をお貸になつたんです？』
『それは全く私の手落でした。』
河野はさう言ふと、思はず探偵に頭を下げました。
『はゝ、はゝ、そんなことまあ別としませう。私がお伺ひしたのは十年以前に行方の知れなくなつたこの坊ちやんのお兄さんですが、あなたは全然その所在を知らないのでせうな？』
『知る筈はありません』
『さうですか。實は亞細亞蓄音器會社の家宅捜索をしたところが、死んだ市田四郎さんの名前で、今名曲のレコードを製造してゐるんです。だん〳〵調べると、意外にもそれは、芳雄さんが吹込んだ曲らしいのです。』
『えゝッ！』と逸雄と河野は聲立てました。
『さう言ふ怪事實を發見したので今度の九官鳥事件も怪しいと睨んでゐる譯ですが、それにしても芳雄さんの居所を探つて、一應芳雄さんを調べる必要があります。』
額田探偵がさう言つた時、逸雄は急に眞青になりました。外でもない、確かに庭園の邊りとも覺しい木立の中から、靜かに哀調を帶びて聞える唄の聲！　それこそは疑ひもなく　芳雄少年の聲ではありませんか！

（つゞく）

獨逸古譚
繪物話

シーグフリード王子物語

山野寺虎市 譯
内治郎 畫

王子シーグフリードは、旅をへてお父様の御城へ歸つて來ました。お城の人達は、王子が鍛冶屋のマイマーの處へ行つて以來、長い間王子に會はなかつたので、その喜びやうつたらありませんでした。

王子は、以前よりも一層美しい立派な姿になつてゐました。身體は岩丈に、眼は鋭く輝いてゐました。

家來たちは、地にひれ伏して、王子を迎へました。

早速盛大な宴會が開れました。それは恰度一年中でも、最も樂しい六月の候でした。美しい六月の太陽は、照り輝いて、宴會に招れた貴婦人の着物や、武士達の鎧を美しく見せました。

喜びの一日も終つて暮れ方になると、教會の鐘がカーン、カーンと鳴り響きました。すると、宴會の人々はふいに立上つて、靜かに教會の方へと向ひました。それはシーグフリード王子をはじめ、四百人の武士達が、王から武士の位を授けられるので、その式に列するためでした。

シーグフリードをはじめ四百人の武士は、祭壇の前で、王の手づから一々武士の位を授りました。式は得もいはれぬ壯嚴なものでありました。そして、式が終ると、新に武士になつた人々はお城へ歸つて、そこの大廣間で大試合を行ひました。

やがて、その試合が一と勝負つくと、今度は、又宴會が開かれるのでした。そして、それから六日の間、引續いて、試合と宴會が行はれたのです。

七四

河馬の自慢

久米舷一

一

暑い國に、一匹の大きな河馬が棲んで居りました。この河馬は、大へんな自惚れやで、先づ世の中で、自分ほど、どつしりした、見事な體格を持つた者はあるまい』と思つて居りました。

河馬のお家の近所には、一匹の小さな鼠が棲んで居ましたが、この鼠は又、大へんな、誹謗者で、よく河馬の所へ遊びに來ては、河馬を煽てゝ色々な御馳走になつて居りました。

併し、或時などは、

『河馬さんのお顏は隨分、長くて立派ですね』

など、讃め揚げをして、河馬にいやな顏をされた事があります。賢い鼠は、それから決して河馬の顏に就いては、口にしませんでした。

或日の事、鼠が河馬に向つて申しました。

『河馬さん、世の中には隨分、潭山な獸が居るけど、貴方ほど立派な體格を持つた者は無いでせうね。目方なども、キツと一番多いでせうよ。』

河馬は自分が内心思つて居た事を云はれたので『うふん』と滿足さうに頷きながら、『併し、象の奴が居るからな。あいつは隨分ぶくぶくして居るから、目方は僕より重いかも知れない。』

『そんな事は無いでせう。誰だつて、貴方には敵ひませんよ。』

『いや、何とも云へない。就いては鼠君、僕と象と、どつちが重いか、試して見やうと思ふんだが、君、一寸行つて象を呼んで來て呉れないか。』

『……』鼠はこれは困つた事になつたと思ひました。だつて、ひよツとすると、あの象の方が重いかも知れないからです。

『いえ、なに、そんな事しないだつて、大丈夫ですよ。きツと、貴方が重い……。』

『いや、いゝから……、呼んで來いと云つたら、直ぐ呼んで來給へ』河馬は紅い眼をぎ

お話し變つて、ライン河の岸に、ブルカンザーといふ國がありました　この國にクリムヒルトといふ美しい王女がゐました。

王女は、ある晩、不思議な夢を見ました。王女の夢に、黄金の羽をした美しい鷹が一羽現れました。王女はそれを靜かに慣して、可愛がりましたので、鷹は忽ち王女になじんで、王女の肘の上に止る程になりました。

そこで、王女は、鷹を肘に止らせて、三人の兄さんと一しょに獵に出かけました。

王女は野へ行つて、鷹を放ちました。鷹は瞬く間に高い青空に向つて飛んで行きました。すると、その時、どこからか二羽の大鷲が現れて、鷹に襲ひかゝつて、その恐ろしい嘴で鷹を引き裂いて了ひました。

王女は恐ろしい夢にうなされて目を覺しました。そこで、夜が明けると、早速母のお妃のところへ行つて、その話をしますと、

『その鷹といふのは、あなたの夫になる人です。しかし、神樣が守つて下さらなければ、その人は、あなたの夫となる前に、敵に滅されて了ひます。』と、話されました。

よろり、と光らせました。

鼠は蟲の子の樣に首を縮めて、云はれた通り、森の中の象の所へやつて來ました。

二

森の象は、草の上にあの大きな身體を投げ出して、寢轉をして居りました。

『ぐゥ、すゥ、ぐゥすゥ、ぐゥ、すゥ。』

『もし、象さん、象さん』鼠は側へ寄つて聲をかけました。

『ぐゥ、すゥ、ぐゥすゥ、ぐゥ、すゥ。』

『象さん！　もし、象さんと云つたら少。』

『あゝ吃驚した。なんだ鼠君か。あゝ吃驚した。』

そこで鼠は笑ひながら、手短かに、河馬が象さんと目方の量り較べをしたいから、是非來て呉れ、と云つた事を話しました。

人のいゝ象は眠さうにそれを聞いて居ましたが、暫くして、『さうかね、行つてもいゝが……併し、御馳走は有るかネ。』

『えゝ有りますとも、葡萄の軟かい所だの、人參の尻ッぽだの、澤山ありますよ。』

『まうかね、ぢや、行かうか。』

さて、ブルカンザー國に、美しい王女のゐるといふ噂は、シーグフリードの耳にも入りました。王女を見に、大勢の武士達が行くといふ話を聞いて、シーグフリードも一度は行つて、どんなに氣立てのやさしい人か、またどんなに美しい人か、見たいと思ひました。

兼れてから、王やお妃からも、早く立派な王女を探して、結婚するやうにと云はれてゐましたので、シーグフリードは兩親のところへ行つて、自分の決心を話しました。すると、王もお妃も、大層悲しさうな樣子をして、

『成程王女は、やさしい、美しい人だが、王女の兄が二人とも惡い上に、又惡い叔父までゐるから、行けば必ず恐ろしい災難に會ふ。』といつて、切りと止めました。

しかし、シーグフリードはどうしても行くといつてきゝませんでした。王もお妃も仕方なく、では十一人のしつかりした武士を選んでお供につけるから、十分に注意をして行くやうにといひました。シーグフリードは、遂に、或日、十一人の家來をつれて出發しました。

象は、よつこらしよ、と大きな身體を擡上げて、河馬の お家へやつて來ました。

『河馬さん、今日は。』

『あゝ今日は、象君、早速だがれ、僕と君と、どつちが重いか試して見やうと思ふんだがね……。』

『はア……、併し、量ると云つた所で、そんな大きな秤が有る譯はなし、仕方がないから、鯨君の所へ行つて量つて貰ふ事にしよう。』

『はア……。』

『では。これから直ぐ三人で出かけやうぢやないか。』『はア……。』

象は、おや、御馳走はどうしたんだらうと思ひましたが、おとなしい性質でしたから、何とも云はずに、河馬に跟いて鯨の所へ參りました。幸ひ、入江の岩の處に、大鯨がぽッかりと浮び上つて居りました。河馬がその添へ行つて頼みますと、鯨も直ぐ承知して呉れて、

よし、よし、ぢや君達二人、代りばんこに僕の背中の上に乘り結へ、どつちが重いか、較べて上げるから……』と云ひました。

シーグフリードの一行が、隊伍を整へて、静々と進んで來るのを見たアルガンヂー國の人達は、びつくりして戦ぎ立てました。國王のケンテル王も驚いて　早速相談役のヘーゲンといふ男を呼び寄せました。ヘーゲンはお城の上から望遠鏡をとつて見ますと、成る程立派な武士が十二人進んで來ます。しかも、その中の一人が特に目立つて立派に見えます。

ヘーゲンはすぐにそれが、噂に聞いたシーグフリード王子であると知つたので、一同に向つて、シーグフリードを鄭重に迎へなければいけないといひました。そこで、シーグフリードと十一人の家來達は、お城の人達からうや〳〵しく迎へられました。

『あなた方は、何の御用で、この國へお出でになつたのですか』と、先づ王が尋ねました。

シーグフリードは、王女を見たいために來たともいへませんから、

『陛下の御殿の立派なことを聞いて〳〵から聞き及んでをります。それに陛下は、大膽大胆で勇氣のある方だと伺つてなりましたので、是非お目にかゝりたいと存じて參りました。

そこで先づ象が乘る事になりました。

『大丈夫かい？鯨さん。落しちや嫌ですよ。』

象はかう云ひながら、恐る〳〵鯨の背中に乘りました。と、どうでせう。木の上に岡の様に出て居た鯨の身體が、ぐーッと沈んで、水の中に隠れてしまひさうになりました。

『あ、象さん、ま、待つて、大變だ、沈んでしまふ……』鯨が苦しさうな聲を上げたので、象は苦笑ひしながら、〳〵と踏へ上りました。鼠は驚いてしまひました。これでは、とても河馬なんかは敵はない、と思つたので、そッと河馬の耳元に口を寄せて囁きました。

『河馬さん、これはとても駄目ですよ。なんとか今の内に理窟をつけて、勝負をやめてはどうです？』

『うんにゃ』河馬は苦い顔をして首を振りました。河馬は負ける事は大嫌ひでした。

そこで今度は河馬が代つて、背中に乘りましたが、餘り重くないと見えて、象の時の半分も身體が沈みません。河馬は氣を苛だつて、うん〳〵力を入れて踏張る樣みに、つひ足を滑らせて、どぶーん、と海の中に落ちてしまひました。

『うわーッ』鼠も象も驚いて叫びました。幸ひ餘り深くなかつたので、河馬は直く引上げられましたが、鹽水を大分呑んだと見えて、げェ〳〵云つて、紅い眼がいよ〳〵紅くなつて居ました。

三

それでも河馬は負けたと云ひません。

『今日は何だか工合が惡いから、量るのは明日にしよう』かう云つて、鼠と二人で家へ歸つてしまひました。

翌る日になると、鼠は河馬に入智慧をして、河馬の耳の中だの、口だの、お腹の皮のたるんだ所だの、足指の間だのに、一ぱい、鉛の礫をつめ込みました。そして、もう一度、象も會ひの上、重さを量つて見たのです。

度が今度は、餘りの重さに、鯨はとても水の上に浮んで居る事が出來ずに、ぐぶり、と水の中に沈んでしまひました。河馬は身體中に鉛をつけて居たものですから、中々上る事が出來ず、鹽水をうんと呑んで、大きなお腹

私ばやがて王位を繼がねばならぬ身の上ですが、その前に是非世界を驚かすやうな手柄を現したいと思つてをります。』と、申しました。

ケンテル王は心の中では面白く思つてゐませんでしたが、表面にはそんな事は現さないで、大層喜んで迎へるやうなふりをして一同を歓迎しました。

シーグフリードの一行は、暫くこの國に滯在することになつて、その翌日からは、この國の武士達と盛んな武術の競技を行ひました。しかし、何をやつても、シーグフリードは第一でした。石投げをやつても、馬上試合をやつても、負ける者はありませんでした。

お城の貴婦人達は、シーグフリードの競技を見に集つて來ました。しかし、いつも、美しいクリムヒルト王女の姿は見られませんでした。その筈です。王女はお城の塔の中に閉ぢこもつてゐたのです。でも、王女はお城の室で、武士達の勇しい競技の聲がすると、そつと窓のところへ行つて、そこからシーグフリードの勇しい姿を眺めました。

さうしてゐる内に、一年の月日が經つてしまひました。すると、その頃になつて、隣國のサクソニヤの王とデンマークの王とが、大軍を率ゐて攻め寄せて來るといふ噂さが立ちました。ブルカンヂーの城中では、もうこれまでのやうに、愉快な試合の聲も聞えなくなつて、急に火が消えたやうに靜かになつてしまひました。その内に、ある日、敵の使者が來て、王に謁見を求めました。

『陛下よ、もし陛下が價金をお拂ひにならなければ、二週間の内に、わが國の大軍は、陛下のお國へ攻め込むでありませう。』と、使者がいひました。グンテル王はどうしていゝか分らないで、困り切つてゐると、そこへジーグフリードが現れて、

『陛下、決して御心配なさいますな。たとひ、敵が三萬人あつても、私が一千人の兵を率ゐれば、たやすく滅すことが出來ます。どうぞ、今度の戰爭は、私にお任せ下さいまし。』と、いひました。

王は非常に安心して、敵の使者を追ひ返して、戰爭の準備にかゝりました。

デンマークの王もサクソニヤの王も、すぐに大軍を集めました。そして、勇しく進軍して來ましたので、グンテル王もいよ／＼自らよろひをつけて、陣頭に立たうとしました。それを見たジーグフリードは、王に向つて、

『陛下は都にお留りになつて、後に殘る婦人達をお守りになつたがよろしうございます。ご安心下さいまし、私が陛下の名譽と、陛下の軍隊とをお守りいたしますから。』と、大きな自信をもつていひました。

そこで、グンテル王は都に殘ることになつて、ジーグフリードが王の大軍を率ゐて、サクソニヤの軍を討ちに國境へと進みました。

國境には、敵軍に味方する者が潜山にありましたので、それを先づ討ちましたので、その地方の國々は非常に驚きました。

それから、ジーグフリードは、何を思つてか、たゞ一騎、敵軍に向つて進んで行きました。馬を走らせて進んで行くと、やがて前方にあたつて、敵の大軍が陣を張つてゐるのを見出しました。ジーグフリードは、そこで何を仕でかしたでせうか。

（つゞく）

か、地面に摺り引くやうになつてしまひました。河馬は苦しさうに喘ぎながら、

『どうだ、重いだらう』と云ひました。

『いや驚いた、貴方には敵ひません』と人のいゝ象は云ひました。

『すると、河馬さんが世界一に重い譯ですね』

鼠がかう云つた時に、彷の岩に生えて居た一匹のいそぎんちやくが『ふふん』と笑つて、

『馬鹿だなア、世界一の重い動物は未だ他にあるのに……』と、いひました。

河馬をそれを聞いて眼を慎らして、

『なに？　まだ重いものがある？　なんだ、それは』と聞き返しました。

『鯨だよ、そこに居る鯨さんだよ。』

三人は、あッ、さうか、と初めて氣が附きました。さうだ、鯨だ、鯨だ、鯨にはとても敵はない！

『鯨さん、あなたは世界中で一番重いんですかい？』河馬は訊ねました。

『さうなんですよ、鯨は細い眼をいよ／＼細くして、笑ひ乍ら云ひました。

『だけどね、僕はまだこれで子供なんですよ。沖に行くと、僕のお母さんが居ますよ、……河馬さん、一度連れて行つて上げませうね』

『えゝどうぞ』負け嫌ひの河馬も到頭我を折つて云ひました。

鯨は河馬を脊中に乘せて、沖へ出て行きました。そこはコロンボの港でして、波止場には大きな歐洲通ひの汽船が、赤い腹を見せて靜かに停泊して居ました。

『河馬さん、御覽、あれが僕のお母さんですよ。』

えッ、あれが？……』

『さうです、あの眞中から、むく／＼と煙りの樣な物が出て居るでせう。あれは潮を吹いて居るのです。もッと添へ寄つて見ませうか』

鯨はかう云つて、段々側へ近寄つて行きました。突然汽船は『ぽーッ』と吼える樣な、出帆の號笛を鳴らしました。河馬は吃驚して、ほんとに吃驚して、『あッ』と云つたなり、又、ぽちやーんと水の中に落ちてしまひました。

何分、深い所でしたので、鯨が漸くの思ひで海岸迄引張つて來た時には、河馬はもう、半分死んだ樣になつてゐました。（なはり）

童謡

野口雨情選（子供篇）

あまえたい

松山市千舟町　加藤　正文（十五歳）

僕はかあさんにあまえたい
かあちやんねんねと
あまえたい
おひざにあがつて
ねんねしたい
僕はかあさんにあまえたい
一日おひざであまえたい
一日だつこしてもらひたい

秋の山

京都市小川通　伊藤富士雄

お山のお山の山奥で
松たけちよつぴり
傘さした
お山ちやお山ちや
うめもどき
ちつぴりちつぴり
紅さした
ながの雨しぐれ秋の雨
一雨降つたら
又おいで

小さな小馬

岡山縣雑新校尋六　岡　文子

かはいゝ小馬
ピン〳〵はねて
大きくなーれ

夢

山梨縣　大木　安雄

私の夢は寂しい夢
秋の夜明のガラス戸に
スイッチョ蟲が宿つてた

秋の祭

秋のお山の夕暮には
赤い蜻蛉が大勢で
秋のお祭り火の祭り

月

千葉縣久留里校尋五　谷田　貞三

山のうへから
月が出た
月のなかから
風が出た
風といつしよに
うさぎも出た

時雨

神奈川縣横須賀市　北村　直彦（十五歳）

町の外れを
時雨がすぎた
田舎通ひの
古馬車走つた
馬もぬれたし
車もぬれた
時雨ふり降り
町外れすぎた

一人ぼつちのはだか馬

大阪市上綿屋町　後藤　静夫（十五歳）

誰が書いたか白かべの

一人ぼつちのはだか馬
今日もかひばを貰はずに
一人ぼつちで夕暮れの
あアーかい空を眺めてた

まめ

埼玉縣越生校尋三　大野　マツ

にはにほしてある豆が
てんたう樣にてらされて
むしろのそとへ
ぽちぽち
みんなはねてしまふ

モウモウ

秋田縣能代港町高二　小林　徳藏

モウモウ小牛
まだらな小牛
日向ぼつこに
出ておいで

くもの姉さん

長野縣壽校尋五　高野けさみ

くもの姉さん
屋根裏で
きぬ物三だん
おつたとて
すゞめのおしやべり
しやべつてた

たどんつき

香川縣坂出附隠校尋三　多々羅　幸

とんとんとなりの
たどんつき
とんとんなれば
又やすむ
やすんだと思へば
又とんとん

すすき

山形縣櫛澤校尋六　金子　長吉

月夜の晩に
すすきのほ

白いほの手で
唯をよぶ

かんなの葉

山形縣櫛澤校尋六　金子　賢吉

ああかい
ああかい
かんなの葉
日暮ののきの
かんなの葉
赤い夕日が
今おちた。

青い鳥

茨城縣校川船渡尋四　軍司　昌三

小さなあんよが
つめたかろ
親がないのか
はぐれたか
かなしい子鳥
青い鳥

ナイチンゲールの友達

大木雄三

1

西暦一千八百五十四年――いまから七十年ばかり前です。日本では浦賀の港へ、アメリカの黒船がやつてきて大騒ぎをしてゐましたが、ヨーロッパではもつともつとひどい、騒ぎが起つてをりました。

それは名高いクリミヤ戰爭です。ロシヤがトルコを攻めたのが初まりで、イギリスとフランスはトルコに味方しました。

戰爭はいよいよ大きくなりました。

ロシヤが大切に守つて、これだけは敵に渡すまいとしたセバストポルの要塞では、ことに激しい戰ひが何度も起りました。そしてセバストポルの要塞のあるクリミヤ半島いつたいは、煙の中に包まれて、太陽の光までが、氣味の惡い色に輝いて見えるのでした。兵士たちのうごめく陣地の上を吹く風には、

生暖い血の匂ひが交つてをりました。

三國から攻められるロシヤは、ずゐぶんひどくやられましたが、三國側もなかなかの苦しい戰で、ことにイギリス軍では、負傷兵の看護さへ思ふやうに出來ないのでした。このことが、イギリス本國へ知れて、國民が政府に向つていろいろ責めた時に、自分から進んで負傷兵の看護をしに戰地へ出かけたいと言ひだした婦人がありました。

たくさんのイギリスの人たちは、びつくりしたやうに目を丸くしてそのことの書いてある新聞記事を讀みました。

『偉い女だな、この女は……』

人々はかう言ひました。

秋風が物悲しい便りを囁いて吹きすぎる十月二十一日の夕方、明るいロンドンの街を後にして走り出した汽車があります。その中には、戰地へ運ばれて行く三十四人の婦人がゐたのでした。みんな國の爲を思ふ勇ましい人たちばかりです。しかもこの三十四人を指揮するのは男ではなかつたのです。これこそ、前に新聞記事になつて、たくさんの人々をびつくりさせた婦人――フローレンス・ナイチンゲールでありました。

ナイチンゲールは、汽車の響に、ごとんごとんと身體を搖られながら、だんだん暮れてゆく窓の外を眺めました。

『早く早く、クリミヤへ着きたいものだ。そして病氣にかかつたり、傷ついたりして苦んでいらつしやるお氣の毒な軍人たちを、慰めて上げたい、一日も早く身體をよくして上げたい。』

ナイチンゲールは、かう心の中で呟いたのでした。

汽車は飛ぶやうに走ります。默つたまゝ胸のところに手を組んでゐるナイチンゲールの白衣姿が崇高いやうに見えました。

2

ナイチンゲールの情深いことは　子供の頃から、知り合ひの間では評判でした。まだ兩親と一緒に、田舍に住んでゐたときのことです　近所にブラウンといふお婆さんがありましたが　このお婆さんは、大へん口喧しやで、みんなに嫌はれてをりました。

ブラウン婆さんが病氣になりました。ふだんから口喧しやがいつそう口喧しくなつて、人の顏さへみれば嚙みつくやうに惡口を言ひました。

『ブラウン婆さんは、身體が利かないものだから、口だけ動かしてゐるんだよ。』

と、みんなは陰で嘲つてをりました。誰一人、お婆さんを親切に面倒みてやる者もありません。一人娘のマルタまでが、なるべく、側へ寄らないやうにするのでした。

『マルタ、マルタ。』

お婆さんは、ある日、たいくつでたいくつでたまらないものでしたから、大きな聲で娘の名を呼びました。

娘のマルタは、隣室にをりましたが、出て行けばまた何か叱られるにきまつてゐるとかう思つて、わざと返事をしません。

『マルタ。マルタつたら……』

前よりも大きな聲で、お婆さんが呼びました。マルタはくすつと、笑つたきり、やつぱり返事をしません。編み物の針をしきりに急がせるばかりでした。

『マルタ。どこにゐるんだ、早く出て來い。早く來ないと承知しないぞ。』

三度目の聲が聞えました。

お婆さんは、動けない身體へ力を入れて、寢臺の上でもがきながら、あまり怒つたので、眞赤な苦しさうな顏をしてをりました。お婆さんは、マルタの姿が見えたら、うんと叱りつけてやらうと思つてそ

の時の言葉をいくつもいくつも、口の中で繰り返してみました。

莫迦、お轉婆、不孝者――などと。

すると、靜かにドアの開く音がして、こつこつと床を踏む靴音が、お婆さんの耳へ入つてきました。

來たな、と氣がついたお婆さんは、

『何をしてゐたんだ、このつんぼめ……』

と、いきなり呶鳴りつけたのでした。

『あらッ私つんぼぢやないわ。』

かう言つた思ひもよらない、優しい聲にお婆さんはそちらを向いて、びつくり驚いてしまひました。入つてきたのはナイチンゲールだつたのです。

『まあ　お嬢さま。』

『ブラウンのお婆さん。あんまり大きい聲を出すのは、身體にいけないでせう。何か御用。マルタさんがお留守なら、私がして上げるわ。』

ナイチンゲールは、お婆さんの側へ行つて、かう

言ひながら、そつと額へ手をあてゝみました。お婆さんは首を横に振つたきり、すぐには物を言ひませんでした。けれど心のうちでは、どんなに嬉しかつたかしれないのでした。

ナイチンゲールは、毎日、ブラウンのお婆さんを慰めにくるのでした。村中の者はもとより、娘のマルタにさへ嫌がられてゐるお婆さんを、氣の毒に思つたからです。

『お婆さん。ほら、きれいでせう。』

ナイチンゲールは、よく咲いた草花を、お婆さんの顏の上へもつて行きました。

『ね、いい匂ひがするでせう。』

かう言はれてもお婆さんは、まだ默つてをりました。ナイチンゲールは、不思議に思つて、花の上から覗いてみると、お婆さんの皺の寄つた目尻に、涙がころげてゐるのでした。

『お孃さま、有難うございます。神樣はきつと、親切なあなたを、お惠み下さいませう。』

お婆さんの目は、水に濡れた寶石のやうに光りました。

ナイチンゲールは、花を花瓶にさして、それから藥を飲ませてやつたり、枕の具合をなほしたりしてから、お婆さんの方をちよつと眺めて、こつそりドアの向ふへ出て行きました。

ブラウンのお婆さんは、いつのまにか、すやすや眠つてゐたのでした。

3

ナイチンゲールはいちど家へ歸りました。そしておきにまた出かけて行きました。こんどはポケットといふポケットが、どれも大きく膨らんでをりました。

家からあまり遠くないところに、大きな森があります。青葉をゆつさゆつさと風がゆすつて通つてゐ

ました。

ナイチンゲールは、樂しさうに顏を輝かせながら青葉の森へ入つてゆきました。そしてポケットに手を入れて、青葉の中を見上げたのでした。

きつきつ……

と呼ぶものがあります。ナイチンゲールはにつこり笑ひました。

木の枝では、賢い顏をした栗鼠が、忙しげに登つたり下りたりしてゐましたが、ちよろちよろとナイチンゲールの側へ下りてきました。十疋も、二十疋ももつともつと澤山。

『ほんとにお前たちは可愛いのね。』

ナイチンゲールは、かう言つて、ポケットから手を出して、何か固い物を、ばらばら投げてやりました。栗鼠は嬉しさうな聲をたてて、われ勝ちに拾はうとします。ナイチンゲールが投げたのは、栗鼠の大好きなくるみであります。

ナイチンゲールが、くるみを投げながら走り出すと、栗鼠もその後から走りました。しばらくたつてくるみもおしまひになつたナイチンゲールが、家へ歸らうとして、森の入口まできた時、馬に乘つた村の牧師に會ひました。

『ナイチンゲールさん、また栗鼠のお友達ですね。』

牧師は笑ひながら言ひました。

『えゝ。』

『ぢや、もうブラウンのお婆さんところへは行つたのですか、具合はどうです。』

『大へんいいやうですわ。』

『ほう、それは結構だ。』

牧師はこんな話をしてゐるうちに、ふと思ひついたやうに、

『ナイチンゲールさん。馬に乘つていらつしやい。お約束どほり、今日はあなたのお父さんがもつていらつしやる牧場へ案内して頂きませう。こんなよい日には、散歩が身體によいのです。』

と言ひました。

『えゝ。』

と、ナイチンゲールは答へました。

『先生、少し待つて下さい、ぢきまゐりますから。』

ナイチンゲールは、家へ走つて歸りましたが、ぢき戻つてまゐりました。ナイチンゲールの乘つた馬は、ペッギーといつて、よく馴れた馬でしたから、跳ねたり荒れたりするやうなことはありません。牧師の乘つた馬と仲よく並んで、ぱつかぱつかと、蹄の音をたてゝ走りました。

まもなく牧場へついてみると、羊番人のロージャー爺さんはにこにこして

『いらつしやい、お嬢さん、今日は先生も御一緒で……』

と大喜びです。

けれどもナイチンゲールは、いつもすぐに飛んできて、ぢやれつくキャッブの姿が見えないのが、心配になつて、

『爺や、キャッブは？』

とたづねたのでした。すると、ロージャー爺さんは悲しさうな顔になつて、

『可哀想にあの犬は、いたづらつ子に噛かれまして、脚を挫かれて苦しがつてをります。』

と答へました。

4

それから、ロージャー爺さんは、キャッブが怪我した時の話を、詳しく話した末に、

『もうだめです。よく私のいひつけをきいて、羊の番をしたり、追つたりしてくれましたけれど、これからは私一人です。』

さびしさうに言ふのでした。

ナイチンゲールはもうぢつとしてゐられなくなりました。

『先生、行つてキャップをみてやりませう。』
さう言つて、牧師を引張るやうにして、犬小屋へ馳けつけたのでした。
小屋からは、細いうめき聲が洩れてをりました。戸を開けてみると、キャップが、脚を伸ばして倒れてゐましたが、ナイチンゲールを見ると、くーんくーんと鼻を鳴らすのでした。
『先生。』
ナイチンゲールは、もう目に涙を溜めてしまひました。牧師に、何か言はうとしても言ふことすらできないのです。
牧師は、そつと犬の側へよつて、怪我をした脚をよく診てをりましたが、
『大丈夫、これは癒りますよ。ナイチンゲールさん。』
と、勢よく言つたのでした。
『癒りますか、先生はんとう。』
ナイチンゲールの顔には喜びが輝き出ました。

『癒りますとも、怪我したところを濕布して上げなさい。』
けれども、濕布といふのはどんなことをするのかナイチンゲールは知らなかつたのです。牧師はそこで丁寧に濕布の方法を教へました。
ナイチンゲールは、まづ火をおこして、湯がコーコーと音をたてるやうにわいてから、自分のハンケチを浸しました。
『痛がらないやうに捲いてやるんですよ。』
牧師が、そばから注意しました。
ナイチンゲールは一生懸命です。怪我して血の滲み出してゐる脚を、そつと手にもつて、手早く捲きつけてやりました。
『キャップが喜んでゐますわ。先生。』
ナイチンゲールは、ほつと安心して、おとなしく鼻を鳴らしてゐるキャップの頭を撫でました。
『喜んでゐますよ。犬でも親切にされたのがわかるのです。だから、人にはもつともつと大切に親切にしてやらなければならないのです。』
と牧師はナイチンゲールの頭へ輕く手を置いて、しみじみと言つたのでありました。

ナイチンゲールは
『先生、よくわかりました。』
と、靜かに答へました。

クリミヤ戰爭が起つたのは、それから二十年も後でしたけれども、ナイチンゲールは牧師の言葉を、ちやんと覺えてゐたのでした。
戰地で病氣にかかつたり、傷をしたりした兵士の看護をしたいと思つたナイチンゲールは進んで戰地へ出かけて行つたのでありました。そして、いろいろの辛い思ひをしながら大勢の兵士たちを慰めたのです。
戰爭がおしまひになつて、イギリスの軍隊は目出度く歸つてまゐりました。國中がどこへ行つても戰爭の話で賑ひましたがそのあとでは誰もみんな、ナイチンゲールの勇ましさを讃めるのでありました。
（をはり）

霜枯れ

達崎龍

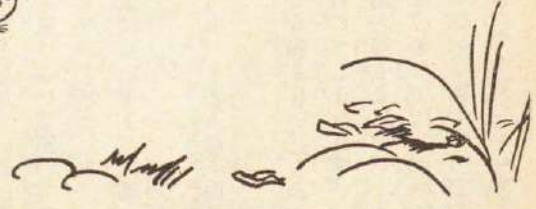
坊主山から
木がらし
枯る

すゞめが
はだしで
とんで來た

街道千里の
親なし
すゞめ

小竹も小笹も
ピユーピユー
寒い

はだしで
あんよを
きられるぞ



片手を失した話

森川一郎

私は何んだか氣味が惡くなりました。いやに高ぶつたその言葉付きから、用も云はないで隨いて來いと云ふこの男が、憎らしくもなつて來ました。

『もし、あなた、そんなに云はないでまづ何處へ行くのか話して吳れませんか。』

私が下手に出てかう云つても、その人は一向耳にも入れないと云ふ風で、

『ツアロイコス、お前が厭なら賴まない。』とぶつきらぼうに云つて、ずん／＼行つてしまひます。

私は急に癪にさはつて、赫となりました。

『あなたは私のやうな馬鹿は、どんなにからかはれても默つてゐるとでも思つてゐるのですか。私はこの寒い晩に用もないのに、ぼんやり待つてゐるやうなことはご免ですよ。』と私は叫んで、小走りにして、その男に追ひ付きました。そしてその外套の裾をしつかり摑まへ、片手を劍にかけながら、先刻よりもつと大きな聲で叫びました。

『さ、あなたの用向を仰言つて下さい。』

所が私の手には外套ばかりが殘つて、その怪しい男はする／＼と逃げ出して、忽ち町角に消えてしまひました。私はぼんやりしてしまひました。怒つた心も靜まつて來ますと、私は今夜の謎のやうな不思議な出來事を、この外套が解きほぐして吳れるだらうと思ひました。そこで、私はその外套を體にひつ掛けて、家に歸りかけました。

すると、私がまだ百歩と歩かないうちに、誰とも知れぬ怪しい男が、私の傍を擦り拔けるやうにして通り過ぎましたが、その時フランス語で、

『氣を付けなさい、伯爵。今夜は駄目です。』

私がこの言葉に氣が付いた時は、もうその人影は向ふの町角に消えようとしてゐる所でした。察する所、この言葉は私が體に卷いてゐた外套に云つたので、屹度私を間違へてゐるのに違ひないと思ひました。それにしても、私にはこの出來事とどんな關係があるか、さつぱり見當がつきませんでした。

翌る日になつて、私はこの外套をどうしようかと考へ迷ひました。始め私はこれを拾つたと云ひ觸らさうかと思ひましたが、さうすれば昨夜の男は他の人を使つてゞも、私の手から取り戻すことが出來る筈です。するとこの出來事の譯が、解らずにしまふでせう。さう考へながら私は、この外套を詳しく調べました。外套の皮は丈夫なグメア產の天鵞絨で出來てゐて、少し紫がゝつた緋色のアストラカン皮で緣取りしてありました。また金の糸で美事な刺繍もしてありました。こんな上等な外套を着てゐる人を、私はまだ見たことがありませんでしたから、變な男が私を伯爵と呼び違へたことから考へて、この外套

の持主は、本當に伯爵かも知れないと思ひました。
急に私はうまいことを思ひ付きました。私はこの外套を店へ持つて行つて、賣物として並べて置いたのです。然し私は、この外套は確かに一人の買手も附くまいと思ふ程の、法外な高値をつけて置きました。かうして私は、この外套に目をかける人を、一人〳〵々々嚴重に眼をつけてやらうと思つたのです。と云ふのは、昨夜ほんのチラリとではありましたが、外套を捨てゝ逃げて行つたあの男の姿を、私は覺えてゐたからです。
店へ出したこの外套は、とてつもなく立派なそして上等なものでしたから、それを買ひたがる人は澤山ありました。しかしその中には、見覺えの姿の人はありませんでしたし、また二百圓と云ふ滅法高いお金を出して買はうと云ふ人もありませんでした。私が不思議に思つたことは來る客ごとに、このやうな品物がフローレンスにあるかと訊ねて見ますと、

皆こんな立派な飾りつけをした外套は、見たことがないと答へたことでした。
夕方になつた頃です。今迄も度々私の店へ來たことのある若者がその時やつて來ました。この若者は晝間も來て例の外套を欲しさうにしてゐた者です。
若者はいきなり財布を臺の上に投げ出して、
『ツアロイコス。己れはどうしてもこの外套を手に入れるんだ。その爲めに、己れは乞食になつたつてかまやアしない！』と叫んで、若者は二百圓と云ふ高いお金を出しました。私は弱つてしまひました。もと〳〵賣る心算がなかつたのですが、さりとて値をつけて出して置いた以上、買ふと云ふのに離さぬ譯にもゆきません。この若者に買ひ取られてしまへば、昨夜のことはそれっ切りになつてしまつて、物好きな私の腹の蟲が納まりさうもありません。然し、考へて見れば、昨夜の危い仕事が二百圓と云ふ高いお金になるとすれば、それでもいゝ筈です。

私は默つてその若者に外套を渡してやりました。若者は嬉しさうにその外套を身につけて出て行きましたが、ふと出口の所で振り向きながら、
『おい、ツアロイコス。これは外套の飾りぢやあるまい。』と言つて一枚の紙片を剝ぎ取つて、私の方へ投げ出しました。
私は何の氣なしにそれを受取つて見ますと、しまつた！それには次のやうな事が書いてありました。
『今夜あの時分にポンテ・ベッキオ橋にこの外套を持つて來て呉れ。四百圓が君を待つてゐる。』と。
私はまるで雷にでも打たれたやうになつて立ち上りました。いま〳〵しいことには、私は折角いゝ運が向いて來たのに、むざ〳〵逃がしてしまつたのです。然し、私はぐづ〳〵考へてはゐませんでした。すぐさま二百圓　手に摑むと、いま出て行つた若者の後を追ひかけました。
『もし、お金はお返ししますから、もう一度その外套を私に渡して下さいませんか。私はどうにもそれを手離す氣になれませんので。』
私の言葉を、若者はまるで冗談だとばかりに笑つて聞いてゐましたが、本當だと氣が付くと、私の云つたことに大層腹を立てました。
『莫迦ッ』と云つてその若者は、いきなり私の頭をいやと云ふ程擲りつけました。
私だつて負けてはゐませんでした。二人は取っ組み合ひをしましたが、私はたうとう若者を組伏せて外套を奪ひ返してしまひました。そして私は、外套を抱へて逃げようとしました。その時、若者は大聲で巡査を呼びました。忽ち、巡査が走つて來て私を捕へ、私は裁判所へ連れて行かれました。裁判所ではこの爭ひを妙に思つたらしいのですが、『外套は若者に返すべきものだ。』と云ふ命令をしました。併し、私は若し若者が私に外套を渡して呉れるならば二百圓の外に五十圓、八十圓、いや百圓も餘計に差上げ

よう、と云ひました所、急に若者は笑顔になつて、私に外套を渡すことを承知いたしました。

若者は意外な儲けものをしましたし、私もこれで一安心して、喜んで家に歸りました。私のしたことを街の人達は笑ひましたが、私がそんなことを氣にかける譯がありません。と云ふのは、その若者より私の方が、ずつと儲かつてゐたからです。

しかし、この外套によつて、私はどんな不思議な運命に出遇つたでせうか。

二

やつとの事外套を取り戻すことの出來た私は、夜が來るのが待遠しくてなりませんでした。何しろ四百圓と云ふお金がこの外套と引換へに貰へると云ふのですから私の胸は躍つてゐました。あの妙な男が私に何を頼む心算か、そんなことはもう念頭に置いてゐない位でした。

前の晩と同じ時刻に、私は書付に書いてあつた通りホンテ・ペッキオ橋の上へ參りました。眞夜半の鐘が鳴つて、その音が寂とした夜の中に消えてゆきますと、暗闇の中から人が近づいて來る樣子が見えました。

『お前は外套を持つて來たか。』

と、その黒い人影が云ひました。

『はい、あなた。』と云つて私は外套を見せながら、

『然し私はこの外套に現金で百圓掛けてございます。』と云ひました。

『分つてゐる。さア、よくごらん、此處に四百圓あるから。』

黒い姿の男はきう云ひました。そこで私はその男と一緒に橋の欄干の所へ行つて、金貨を數へながら受取りました。金貨は月の光に輝き、心持よい響を立てました。私の胸は嬉しさの餘りわく〳〵いたしました。あゝ、何んとそれが私の最後の喜びとならうとは？

私は金貨をポケットに納めて、さて、この親切な見知らぬ人の顏を見ようとしました。所がその人は顏を黒い布で包んでゐまして、眼ばかりが恐ろしさうにギョロついてゐました。

『あなた、御親切のほど有難く御禮を申し上ます。』

と私は一通りお禮を云つてから、

『そしてあなたは私に何をお頼みになるお心算ですか。しかし、そのお頼みが惡い仕事ではお斷りすると云ふことを前以つて申し上げて置きます。』

『入らざる心配だ。』と云つてその男は私から受取つた外套を肩にかけながら、

私は醫者としての君の力を借りたいのだ。だがそれは生きてゐる人にではない。死んでゐる人にだ。』

『へーえ、一體それはどう云ふ譯なんですかね。』と私は怪しんで申しました。

『私は遠い國から妹と一緒に來た者だが――』

さう云つてその男は私に隨いて來るやうにと目くばせしました。

その男は私と一緒に歩きながら話しました。

『私は妹と一緒にこの街へ來て、友達の家に住んで

ゐたのです。所が妹は昨日急に死んでしまつたので、この街にゐる親類の人達は明日お葬ひをして亡骸を埋めてしまはうと云ふのです。しかし、昔から私の家の習慣に從ひますと、皆先祖代々の墓に埋めることになつてゐますから、これまでも外國で死んだ者は木乃伊にして國へ持つて歸つた上、先祖の墓へ埋められてゐたのです。今度もさうしたいのですが、親類の人達がこゝで、お葬ひをしたいと云ひますので、私はせめて妹の頸だけでも持つて行つてその死顏でも父に見せてやりたいと思つたのです。』

何んと怖ろしいことでせうか。肉身の妹の首を切るなんて。しかし私はそれが先祖代々の習慣の爲めだと聞いては咎める氣にもなれませんでした。そこで私はうまく木乃伊にすることが出來るからと云つて、その有難くない仕事を引受けました。然し、私は何故こんな眞夜中に人にかくれてこつそりとこの仕事をしなければならぬかと、その譯を尋ねないではゐられませんでした。

その男の云ふ所によるとその仕事が餘り殘酷だと思つてゐる親類の人達が、若し晝間だつたら屹度止めるだらう。だが夜こつそりとやつてしまへば後で何んとも云はれる筈もあるまい。それに兄弟の情として、とても大びらで妹の首を切る氣になれないからだと云ふのでした。

話しのうちに私はある大きな家の前に來ました。その男は私に『こゝだ。』とばかりに默つたまゝ指さして見せました。私達が大きな門を這入るとその男は後から丁寧に戸締りをし、それからまた小さな門をくゞつて家の中へ這入りました　家の中は眞闇でしたが、私は探り〳〵廻り梯子を登つて、幽かに明りのさしてゐる廊下へ出ました。其處を暫らく行つてから一つの室の扉を開けました。その部屋は天井から吊されてゐるランプで照らされてゐました。

部屋の中には一臺の寢臺があつて、その上に死人

が横になつてゐました。見知らぬ人は涙を隠さうとするかのやうに顔をそむけました。その男は寢臺の上を指さして、私の仕事を上手に、そして出來るだけす迅く仕遂げるやうにと云つて、その儘部屋を出てゆきました。

私は醫者としていつも持つてゐる洋刀を鞄の中から取り出して、その寢臺に近づきました。掛物の中から頭だけ出てゐる死人の顔はまるで生きてゐるやうに美しくありました。黑い房々とした髪は束になつて寢臺の外へ垂れてゐました。顔は青白く、目は閉ぢてゐました。私は例へ死人とは云ひながらかうした美しい人の首を切るのは忍びない思ひました。私はほつと溜息をしました。しかし私は愚圖々々してはゐられません。思ひ切つて腕をまくり上げ、洋刀を取り上げました。

それからものゝ三分とたゝない中に、私は青くなつて廊下へ飛び出しました。私の手足は怖ろしさに慄へ、齒の根はがた付いて合ひませんでした。廊下はランプも消えたと見えて眞暗でした。私は壁に沿うて目くら滅法に進みました。そして廻り梯子をまるで轉がり落ちるやうにして滑り下りました。下には先刻の男もゐないし、また外に人らしいものも見當りませんでした。門の戸はたゞそつと寄せかけてあつたばかりですから、私は苦もなく街路へ出ることが出來ました。そして私はやつと我に返つた心に人間らしい呼吸をほつと吐きました。

私は今しがた私のした仕事を思ひ出してぞつといたしました。あの熱い血のほとばしり出たこと、死んでゐる筈の女が急に眼を開けたこと、苦しんで事切れたこと——

あの男は私を瞞したのか知ら、でなければまだ本當に死んでゐなかつたのを、思ひ違へてゐたのか知ら。それにしても私があんなにす迅く仕事をしなかつたら、助けることも出來たのに……私は考へれば

考へるほど身内がぞく〳〵と寒くなつて來ました。

次に、私はどうしたらよいのかと思ひ迷はずには居られませんでした。併し、あの男が私に賴んだのだから、よもや私を犯人として訴へはしまいと思ひました。私は家へ歸つて蒲團を頭からすつぽり被り、今しがたのことを忘れようとしましたが、忘られるどころか、益々恐ろしい有樣が眼に浮んで、後悔の心で胸は一杯になり、朝までとろりともすることが出來ませんでした。

翌る日、私はいつもの通り店へ出て、成るべく心配らしい顔を見せまいとしました。然し、悲しい事にはふと氣が付いたことで、私は前よりも一層蒼くなりました。それは私の帽子と帶と、おまけに洋刀まで無くなつてゐたことです。私はそれらの品物を何處へ落して來たかさつぱり思ひ當りませんでしたけれど、恐らくあの部屋に落して來たものでせう。さうすると私があの女の人を殺したと云ふ見當をつけられるのは、當り前だと思つたからです。

私はいつもと同じ時刻に店を開きました。お隣の人は大變話好きでしたから、早速私の店にやつて來て話しかけました。

『ねえ君、昨夜から今朝がたまでに起つた恐ろしい出來事のことを、君は一體どう思ふね。』

私は一向何も知らないやうな樣子を見せましたので、お隣りの人は疊みかけて、

『何んだつて？街中大評判の事を君は知らないつておや〳〵さうかね、ぢや話すけど、知事のお嬢さんのピアンカと云つてフロレンス切つての美人が昨夜の中に殺されてしまつたんだよ。私は昨日お嬢さんが許嫁の方と一緒に活發に街を歩いてゐるのを見たんだがね。可哀さうに、今日はそのお二人が婚禮の式をあげる筈だつたのだ。』

お隣りの人の話は私の心に針を刺したやうに響きました。（つゞく）

幼年詩

若山牧水選

ぶた（賞）

福島縣喜多方町　高畑襄（十四才）

ぶた　ぶた
今お前が食つたのは
僕がたべた
梨の皮だぞ

評　道理でまづかつた。（牧水）

りんご田（賞）

山形縣櫑澤校尋六　峯田廣太

黒く見えるりんご田の中
ほゝかぶりをした人
しづかに通つた

評　何といふいゝ寫生でせう、上手な畫の先生でも斯うはかけない。（牧水）

蜂の巣（賞）

山梨縣小淵澤村　田中すゝみ（十二才）

枯れた枝に
葉はない
小さい蜂の巣が
一つあるきりです

評　峯田君のが西洋畫ならこれは日本畫、二つともよい寫生の繪。（牧水）

うさぎ

千葉縣八榮第一校尋六　宍倉アサ

うさぎ　うさぎ
白うさぎの目は
赤いな
麥の芽は
うまかろな

評　げつ〳〵と云つてある中に、作者の心がよく動いてゐる、ほんとにうまさうだナ。（牧水）

月

山形縣櫑澤校尋六　高橋正

朝起きて見ると
まだ月が
かくれて
ゐなかつた

評　驚いて見上げてゐる君の顔。（牧水）

木のみ

香川縣坂出新通町尋三　小林崇文

くりのみがおちる
しひのみも
おちるだらう
すみやく
けむり
立ちはじめた

評　靜かな冬の景色です。（牧水）

櫻

千葉縣八榮第一校尋六　齋藤利秋

世界一周の
飛行機が
日本へ來た時
日本の櫻が
咲きました

評　すこし大人くさいが、然しうまいもんだ。（牧水）

雨

福井縣敦賀町　阿久津操（十三才）

雨は降る降る

ざあ〳〵降るよ
風も吹く吹く
横つちよに吹くよ
飛ばされないやうに
傘にぎつた

評　いゝ調子ですね。（牧水）

子ねこ

山形縣櫑澤校尋六　石澤不二

子ねこ〳〵
すずならせ
なんぼいたて
ならさない

評　なんぼ云たて鳴らさなきやア打つてごらんなさい。（牧水）

あくび

東京府下目黑　伊藤駿二（十四才）

お風呂の中で
僕があくびしたら
弟もあくびした

評　天井の雫がおちこむぞ。（牧水）

ダイスキ

石川縣小松町　ヤマモトヨシコ（五才）

ユウビンノ
オヂサン
ダイスキ
ダレヨリモ
ダイスキ
オテガミモ
ダイスキ
ヨムコトモスキ

評　コノザツシモツテイツタラナホスキデセウ。（牧水）

秋のひる

東京府西巢鴨　日向桃子（十五才）

ほし大根が
白くならんで

つるしてある
よわよわしいはへが
とびまはる
秋のひる

一けんや

大阪府穴師校尋三　中村宇吉

村のはしの一けんや
私のうちは村のはし
とほくの山は
かすんでみえる

シジメ

秋田縣荒川校尋一　岩谷ミヨノ（八才）

ワタシノ
ウチノ
ヤネニ
シジメイタ（雀ゐた）
ヒガクレル
シニカヘレ（巣に歸れ）

とんだ御馳走

（少年自作童話）

三重縣度會郡四鄕村楠部第二校
山崎　豐（十一才）

フランスのあるかたゐなかに、さびしい村がありました。その村のはづれに水車小屋がありました。そしてその近所に生意氣な狐と狸が棲んでゐました。

ある日の事、水車小屋のお爺さんが町へ用事にいつてゐる留守でありました。狐は水車小屋のお爺さんの眞似をうまく化けました。そして水車小屋からはなれた河邊へいつて、きせるをくはへて釣をして居りました。すると狸がやつてきて、

『はゝ狐の奴め、うまくお爺さんに化けたな。よしおれも一つ化けておどかしてやらう。』

と狸はお爺さんの息子に化けて、帽子をかぶり卷煙草をくはへて、つりざをとかごをもつて、狐のお爺さんのそばへやつてきて

『お父さん釣れるかね。』

『おゝ釣れるよ。』

『何匹つゞたかね。』

『さうさ、十匹釣つたんだよ。』

『さうかね、晩には御ちそうが食べられる。』

『さうだよ。』

と狐のお爺さんは、プカリ〳〵と煙草の煙りを吐いてゐました。

『お父さん僕も釣るよ。』といつて、狸の息子はそばへ腰を下しました。狐は狸を見て、

『おやこいつは狸だな。生意氣な、息子に化けて來やがつたな。』

と思ひましたが、知らぬ振をして魚を釣つてゐました。

狐も狸もなか〳〵釣は上手でしたから、お互に澤山釣りました。けれども双方とも慾張りですから、人のものまでとりたいと思つてゐました。狐は狸のものを、狸は狐のものをと互にすきをねらつて河へつきをとして、魚を自分のものにしようと思つてゐました。しかしどちらもすきがありません。そのうちにお腹がすいて來ましたので、狐は自分の釣つた魚でも食べようかと思つて、キヨロキヨロとしてゐました。狸もまたお腹がすいたので自分の釣つた魚を食べようかと思つてキヨロ〳〵として居りました。

『お父さんお腹がすいたね。』

『さうだ、おれもすいたよ。』

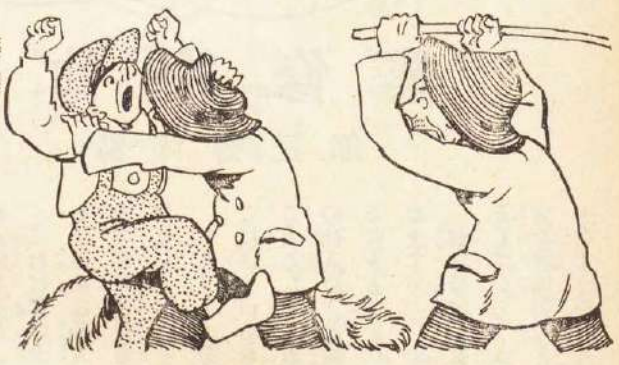
『お父さん、お前の釣つたのを一匹私にくれないか。』

『冗談云ふなよ。お前こそおれにおくれよ。』

『いやな事。』

『おれもいやだ。』

『だけど親と云ふものは子供にくれるものさ。』



と狸が申しました。

『冗談ぢやない、子供が親にくれるのがあたり前だ。それが孝行だ。』

と狐は、お爺さんの口眞似して云ひました。

狸はもうお腹がすいてがまんが出來ませんからとつぜん狐を河へつき落さうとしました

『どつこいその手は食はぬ。』

と狐はわきへとびのいて、

『やい狸め、いくら息子に化けてもだめだ。おれを河へつき落して、魚をみんなとらうと云ふんだらう、太い奴だな。』

『お前こそ太い奴だ。おれを河へつき落して魚をとらうとすきをねらつてゐるんだらう。ばかな狐め。』

『何……。』

『何んだと……。』

狐と狸とはけんくわを始めました。この時本當のお爺さんが、用事をすましてかへつてきてこれを見ると、

『うん近頃いたづらばかりする狸と狐だな。』

とお爺さんは、天秤棒が狐と狸を河へたゝきおとしてしまひました。狐と狸はブク〳〵云ひながら流れてゆきました。お爺さんは澤山つれた魚をもつてかへり、その晩御馳走を澤山食べました。（をはり）

仙術修業

澁澤壽三郎

支那の或る田舍に、鄭といふ人がありました。家は代々お役人をしてゐましたが、鄭は小さい時から仙人になりたいと考へてゐました。

これは鄭が大きくなつてからの話ですが、勞山といふ山には仙人が大勢ゐるといふことを聽いて、ある日鄭は、はる〳〵とそこまで、仙術の修業に出かけました。

だん〳〵山を登つて、頂上に着いて見ますと、そこには一つのお堂があつて、いかにも仙人のゐるところらしく、あたりが靜かです。見ると果して一人の仙人が、蒲團の上に坐つてゐました。白髮が襟のあたりまでたれて、見るからに神々しい樣子をしてゐます。

鄭は早速そばへ寄つて行つて、話しかけました。そしていろ〳〵話をして見ますと、その云ふことが實に普通の人と變つて居ります。鄭はすつかり感心してしまひました。そして是非弟子にしていたゞきたいと願ひました。さうすると仙人が、

『しかしあなたのやうにさう身體がきやしやでは、仙人の修業をすることは、つらくて、恐らくつとまりますまい。』と、云ひました。

けれど鄭は、是が非でもお弟子にしていたゞきたい、修業のつらいくらゐはきつと辛抱してつとめます、と云つて賴みました。

そのうちに、あたりが暗くなつて仙人の弟子たちがみな集つて來ました。その數はなか〳〵大勢です。そこで鄭は皆に挨拶して、とう〳〵このお堂にとゞまつて修業することになりました。

その翌朝になると、仙人は鄭を呼んで斧を授け、『これを持つて行つて、みなと一緒に薪をとつて來なさい。』

と、云ひつけました。

鄭は謹んでその云ひつけどほりやりました。

かうして毎日他の弟子たちと薪をとりに行つてくらしてゐるうちに、一月以上になりました。なれない荒仕事を毎日やらされるので、鄭の手や足は、はれあがつてしまつて、とても、辛抱がしきれなくなりました。鄭はそろ〳〵歸りたくなりました。

ある夕方、鄭は例のとほり薪をとりに行つて、歸つて來ました。歸つてみると、見知らぬお客が、二人、師の仙人とお酒をくみかはして居ります。日がもう暮れたといふのに、燈もつけてゐません。

『オヤ、どうしたといふのだらう。』

と思つてゐますと、師の仙人が、紙を圓く鏡のやうな形にきつて、壁にはりつけました。さうすると急にその紙が月のやうに輝きだして、あたりは塵ひとつば見えないものはないくらゐ明るくなりました。

大勢の弟子たちがまはりに集つて、

『なにか御用をいたしませう。』

と聞くと、一人のお客さんが、

『こんな良い晩だから、みんな一緒に樂しまなければいけない。』

と云つて、机の上の酒壺をとつて、皆にも分て飲ましてくれました。そして充分に酔へと云ひました。

鄭はそばにゐて、お腹のなかで考へました。

『みんなでお酒を飲め、そして充分に酔へといつたつて、人數は七八人もゐるのだ。一本ばかりの酒で、どうしてみんなに飲めるものか。』

ところが、弟子たちが、めい〳〵盃をとつて、我れ先にと、飲んでは、又あとあとと重ねて飲んでゐますが、壺のなかのお酒は一向に減りません。

鄭はお腹のなかで、

「これは不思議だ。」

と考へてゐました。

すると一人のお客さんがだしぬけに、

『こんな良い月に照らしてもらひながら、ひつそりして飲んでゐるといふことはない。月のお姫様を呼んで來ようぢやないか。』

さう云つて、箸を手にとるかと思ふと、それを月のなかになげつけました。すると不思議にも、月の光のなかから一人の美しい女の人があらはれ出ました。はじめは一尺にも足りない小さい人でしたが、下に降りると、とう〳〵普通の人間と同じ大きさになりました なよ〳〵とした腰、ほつそりした頸、實に畫に見る天女のやうな美しさで、ひら〳〵と天人の舞を舞ひはじめました。

そのうちに歌ひだしました。

仙々たり
しかして還らんか
なんぞ我れを月宮に幽する

そのうたふ聲はすみわたつて、まるで簫の笛をふいてゐるやうです。

やがて歌がをはつて、舞ひをさめるかと思ふと、机のうへに、とび上つて、アッと思ふ間に、またもとの箸に返つてしまひました。

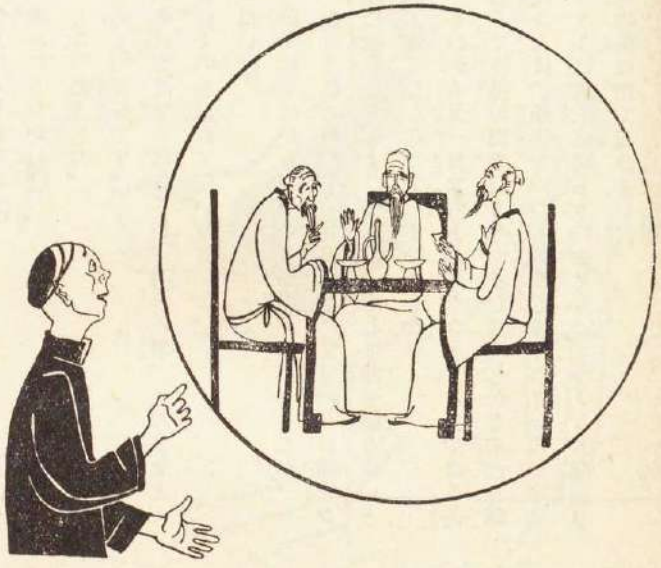
三人はそれを見て、聲をあげて笑ひました。

又もう一人のお客さんが云ひました。

『今夜は實に樂しい。しかしもうこれ以上は飲めない。だから今度は一つ、月宮殿で一盞やつて別れてはどうかね。』

と、そこで三人は席をかへて、月のなかに入りました。みなが見ると、三人は月のなかにすわつて、お酒を飲んでゐます。鬚や眉がはつきり見えて、まるで鏡に影がうつつてるやうです。

暫くたつと月がだん〳〵暗くなつて來ました。そこで弟子のひとりが蠟燭をつけて來ると、師の仙人だけが部屋にすわつてゐて、お客さんはどこへ行つたのか姿が見えません。そして机のうへには、食べのこしの酒さかなが未だおいてあつて、壁のうへの月はと見れば、紙の圓くきつたのが、鏡のやうにはつてあるだけです。



仙人はみなにむかつて、
『飲みたりたかね。』
とたづねました。
『えゝ、充分です。』
『それでは早く寢なさい。明日の朝、また薪をとりに行くのを忘れてはいけないよ。』
『はい。』
弟子たちはかしこまつて部屋をさがりました。
鄭はこれらの樣子を見て、またすつかりお師匠さんに敬服してしまひました。そして家へ歸りたいといふ氣はなくなつてしまひました。
それから又一月たちました。さうするとやはり苦しくて我慢が出來なくなりました。しかも未だお師匠さんは、仙術を一つも傳授してくれないのです。もうこれ以上は待ちきれません。とう〳〵お師匠さんの前に出て云ひました。
『私はもうこれ以上修業することは、とても苦しくて出來ません。これから家へ歸りたいと存じます。ついては、私も數百里の遠い處をまゐつて、お師匠さんについて修業いたしたのでございます。たとへ長生の術は敎へていたゞけないまでも、なにか少し傳授していたゞきたいものですが、いかゞでせう。他のお弟子さんたちは家にすわりこんで樂をしてゐるのに私はこゝへまゐつてからもう二三ヶ月といふもの、毎朝早くから夕方おそくまで薪をとることを怠らないでしたのですから。』
かういふと師匠の仙人は笑つて、
『だからわしは、最初から苦しくて修業が出來まいといつたのではないか。果して今になつて、お前は修業が續けられないと云ひだしたのだ。よろしい明日の朝早くお歸んなさい。』
と云ひました。
『ですけれど 私もながい間働いたのでございます。なにか、ちよつとした術でも授けていたゞきたいものです。さうしたら、それで、修業に來たといふ甲斐があるわけでございます。』

『では、なんの術が習ひたいかね。』
『さやうでございます、いつも見てゐますと お師匠さんのいらつしやるところは、壁でもなんでも、どん〳〵通つて行けますが、あの法を傳授していただければ、結構でございます。』
聞いて師の仙人は、笑ひながら、
『よし〳〵。』
と云ひましたが、早速お呪ひの文句を敎へてくれました。そしてそれを鄭に唱へさせて、
『入つてごらん。』
と云ひました。
鄭は壁にむかつて突立つたきり入らうとしませんので、師匠は重ねて
『入つてごらん。』
と云ひました。

鄭は決心して、そろ〳〵と進んで行きましたが、壁のすぐ前まで來ると、また止つてしまひました。

『首を下げて、つッと入んなさい。ぐづ〳〵してちやいけない。』

師匠がかう云ひましたので、鄭は又決心して、二三歩あとへさがり、走つて行つて壁のなかへ突き入りました。するとそこには、まるで壁も何もないやうに、ふわりとして身體がどこにもさはりませんでした。振りかへつて見ると、師匠の云つたとほり、自分はもう壁の外に出てゐました。

鄭はすつかり喜んでしまひました。そして師匠にお禮を云ひました。

『歸つたら、いつも身體や心をきよめておかなければいけないよ。それでなければ術を行つてもきゝめはないから。』

かう云つて師の仙人は、旅費をくれました。そこで鄭は家へ歸つて來て、

『わしは仙人になつて、仙術を修業して來た。どんな堅い壁だつて、通つて見せる。』

と鼻たかゝ〳〵話してきかせました。

けれども奥さんは、どうしてもそれをほんたうにしませんでした。

『よし、では今やつて見せるからよくごらん。』

と云ひながら、鄭は壁から五六尺さがつて、走つて來て中へ入らうとしましたところ、頭が堅い壁にぶつかつて、ばたりと倒れてしまひました。

奥さんがたすけおこしてみると、額に大きな卵ほどの瘤が出來てゐました。

『あなた、これが仙術ですか？』

奥さんがからかふと、鄭はぶん〳〵おこつて、

『あの仙人は、良くない奴だ。實に怪しからん。怪しからん。』

とばかり云つて、口をとがらしてゐました。

（をはり）

長篇（前號まで）の梗概

小鳥は空に　京都の郊外嵯ヶ谷の丘の麓に、小ぢんまりした赤瓦の洋館が立つてゐました。それは少年義雄のお父さんが今から數年前に建てたものですが、お父さんが死んでからは、手入れも屑かないので、壁や柱のペンキもはげて了つてゐます。

この家に、義雄はお母さんと女中のお美津と三人で淋しく暮してゐました。義雄のお父さんは有名な岩村伯爵の三男で畫家でしたが、義雄のお母さんの信子と結婚をする時、信子が身分の卑しい植木屋の孤兒であるために頑固な父の怒りに觸れて、遂に東京にゐるのが面白くなくなり、長い間あこがれてゐた、京都へと來たのでした。間もなく義雄が生れたのですが、お父さんはそれから六年目に死んで了ひました。それ以來義雄は淋しい中に育つて、今では近所の少年達とも元氣よく遊ぶやうになりました。殊に義雄の大好きなのは近くの駐在所にゐる森田巡査でありました。

出目助さん道中記　近江の琵琶湖に近い大津の宿に、出目助さんは　祖母さんとたつた二人で暮してゐました。お父さんはつひ近年まで丈夫だつたのですが目川といふ處で何者かのために殺されて了ひました。それ以來出目助さんは自分で祖母を養はなければならない境遇となりました。恰度、その頃、出目助さんが祖母に孝行を盡してゐるといふことが、お殿樣のお耳に入つて、御殿へ呼ばれてお殿樣の其の乘馬だつた駿の馬をいたゞきました。出目助さんはこの馬に『こん』といふ名をつけて大切に育てゝ毎日馬を曳いては駄賃とりをしてかせぎました。恰度その時、西國大名の都筑家のお姫樣が江戸へお下りの途中、大津の宿をお通りになりました。

名曲『嘆きの薔薇』　神戸山手にある市田家の廣い邸には、逸雄といふ十三になる少年とそれから河野といふ忠僕とが住んでゐました。逸雄の父も母も、すつと昔にこの世を去つて、邸はいつも閉りとしてゐましたところが、或日シュライヤといふ獨逸人と、森といふ日本人が訪れて來ました。それは、逸雄の邸に『珊瑚』といふ不思議な丸官鳥がゐて、逸雄のお父さんの遺品の名曲『嘆きの薔薇』を吹込んでゐるといふことを知つたからです。

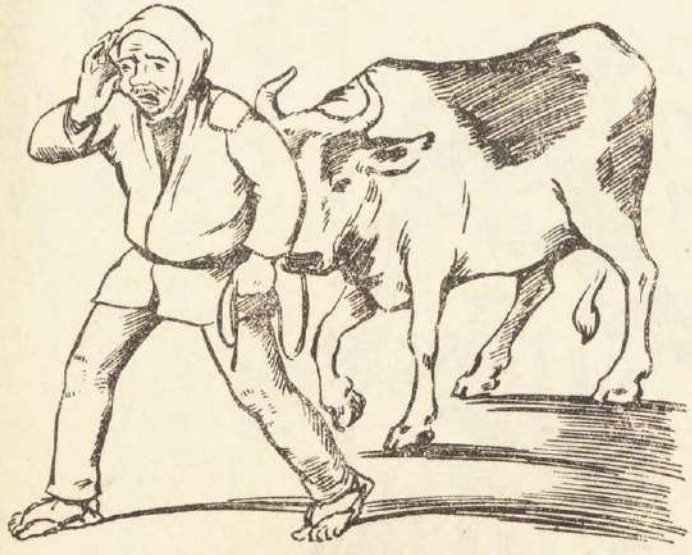
二人の男は、是非丸官鳥の『珊瑚』を借り受けて蓄音器に吹込みたいと頼みました。氣輕な逸雄はすぐにも貸しさうにしましたので、忠僕の河野がそれはいけません、蓄音器に吹込むなら、あなたが御自分で持つていらつしやい。といひました。二人の男も切りと頼むので、遂に逸雄は、自分が自動車に乘つて蓄音器會社に出かけて行つて、吹込器の前に立ちました。所がいざ吹込みとなると、丸官鳥は啞のやうに默つたまゝ一聲も發しませんでした。それも道理、大事な珊瑚はいつか他の丸官鳥とすり變へられて了つてゐたのです。逸雄は『アッ！』と驚いて後へ倒れさうになりました。

春と小鳥

若山牧水

びイ——よ、びイ——よ
鶯が鳴きます
ひイ——んこつこつ、ひんこつこ
あれは鶏に御座候
あとはうぐひす眼白鳥

おひおひ春とは
なりました



日本一の粗忽者

松平三千夫

昔ある處に五郎助と云ふ男がありました。この男は日本一の大粗忽者として、誰知らぬ者のない程の名物男でした。

五郎助はいつも粗忽ばかりしてゐるので、お金などどうつともためることも出來ず、百姓に大切な牛一匹買ふことも出來ませんでした。ある日五郎助は牛が入用になつたので、近處の家へ牛を借りに行きました。

『誠にすみませんが暫く牛を貸していたゞけませうか。』

『あゝ五郎助さんか。今日は牛が恰度遊んでゐるからお使ひな。』

と云つて快く貸してくれました。五郎助は大喜びで牛を畑に引張つて行つて、一日うんと働かせました。やがて日が暮れかゝつたので、仕事を終へて歸つて來ましたが、粗忽者の五郎助は牛を借りた家を忘れて了ひました。

『さア弱つたな、何處の家の牛だつたかな。』

と思案し乍ら歩いてゐるうちに、牛を借た家の前に來ました。その時牛を貸した農夫は畑にゐてちらりと自分の牛の方を見ましたが、よもや五郎助が牛を借りた家を忘れてゐるとは氣がつきませんから默つてゐました。で五郎助はそのまゝその前を通り過ぎて了ひました。そしてその隣の家の前に來ました。

『どうもこの邊だつたな、たしかに。』

と五郎助は家の中を覗いて見ると、裏の井戸傍でお上さんが米を洗つてゐました。

『たしかにこゝだ。』

と思つて五郎助は、

『どうも有難うよ、お返しするよ。』

と云つて牛を門前に置き去りにして、自分の家へ歸つて了ひました。その家のお上さんはその聲に氣がつかなかつたので、牛のことなど知らずに家の中へ這入つて了ひました。獨りぼつちになつた牛は草を食ひ乍ら、夕暗の中をさまよつて、やがてその妻が見えなくなりました。

翌る朝牛を貸した農夫は、五郎助の家へやつて來ました。

『お早やう。昨夕牛を返しに來なかつたね。今日うちで使ふから返してくれ。』

五郎助は不思議さうに農夫の顏を見乍ら言ひました。

『牛は昨夕返したよ。』

『いや受取らないせ。』

『そんなことはない。確かに返したよ。』

「ぢや誰に渡した。」
と農夫は怒つて ひました。
『裏でお上さんが米を洗つてゐたから、有難うよ、お返しするよ、と云つて門前へ置いて來た。』
『嘘云へ。今日家内に聞いたが知らぬと云つたぞ。』
『そんなことはない。確かに返したよ。』
『こん畜生、太い奴だ。返したなんて云ひやがつて、大方賣り飛ばしやがつたのだらう。俺と一緒に來い。代官樣に訴へてやる。』
と農夫は五郎助を引立てました。
『確かに返したのだから仕方がない。何處へでも行かう。』
と五郎助は諦めて農夫と一緒に代官屋敷の方へ出かけました。二人が不氣嫌な顏をして田舍道を四五丁來ますと、向ふから一匹の馬が砂煙を立てゝ荒れ狂ひ乍ら走つて來ます。その後から馬丁が馬を追ひ乍ら、

『おーい〳〵。その馬を留めてくれ。』
と懸命に叫んでゐます。五郎助はそれを見ると、
『よし來た。』
と路傍に落ちて居た大きな石を兩手で持ち上げて、走つて來る馬を目がけて投げつけました。馬は一聲高く嘶いてその場にばつたりと倒れました。
『有り難う〳〵。』
とやつと馬丁は驅けつけて來て、手綱を引張つて引き起さうとしましたが、しかし馬は唸るだけで起きようともしません。
『ヤッ、前脚が折れてゐる。これは大變だ。こん畜生！この馬を誰の馬だと思つてゐやがるのだ。勿體なくも代官樣のお馬だぞ。さア來い。貴樣を連れて行かなければ俺の命がない。』
と馬丁は眞赤になつて怒つてゐます。
『えッ、代官樣の馬？ それは飛んだことになつた。どうぞ御勘辨なすつて下さい。』

と五郎助は平蜘蛛のやうになつてあやまりました。
『何を云つてゐるんだ。どうしても貴樣を連れて行かねばならぬ。さア來い。』
『どうも仕方がない。では參りませう。』
と粗忽者の五郎助は農夫と馬丁とに引摺られて歩き出しました。少しばかり行きますと廣い河に行きあたりました。水の流れが非常に早いので、三人は暫く岸に立つてあたりを見てゐますと、向ふから一人の男が裾を兩手でからげ乍ら、口に木片のやうなものを喞へ乍ら渡つて來ます。それを見て五郎助は聲をかけました。
『おうい。その邊は淺いのかね。』
『うん、こゝらは淺いから渡つても大丈夫だ。』
とその男は云ひましたが、その時口に喞へてゐた木片のやうなものを水の中に落して了ひました。
『やッしまつた。これは大變。』

と男は大狼狽して拾はうとしましたが、流れが早かつたので、もう間に合ひませんでした。木片はどんどん深い處に流れて行き、やがて見えなくなつて了ひました。その男はやがてこちらの岸に上つて來て、五郎助に喰つてかゝりました。

『貴樣が淺瀬など聞くから大切な彫物をなくして了つた。さア彫物を返してくれ。』

五郎助はすつかり當惑して頭を掻きました。

『どうもすみません。だけども落したのは貴方ですから、どうも仕方がありません。』

『なに、俺が落した？　馬鹿野郎、淺瀬なんぞ聞かなければ落しはしないのだ。貴樣が惡いのだ。返さなければ仕方がない。代官樣に訴へてやるがどうだ。』

『仕方がない行きませう。どうせ行く道ですから。』

と五郎助はすつかりしよげ返つて三人に護られ乍ら歩き出しました。少しばかり行きますと居酒屋が一軒ありました。五郎助はそれを見ると三人を振り返つて云ひました。

『もし皆さん、私は代官樣へ行けばどうせ命はないものと思はねばなりません。でこの世の暇乞ひに、好きな酒を一杯飲んで行きたいと思ひますが、如何でせう。』

『うむ。ぢや許してやる。早くしろ。』

『へえ、有難うございます。では一寸一杯。』

と五郎助は居酒屋へ這入つて行きました。

『お上さん。熱いのを一本つけておくれ。』

と云ふなり店に上り込んで、厚い蒲團の上へどつかと坐りました。その途端、蒲團の下からキャツと云ふ叫び聲がして、五郎助のお尻は軟いお餅の上に坐つたやうな氣持ちがしました。

『ワツ畜生！　この唐變木奴。』

と云ふ聲と共にお上さんはお調子をそれに投げ出して、五郎助を突き退けて蒲團をはね退けて見ます

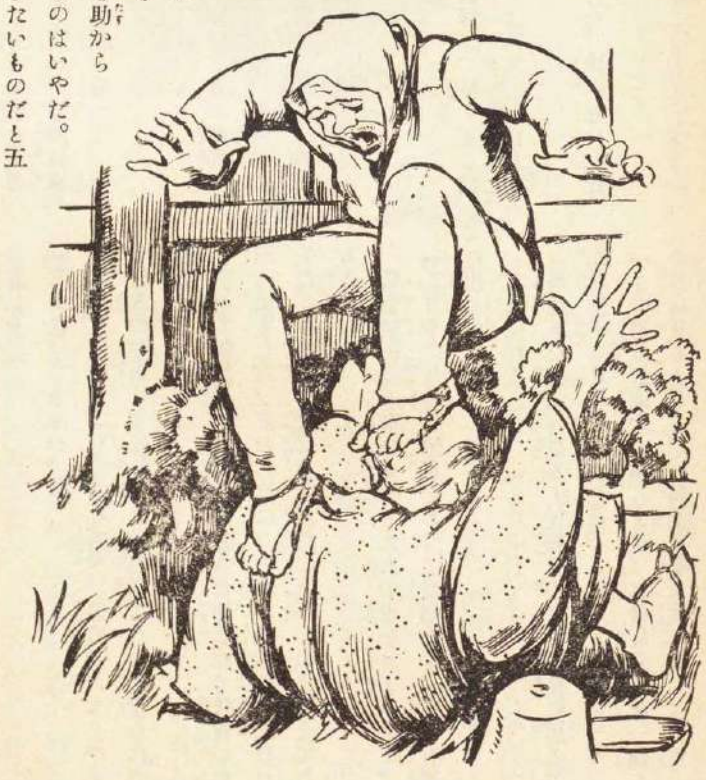
と、そこに赤子が獸しつぶされて息が絶えて死んでゐました。

『畜生、よくも大事な坊やを踏み殺したな、この仇を代官樣に取つて貰ふから一緒に來い、さア來い。』

とお上さんは氣狂ひのやうになつて五郎助を引張り出しました。

『やアこれは、何うも。』

と五郎助は自分の粗忽にあきれて、四人の男女に取り圍まれてしを〳〵居酒屋を出ました。かうなると流石の五郎助も恐しくなりました。そしてもうどうしても助からぬ。屹度殺される。あゝ殺されるのはいやだ。さうだ逃げよう。何とかして逃げたいものだと五



郎助は首垂れて、屠處の羊のやうな歩みを運んでゐました。暫くすると恰度道に添うて高い塀の所に來ました。五郎助はこれ幸と四人の隙を窺つて、突然塀に手をかけると、

『エイッ。』

と身を躍らして塀を飛び越しました。その刹那、何か藥鑵のやうなものが踵に觸れました。五郎助はひよつと見ると老人です。老人は堀蔭の暖い庭で植木をいじつてゐたのですが、五郎助に蹴飛ばされてもう息が絶えてゐました。

『失敗つた。又しくじつた。』

と五郎助は逃げ出さうとしましたが、早くもこれを見つけた老人の息子が馳け出して來て、五郎助を捉へて了ひました。

『人殺し、貴樣は何故親父を殺した。訴へなければならん。さあ代官所まで來い。』

『どうもすみません。つひ粗忽をしまして、どうかお許しを。』

『ならん。さあ來い。』

と引立てようとしてゐる處へ、他の四人もどやどやと入つて來て、五郎助は又否應なしに引摺られて行きました。

やがて粗忽者の五郎助は五人に伴れて代官の白洲へ出ました。その代官はこの國の越前守と云はれてゐる程有名な代官で、裁判の上手なので聞えてゐる人でした。

代官は一段と高い處から六人の者を見下されて、

『こりや、汝等は何用があつて罷出たか。順次有體に申し述べよ。』

と云はれました。

最先きに農夫は恐る〳〵顔を上げて、後に居る五郎助を指さして云ひました。

『この男は五郎助と申します。私は昨日牛を一頭この男に貸しまして、今朝受け取に參りましたが何と

云つても返しません。何とぞ御慈悲をもちまして、早速牛を返すやう御申聞けを願ひ上げます。』

代官は五郎助に向つて云ひました。

『こりや、五郎助とやら面を上げろ。うむ、その方が有名な粗忽者の五郎助ぢやな。よし〳〵。何故に借りた牛を返さぬか、有體に申せ。』

五郎助は恐る〳〵顔を上げて云ひました。

『はい、私は昨日たしかにこの男から牛を借りました。しかし夕方たしかに返しました。その時この男は畑にゐて牛を見たのでございます。庭にはお上さんが米を洗つてゐましたから、門前に牛を置いて、有難うよ、お返しするよ、と云つて歸りました。』

代官は暫く考へてゐましたが、

『五郎助、その方が有難うよ、お返しするよと云つた時、この男は何と云つたか。』

と聞きました。

『ハイ、その時この男もお上さんも何とも申しませんでした。たゞ私が牛を引いてこの男の家の前を通つた時、一寸私の方を見たばかりでございます。』

そこで代官は兩人に申し渡しました。

『こりや兩人。よく承れ。五郎助が返すと云つてもその聲が農夫に届かなかつたのぢやからこれは舌

が惡いのぢや。よつて五郎助の舌を引き拔いて遣す。又農夫がそれを一寸見てをり乍ら牛を受け取らなかつたのは、その方の眼が惡いのぢやから、その方の眼をゑぐり取つて遣はすがどうぢや。』

すると農夫は驚くまいことか。

『代官樣、もうようございます。牛なぞいりません。』

と云つて逃げて歸りました。

そこで代官は第二の男を見下して云ひました。

『次ぎの男、面を上げろ。うむ、その方は余の馬丁ぢやな。何事の訴訟か、眞直ぐに申せ。』

馬丁は恐縮し乍ら云ひました。

『この五郎助奴が、御愛馬の前脚を打ち折りましてございます。』

『何と申す。粗忽者が余の愛馬の脚を折つたと申すか。怪しからぬ奴ぢや。これや、五郎助、何故に余の愛馬の脚を折つたのぢや、正直に申せ。』

と代官は殊の外立腹して云ひました。

『ハイ、私がこちらに來る道で、馬が荒れ狂うて私の方へ走つて來ます。その後からこの人が馬を留めてくれ、と申しますから石を拾つて投げつけました。ところがあたり處が惡くて前脚が折れたのでございます。私は決して折るつもりでしたのでは御座いません。どうぞ御勘辨を願ひ上げます。』

と五郎助は云ひました。

『うむ、馬を留めてくれと云つた馬丁の舌が惡い。その舌を截り取る。又五郎助　石を投げた腕も よくない。よつてこの腕も切り取る　兩人共異存はあるまいな。』

と代官は申渡しました。馬丁は大いに驚いて、

『代官樣、舌を拔かれては大變でございます。どうぞお許しなさつて下さい。馬は何とかしますから御勘辨下さい。』

と逃げ出して了ひました。

代官は次ぎの大工に向つて云ひました。

『大工、その方は何の用ぢや。』

『ハイ、五郎助奴が大切な彫物を失くして了ひました。どうか返すやうに御申聞け下さいますやうお願ひいたします。』

と大工は云ひました。

『こりや五郎助、一體それは何うしたことぢや、有體に申述べよ。』

『ハイ、私が河の岸まで參りますと、この大工さんが向ふから渡つて來ますから、淺瀨は何處かと訊きましたら、此處だ、と敎へてくれました。その時大工さんの口に啣へてゐた彫物が落ちたのでございます。』

代官は暫く考へてゐましたが、

『うむ、先づ聲をかけた五郎助の舌を拔かねばならぬ。が一體物は手に持つべきものだ。それを口に啣へて居たのは大工もよくない。よつて大工の齒を悉く打ち折ればよい理窟ぢや。どうぢや左樣にして遣はさうか。』

と云ひました。大工は大いに驚いて、

『彫物よりも齒の方が大切でございます　私も願ひ下げに致します。』

と、これもたうとう逃げ出して了ひました。

代官はその次ぎに、居酒屋のお上さんに訊きました。

『こりや、その方の願ひは何ぢや。』

『ハイ、私は居酒屋の後家でございますが、この男が私の子供を踏み殺しました。どうぞ御處刑を願ひ上げます。』

『うむ、それは容易ならんことぢや。五郎助、それは一體どうしたのぢや。』

『ハイ、私が一杯飲みたいと思つてその居酒屋へ上り込みまして厚い蒲團の上に坐りました。すると蒲團がきやつと泣きますから早速飛び退きましたが、もう赤子は死んで居りました。決して殺す氣でやつ

たことではございません。』

代官は大きく頷いて、

『さうか。こりや女、その方は何故居酒屋であり乍ら客の座敷へ赤子を寢かせ、又これに座蒲團などをかぶせておいたのぢや。兩人共よくない。と云つて死んだ者は仕方がない。で女に申しつける。この五郎助をその方の聟に遣はすから、その子供の代りをこしらへろ。』

と云ひました。お上さんは喫驚して、

『代官樣、死んだ子供は諦めます。どうか五郎助を聟にすることだけはお許し下さいませ。こんな貧乏な粗忽者は眞平でございます。』

と、これもはふ〳〵の態で逃げて歸りました。

さて代官は最後の男に向つて云ひました。

『その方の願ひの條は何ぢや。明かに申せ。』

『ハイ、この五郎助奴が私の親父を殺しましてございます。どうぞ死刑にして仇を取つていたゞきたう存じます。』

『何？　親の仇、いよ〳〵容易ならんことぢや。五郎助、これは如何なる理ぢや、僞らずに申せ。』

『ハイ、私は餘りいろ〳〵な過失をしましたので、逃げようと思つて塀を飛び越しました。ところがその塀の蔭にこの人の親父がゐたので、私は知らず識らずの中に老人を蹴殺しました。』

『うむ、過失とあらば仕方がない。こりや若者、その方は親父が無事でゐたらそれでよいのだらう。』

『ハイ、左樣でございます。』

『然らば今日からこの粗忽者をその方の親父として遣はすによつて充分孝養を盡せよ。』

『代官樣それは困ります。こんな粗忽者の親父ならない方がましです。私も願ひ下げいたしません。』

とこの男も狼狽して逃げ出して了ひました。かうして日本一の大粗忽者の五郎助は、危い處で大官の情で命を繼ぎました。（をはり）

懸賞童謠大募集

本誌五月號は特別號として『世界童謠號』を發行します。この號には現代童謠大家の苦心の作を網羅すると同時に、世界各國の名作童謠を紹介します。尙この號の一大使命として、隱れたる新進作家の作及純眞なる少年少女の作を廣く募集して、これを選者の嚴選の上發表します。

左の規定に從ひ奮つて御投稿下さい。

大人篇

選者　野口雨情先生

賞金　一等（一篇）金拾圓
　　二等（二篇）金五圓
　　三等（三篇）金三圓

子供篇

選者　若山牧水先生

賞金　一等（一篇）金拾圓
　　二等（二篇）金五圓
　　三等（三篇）金三圓

但子供篇の當選者に限り正金でなく金の星社發行圖書で希望通りのものを金額だけ呈します。

用紙　原稿用紙に限る。一人三篇限り。

注意　「懸賞童謠大人篇」或は「子供篇」と封筒及原稿用紙に朱書のこと。

締切　大正拾四年二月二十八日

宛名　東京市外田端三五一金の星社

綴方

齋藤佐次郎選

お風呂場（賞）

長野縣北佐久郡小諸校尋六

小口壽滿子

ザブンと勢よくとび込んでかたまではひらうと思ひながら體をちぢめると、ザーッとお湯が湯つぼにあふれ出て、洗場の板の上にびちや〳〵音を立てながらこぼれ、湯を捨てる穴の中へすひこまれる樣に落ちて行く。ぶくん〳〵とお湯がだん〳〵わいて來る。ふと窓から外を見ると、青々とした大空に、薄茶色のちぎれ雲があちらこちらにたゞよつて居る　何だか空が湖で、雲が波の樣な氣がする。ぼんやり色々な事を考へてゐると、どこからか、とぎれ〳〵に子守唄が聞えて來る　私も一しよになつてうたひ出した。

一生懸命になつてうたつて居ると、お緣側の方から「お湯はまだなの」と母の呼ぶ聲がした。ハッと氣がついて急いで湯から出てかがみを見ると、顏がりんごの樣に赤くなつて居た。

お母さんの病氣（賞）

山梨縣北巨摩郡村山西校高二

中村ぬい

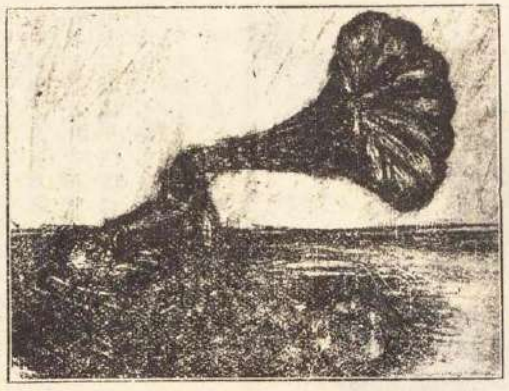
お母さんは赤坂の稲荷さんへ行つて歸つてから、少し工合が惡くて藥を服んでゐました。二十一日は暖い日でしたから、お母さんも起きて、あれやこれやいろいろの用を足しましたが　其の晩俄かに氣持が惡くなつて、としたりくだしたりして、とても苦しみました。朝になつて便所へ行くと言つたので、お父さんが「連れて行つてくれる」と言つたが、「いいものう一人で行くから」と言つて行きました。お父さんは、もしもあぶない事があつてはいけないと思つて、後をついて行つたら、もうお母さんは便所で苦しんでゐました、お父さんはびつくりして、あわててお母さんを便所から連れ出しました。私は緣側で針仕事をしてゐたが、とても苦しがる聲がしたので、便所の方へ行つて見た。

お母さんはもう白い目をして眞青の顏になつて、夢中でした。私はびつくりして「お母さん何をしただい」と泣きながら聞いたが、少しも返事をしません。私は急いで兄さんを呼んで來て、お母さんを抱いて家の中へつれ込んで、ふとんの上にねかしました。その時はもう近所の人が大勢よつて來て、「何をしただい、昨日はあんねん働いたのに、今朝はどうしただい」と口々に言ひました。お父さんは少ししをれた顏つきで、「ゆんべくだしたり、としたりしたら、急に今朝は工合が惡くなつただものう。」と言ひました。それからみんなで話をしながら一生懸命もんでやりました。もんでゐるうちに西の家のおつちやんが、東の割のお醫者さんを迎ひに行きました。

お母さんは苦しがつて呻るばかりでした。私と姉さんは泣きながらもんでやりました。お母さんの兩方の肩を、かみすりで切つてうんとよくもんでやりました。切つた所から血が一ぱいにぢみ出ました。上の家のおつちやんは「これではいいね、血がにぢくむからうんともめば大丈夫だ」と言ひました。それから桃の葉と瓜の葉へ鹽をつけてよくもんで、手足へつけてこすりました。それでもお母さんの手足はやたらちぢまつてしまひます。又からしをすつて足へつけました。お母さんの苦しみはどんなだつたか知れませんでした。私はその苦しがるのを見て、ほんとに困つてしまひました　私は泣きながら佛さんへ線香をあげて、「早くお母さんがよくなるやうに」と手をすつてをがみました。もとちやんと二人でお墓まで行つて、線香を立てて、二人で土の上へすわつて「早くお母さんがよくなるやうに」と又をがみま

「植木」（賞）　香川縣上氷木校尋六　黑田幸雄

「蓄音器」（賞）
香川縣氷上校　熊野　義雄



した。お母さんはお醫者さんの來る少し前に、やうやうしようがついて口をきくやうになりました。その時お母さんは「とても寒いから早くふとんをきせてくりよう」といふので、姉さんは急いで、ふとんとねまきと夜着を持つて來て着せましたが、それでもまだ「寒いから何かきせてくりよう」と言ひました。少したつとお醫者さんが來て、お母さんにいろいろの事を尋ねました。お母さんは苦しさうに小さい聲で答へました。

雀（賞）

山梨縣大月廣里東校尋四
設樂　ハル

お日樣がよくてらない或日のお晝時でした。私ははかまを指先でつまみながら、ひくい聲で唱歌を歌ひながらおとなりのへいの所まで來ました。おとなりの庭に水道の水がむつてゐました。その中になんてかはいゝでせう。まあるいからだの雀が、すみきつた水の中で羽までいれて水あびをしてゐました。私はかはいくてかはいくて何もわすれて、バタバタとんでゆきました。雀は遠くへにげて行きました。私はその水の中を見ました。何もゐません。たゞすみきつた水が音も立てずに光つてゐました。

私は急に悲しくなりました。私が屋根の上を見上げたら、お日樣が急に暗くなりました。

いたち

京都市小川通一條南
伊藤　富士雄

僕が朝の御飯を食べてしまつた叔父さんが鳥屋から大聲で呼んだので、何だらうとびつくりして、鳥屋へ行つてみた。鳥屋の入口に叔父さんが、楊子をくはへたまゝ、心配さうな顔をしてゐられた。僕が走つて行くと、「叔母さんもお出でといつてきな」と言つたので、すぐ走りもとに居られた叔母さんを呼んだ。僕は「何、どうしたんや」「鳥がいたちにやられたんだ」と叔父さんが言つた。「どれ」「これを見てみ」と言つて、首をぐなんとたれて、とさかの色の惡い雌雞を見せられた。「私もねゆうべあんまり雞がないたので、何だろと思つたんだが、いたちだとは知らなんだ」と叔母さんが雞を下げて、「ほんでも可愛さうやな」と言つて、首のあたりをながめて居る。叔父さんは何處からいたちなんかが入つたのやろと方々廣い鳥屋を檢べた。「酒倉だから、窓から入つたのやろ」と僕は思つた。雪が降つて居たので、いたちの逃げた後が點々と庭を通りへいを越えて、桑畑にまでついてゐたが、そこからどこかへ行つてしまつてゐた。

寒い日にほんとに可愛さうだ。いたちがにくらしかつた。すぐ學校がおくれると思つて、カバンを下げて走つて行つた。道で武雄君と一緒になつて、今朝の事を話したら、冬はよくとられるからつまらないと言つた。學校から歸つて來ても、一羽たらないので、何だかさびしい樣な氣がした。

「金銀水の井戸」（賞）
愛知縣牛川本町　新美　秋雄（十五才）

魚つり

京都府宇治郡宇治村字木幡尋四
横井　修吉

昨日の午後二時ごろ、兄さんと二人で五段池へ魚をつりにいつた。行く道々大きなのがつれゝば

「コタツ」（賞）
秋田縣朝日校高一　岩谷　貞三

が先づはりにみみづをつけて、水の中へさををつけた。兄さんもつづいてつけられた。

兄さんのはつけられるなりひいた。ぴんとさをを上られると、何もついて來なかつた。兄さんは「しまつた。今度こそひいたらつつてやる。」といつて、ゑをなほしてつけられた。又しばらくするとひいた。兄さんは今度はにがすものかと思はれたのか、先より少し早くさをを上られた。すると二寸ぐらゐのふながつれた。けれども僕のはまだつけてから少しもひかないので、兄さんに「ちよつともひきよらへん」といふと「それではここへやれ」といつてひきよりさうな所ををしへて下さつた。僕がさををつけてしばらくするとひいた。僕が上やうとすると、兄さんが上てやらうといつて、さををひつばられると、さをは弓のやうにまがつた。

水の中からは、大きなふなのはらがみえた。僕は思はず「大きなやつだ。」とさけんでさををひつばると、そばにあつたごもくに糸がひつかゝつて、ふなはにげてしまつた。僕はあとでをしい事をした、ひつばらなければ今ごろはこのへれ物の中に入つてゐるのに、とにがした事を思へば思ふ程、あのふながをしくなつて來る。それからはひいたがすこしもつれなかつた。

をんどりの死

横濱市本牧町本牧校尋四
村田邦夫

よくはれたはつ秋の日のことであつた。僕がねころんで本をよんでゐると、とつぜんお母さんがはひつてゐらつしやつて、おばあさんに「をんどりが死にさうですよ」

「秋の景色」（賞）
富山市八人町尋五　野中　清治

と、おつしやつた。僕はおどろいて、よみかけの本をそこにおいて、いそいで、とり小屋へいつて見た。うすぐらいとり小屋のすみに、昨日まで、元氣だつたをんどりが、ぐつたりとよこになつてゐた。家へ來てゐたしごとしが、日當のいゝ所へ出してやつて、とうがらし水をのませたりした。ぐつたりしたをんどりのとさか、つぶつた小さな目。たとへちくしやうでも、自分の家にゐる生物が、今、死のうとしてゐるのを見てゐるのは、ほんとにつらいことだ。

あまりかはいさうで、見てゐられなくなつたので、うちへはひつて、本のつゞきをよみはじめた。けれど、をんどりのことが氣になつて、いくらよんでも、面白くない。そのうち「をんどりが立てた」といふこゑがしたので、ほつとした。けれど、それはほんのわづかのよろこびで、あくる日、をんどりはとう〳〵死んでしまつた。秋の日の光が、ぽか〳〵と、さびしいとりごやをてらしてゐた。

小鼠

東京市外高田町字鶴山
恩田孝一

顔を洗はうと思つて、勝手に行くと、鼠收に鼠が一匹かゝつてゐます。小ちやな可愛い鼠です。外に出たいんでせう。金網の中をぐる〳〵廻つては、時々頭をあげて「チュッ〳〵」と泣いてゐます。又私の方を見ても「チュッ〳〵」つて泣いてゐます。

「お家に歸して頂戴よ。もうおい

たはしませんから、チユッ〳〵」つて云つてゐるんでせう。

小ちやな鼠さん　お前には父さんも、母さんもあるでせう。今頃まで何をしてるんだらう。まだ歸つて來ないよ。ときつと皆は心配して待つてゐるでせう。お前は何故おいたをしたの　おいたをしなければ　こんな物の中へ入れられもしないのに。お前はもうお家に歸へれないつてのを知つてる。それでそんなに泣くの。お前が死んでも、皆なにこれからおいたをしない樣に云つておくれ。

今朝の有樣

香川縣木田郡氷上校尋六
遠藤武雄

ふと目をさますと　お母さんの床はきれいに始末してある。昨夜ともしてあつた豆らんぷも消えたのか、あたりは眞暗だ　ふと臺所の方に燈がついてゐるのに氣がついた。飛び起きて行つて見ると、ゆうべ枕元へ置いて眠つた筈の豆らんぷに火がついてゐる。けれどもあたりには誰も居なかつた。はてなと耳を澄ますと、井戸端の方で「ガタガタ」と言ふ音がする。コハゴハ何だらうと思つてゐると、暫らくで其の音もハタと止んだ。次に聞えるのはばけつと下駄の音。「ハハァお母さんだネー」と思つたので「お母さんかい」と言つたが聲が低かつたのか、返事がない。敷居をまたいで裏口へはひつたのを見ると、思つた通り母が朝飯の仕度をして呉れてゐたのだ。母は「武雄早や起きたのかい」とにこにこしてゐる。其の時、時計は勢よく五時を打つた。

夜風

山口縣熊毛郡麻田校尋五
松浦トミ子

かあさんと、遠い所から歸りしなでした。そばにあるかやのほが、夜風にふかされさびしげだつた。二本ほがゆれてた。私が「母さん」と一聲した。母さんはさむからう、あのやうに夜風がふけばさむからうと、ていねいに言つて下さつた。さむいさむい夜風が私の顏にぼーとふいて來た　私はそのときねむたかつたが、しせんにねむたくないやうになつた。だいぶんおうちにちかづいた。夜風もしだいにやんで來た。月は高くのぼつた。

あゝ、はやくおうちにかへりたいもんだと、お母さんに言つた。もうなにの音もせず、川の音がかすかにきこゆるばかりであつた。もう時間は十一時頃であつた。

だんだんとうちもみえだした。涼しい夜風もこころもちよくふく、うちもちかづいたから足もかるくいぬる。家の下に歸ると、しろいものがはせのきにぶらさがつてゐたので私はびつくりした。よくよくお母さんと行つて見ると、紙のかんばんであつた。

カルタ取り

秋田縣仙化郡朝日校高一
岩谷　貞三

餘す所、敵も味方も四五枚になつた。「しつかりするのだよ」「よし、今度こそ、取つて見せるさ」豐治君はきつとにらむ。敵も味方もしんみりとして、喜久治君の讀むのを、いまか〳〵と待ちかまへてゐる。

「ばけ物の行列」と喜久治君が讀みはじめる。「ハイ」敵の貫一君の手が端の札を打つ。ぎよつとした。「狸が酒買ひに」「よし、來た」あつたぞと、手を札に見かけて突出す。「ハイ〳〵」

「バタ〳〵」僕の手と喜久治君の手が一時に札を突く。「おそかつた」又喜久治君に取られる。だん〳〵と時をうつすに隨つて、敵二枚に味方一枚だ。さあ今度だ、と僕は殘りの一枚をにらみつける。心臟の鳴りが、耳に聞える樣だ。おまけに顏までが非常にほてる。喜久治君もいよ〳〵まごつく。「二階から」と讀んだ時だ。何もかにも無中になつて殘りの一枚をたたきつけた。當つた「ワアーッ」「萬歳〳〵」僕も豐治君も思はず叫んだ、フト氣付くとにぎりしめた左の手に、汗がにじみ出て居る。どちらも顏が赤い。

「菊」（賞）　秋田縣川校尋一　岩谷　ミヨ

通信

自由畫選評

山本鼎

△今月は數も少く佳作も少かつた。もつと素描を送つて下さい。

△黒田幸雄君の植木の寫生しつかり出來て居ます。植木鉢がすこしまづい。

△熊の義雄君の『蓄音機』どつしりした繪でいいが少し黒くなりすぎた。それからパツクの紫クレイヨンが不調和です。

△新美秋雄君の『金銀水の井戸』色が少なまですが、全體に軟かい味がもつたいゝ繪です。

△岩谷貞三君の『こたつ』かういふ風俗を描いた繪を見るのはたのしみだ。描いた子供の生活が出て居るから。三人がこたつにかたまつて何か話して居るんだいう。

△野中清治君の『秋の景』色面白味のある繪なんだが、如何にも色がなまです 稻むらのかげの紫色や、杜や野原の綠色はあんまりひどいもつと眼に見た色合を出して御覽なさい。

△岩谷ミヨノさんの『菊』よくかけて居ます。菊の花の描き方などはつきりと強くかいてあつていゝ。

幼年詩選評

若山牧水

一體に揃つた出來で、とびぬけていゝといふのはなかつた。入賞もその近くの作も殆んど大差ない樣がある。

本誌に來るのにはあまり見かけない樣だが新聞などに出てゐる子供の作つた童謠の大分は大抵機智を主にして作らせてある樣である。ウイットといふか「落ち」といふか、一寸した思ひつきの、無邪氣らしくてその實イヤ味たつぷりのシャレから出來てゐる樣であるが、私は大嫌ひである。いかにもコマシヤクれた子供が想像せられて不愉快である。我等の仲間にだけは、これを流行らせたくないものと思ふ。

綴方の選後に

齋藤佐次郎

今月は女子の方がみんなよい成績だつたのは面白い現象だつた。そろひも、そろつて、賞に三人入つたのは、選者のエコヒイキだと思つて貰つては困る。讀者諸君が一讀すれば何れの作が優れてゐるか、直ちに分ることである。

△小口マま子さんの『お風呂場』は氣に入た。餘計なことを書かないで、あゝ思切つた簡略法を用ひて成功してゐる。味の深い作だ。

△中村ねいさんの『お母さんの病氣』は實に眞劍な作だ。事柄が事柄だけに、のんきに書けないのはもつともだが、しかし、力がこもつてゐるのでひきつけられる。力のこもつた作をどし〳〵お書きなさい。上手になるのには、それより外にありません。

△殿樂ハルさんの『雀』はいゝ詩である。詩だといつた方がいゝ位に美しい作である。

△伊藤冨士雄さんの『いたち』は例によつて上手に書けてゐる。しかし、この作者としては、上出來の方ではない。自重を望む。

△横井修吉さんの『魚つり』にはところ〴〵に、非常に面白いところを見出します。

△此の外、掲載の分はいづれもいゝところのある作であるが、掲載洩れの中で最も殘念な作が澤山にあるから、その名だけをここに揭げます。

ふく(内藤格翁)かうもり取(廣瀨通)兎の子(岡山純義)今日(末弘房子)日は沈む(瀧口常)ハツユキ(岩谷ミヨノ)妹のしやみ好(山岡笑惠)桶屋さん(坂本仲一)秋のうら(村山カズ子)鉛筆(柴田梅四郎)

童話選評

齋藤佐次郎

△童話は前月が、牛の郷土童話のために、一回選を休んだので、今月は驚くほど澤山の作が集つた。しかし、その割合に優れた作が少なかつた。

△中から五篇選び出した。中で、仙波しげるそれが如何にも童話味がある。

△井上一郎さんの『三つの願ひ』も面白いものでありました。作者が馴れ過ぎてゐるためから生じる、どこか油の拔けたやうな感じを與へるところはあるが、しかし、まとまりのよゝついた作である。

△伊藤一雅さんの『逃げた蜘蛛』は重味もあり、行屆いてもゐるいゝ作である。前半が活躍してゐます。たゞ難をいへば、蜘蛛が蜂を助けるといふことに作者の無理があるやうに思ひます。蜘蛛といふものに就て考へる時、どこなどう考へても、蜘蛛が何かを助けるといふ連想がしつくり合はないやうに思はれるのです。これが何か外の蟲類であつたら、面白味が出たとも思ひました。

△藤本秀太郎さんの『蜜を吸つた蜂』はキヅのない面白く讀ませる作です。

△以上『狐の子』以外の四つの話は推薦候補作の中に加へます。

『金の星』誌友募集

『金の星』の誌友を募集いたします。誌友にはいろ〳〵の特典と便宜とがありますから、熱希望の方は本社宛に規則書をお申込み下さい。今度より三ヶ月分以上の直接購讀者に對しても、誌友のお取扱ひをする事となりました。

編輯室より

△大好評の新年號の後をうけて、二月號は大元氣で編輯をはりました。内容は勿論記者一同奮闘して各先生の苦心の結晶を集めたものでありますが、二月號の表紙に至つては、恐らく天下一品の評を以て、印刷前から既に大評判を受けてゐます。

△營業部は今度から市内へ移轉致しました。雜誌だけでなく、澤山の書籍を發行します都合上、營業所を大にひろげなければならないので、別項お知らせした通り移轉いたしました。次號に營業所の有樣を寫眞にとつて掲げますが、非常に廣くて、一つの學校位の建物ですから、こんどはどんな大仕事でも出來ます。お暇がありましたらお立寄り下さい。愛讀者の方々を、大に歡迎いたします。但し投稿その他は當分の間從前通り本社宛に願ひます。

△五月號には特別號として『世界童謠號』を發行します。今からどし〳〵御投稿下さい。スバラしい雜誌をこしらへます。なが い間皆樣から童謠號を出してくれといふお話がありましたが、今度こそ、これで皆樣の御希待に從ふことが出來た譯です。

營業部を左記の處へ移轉しました

東京市本郷區動坂町三五九

金の星營業部

＝自由畫掲載外佳作＝

岩谷　貞三（秋田）　山本　松子（石川）
柳田　英二（青森）　熊野　義雄（香川）
間山喜美子（若狭）　鎌田　史朗（香川）
安藤　榮（山梨）　寺西　フミ（若狭）
森川　茂（香川）　石井　弘香（香川）
常田　房（若狭）　山地　勝良（香川）
杉田　秀夫（宮崎）　豐島　泰（山梨）
出口　カヨ（若狭）　谷口　すみ（不明）
加藤　秀夫（東京）　萩原　シズ（若狭）
荒井　チエ（若狭）　今村　ツヨ（若狭）
石井　皎（千葉）　齊藤　達夫（香川）
岩谷ミヨノ（秋田）　白井　辰三（大阪）
倉林　義弘（長野）　海田　時義（鹿兒島）
村越　敎正（平塚）　山田　良子（東京）
山下ウメコ（山口）　森本　宇一（和歌山）
岡　寅蔵（和歌山）　山岸　博（埼玉）
計谷利兵衛（埼玉）　村下　恒夫（大阪）
中村　攻雄（大阪）　松田　岩一（大阪）
波多野敏男（小倉）　野瀬　正一（千葉）
藤田　忠雄（神奈川）　石澤　信夫（山形）
山村　末造（滋賀）　檀上　青葉（和歌山）
眞砂丘　寛（愛媛）　伊藤　駿二（東京）
山流　政彦（大阪）
早川　浩之（大阪）　增田　萬吉（埼玉）
野村　武義（埼玉）　佐竹ゆめみ（高崎）
坂本　仲一（高崎）　豐島　泰山（梨）
篠崎平四郎（千葉）　野瀬　眞一（千葉）
渡邊　鉄（岐阜）　弓倉フミヨ（和歌山）
佐藤トシ子（和歌山）　長岡　德七（山形）
柳田　英二（青森）　吉田　ゆき（山形）
山林　よね（山形）　恩田　孝一（東京）
峯田　宗吉（山形）

＝幼年詩掲載外佳作＝

伊藤富士雄（京都）　石澤　信夫（山形）
山川　耕規（山形）　軍司　昌三（茨城）
金子やゑ子（山形）　山俣登久次（埼玉）
新家　イチ（和歌山）　森本　スエ（和歌山）
又曾トミノ（和歌山）　亀岡　しげ（山形）
山根　明（山口）　東襄　利文（和歌山）
山岡　善水（和歌山）　坂上　勝（和歌山）
會田　清吉（埼玉）　金子　長吉（山形）
山本　松子（石川）　田丸　清治（千葉）
谷口　すみ（若狭）　竹本　イソ（若狭）
魚瀬　ヌイ（若狭）　島本　キヌ（若狭）
内藤　格翁（山梨）　末弘　房子（山口）
磯野　フサ（若狭）　一瀬　菊子（若狭）
今村　ツヨ（若狭）　荒川　宗一（北海道）
福田　始（山口）

＝綴方掲載外佳作＝

柴田梅太郎（濱）　坂本　伸一（高崎）
山岡　笑惠（若狭）　廣瀬　通（山梨）
濱口　常（和歌山）　光野　イト（若狭）
勝貝　シゲ（若狭）　浦賀　イソ（若狭）
細田三佐保（山梨）　村山美江子（愛媛）

＝童話掲載外佳作＝

大竹善永郎（栃木）　内原　君子（香川）
村上　博（不明）　淺見松三郎（埼玉）
眞砂丘　寛（愛媛）　野坂　温夫（島根）
島巢　壽一（神戸）　渡邊　徹之（熊本）
石井　皎（千葉）　多田　正雄（香川）
山本　秀一（和歌山）　中村　佐（長野）
椎　金太郎（不明）　山本　松子（石川）
谷口　すみ（若狭）　竹本　イソ（若狭）
魚瀬　ヌイ（若狭）　島本　キヌ（若狭）
高田　哲太郎（福島）　三浦　大船（新潟）
間宮　禎一（水戸）　三浦　成（高田）
布村彌八郎（宮山）　矢田　篤吉（愛媛）
平松　正樹（濱）　大瓜　松（分）
羽田　敬和（高知）　白井　辰三（大阪）
田中　一路（神戸）　安藤きよし（臺北）
船木　枳郎（東京）　鳥野　時雄（千葉）
泉　政雄（不明）　川井多金郎（秋田）
小山田　光（横濱）　鈴村　武夫（東京）
大島しげ三（東京）　宍戸　功夫（東京）
大岩　孝二（愛知）　中村　義夫（千葉）
伊藤三千夫（山口）　月山伊三郎（京都）
辻野　章（廣島）　大塚　宏一（埼玉）
芝田　吾弐（東京）　柴田幸三郎（宇都宮）
彌本長四郎（東京）　村瀬　八郎（東京）
藤川　正一（不明）　近藤　眞作（名古屋）
白井　陸（名古屋）　中村　遠生（大阪）
沖野彌三男（石川）　太田　貞夫（愛知）
有馬　數一（香川）　松原　敏夫（東京）
松本　章平（東京）　中山　治夫（和歌山）
深谷　達也（福島）　橋本　清（千葉）

〔大人篇〕

新井　道星（臺北）　都外川　淳（大阪）
潮兼　幹（和歌山）　花長　知（東京）
細谷　和生（東京）　田中　秀男（東京）
川井多重郎（秋田）　みせたく一路（神戸）
埼玉　田　篠原　邦　丸茂　五郎（山梨）
小島　高助　戸田　雪子（長野）　海達　公子（鹿兒島）
藤飯　つとむ（東京）　花子　千代（東京）
横張　島羽　蔭　横張　千代（東京）
小倉　手塚　恒　淳　朝鮮　城　三須　英三（京都）
三　神奈川　眞砂丘　寛（愛媛）　岡田　金太郎（愛媛）
山本　秀一（和歌山）　篤吉（愛知）　孫吉（愛知）
木村　篤路（愛知）　富田　末子　香　道　川
宗雄　札幌　一郎　吉岡　石橋　宗雄（岡山）
芹子（山形）　齋藤　光子　北海道　渡邊　正雄（山形）
石澤　高澤　忠平　谷　清川　香　高野　いば　埼玉　川
片山　はら　岡本　しな子（岡山）　内藤　陽江（東京）
鳥羽　花子（福岡）　下川　マエ　眞砂丘　寛（愛媛）

〔小供篇〕

山口正二郎（北海道）　長谷川重雄（千葉）
荒井　正巳（水戸）

〔新誌友名簿〕

（以下次號）

新しく出た本

◇須少年（小島政二郎先生譯）

この本を手にした讀者は、先づ本の立派なことに驚かされるでせう。實に立派な本です。クロースへ金文字と三色版とをはりつけた壯麗な本で、大辭判だつた『家なき子』を一層こつたものにしたのが本書である。さて、その內容の面白さに至つては、全く他に比較し得べき本がないかと思はれます。一名「狼に育てられた少年の話」とも呼ばれてゐますが、この題だけで、この本の內容は既におはかりでせう。全篇、モーグリといふ不思議な少年のお話であつて、その間に虎が出たり、狼が出たり、獅子が出たり、猿が出たり、しかも、動物の心理が手にとるやうにはつきり、面白く書いてあるのであるから堪らなく面白いのです。あんまり面白く書けてゐるので、原作者であるキップリングといふ人は、本當は動物のお腹からでも生れた人かと想像する位です。兎に角一度び本屋の店頭に立つて本書を御覽下さい。寺內萬治郎先生の美事な裝幀と口繪と、それから深山の挿畫とは本書の興味をますます深めてゐます。又定價は本屋さんが驚く程安價です。新春の贈物として最も適當です。（四六判箱入美本內容三一三頁、定價壹圓九十錢　金の星社發行）

◇シエークスピヤ物語（金の星社編）

金の星社の世界少年少女名著大系の第九篇です。少年少女のために世界一のシバキ作者といはれてゐる英國のシエークスピヤの芝居の中で讀物として一番面白いものを六篇選んだのが本書です。テムペスト「師意のまゝ」「みゝ〳〵女馴し」「眞夏の夜の夢」「冬物語」「ゼニスの商人」の六大戲曲を、これ程やさしく、面白く書いたものは恐らく他にないでせう。全くめづらしい本です。ですから、一度本書の出版の報が傳ると、諸々方々の圖書館は勿論、進歩した家庭からは山なす注文が參りました。これを以て、本書の大體の價値が知れるでせう。（四六判箱入美本內容一七五頁、定價金九十錢　金の星社發行）

◇スキーとスケート（鐵道省編）

雪のシーズンに入つて最も愉快な運動はスキーとスケートです。本書は鐵道省が日本全國のスキーとスケート場として最も適當な場處を紹介するために拵へたものです。鐵道省の仕事だけに、よく行き屆いて、一々寫眞入りで紹介してあります。これ一冊あれば、自分の好き次第の場處をゐながらに探し出して、行くことが出來るといふ頗る便利な本です。裝幀、印刷、共に立派なものです。（三五判三〇〇頁　非賣品　鐵道省發行）

◇エステル姫（鈴廣正一郎著　舊約聖書に出て來るエステル姫の物語を面白く書いた本です。各章ごとに、最初に聖書の文句を引用して、信者のためにも、非常によい參考となつてゐます。クリスチャンの家庭には是非一本を備へる必要がありますが、キリスト教のお話を何も知らない者にも、本書を讀んだら、奈い魂のはたらきに接することが出來るでせう。（三五判、內容一六四頁、定價金壹圓、東京神田錦町一ノ一あをぞら社發行）

讀者だより

▼八甲田山に早や雪が見えだし北風はびう〳〵と吹きすさび、寒い寒い冬は北國のはてまで參りました。唯〳〵淋しく相成りました。肥者先生並びに皆様は如何致されました。さだめし東京の都にも冬は參りましたちうと存じます。當地い有様をお知らせ致します。朝五時に牛乳まはしは、カランカランと家の入口に元氣よく、置いて行く。汽車はいさましく發車する。逝く船のきてきのおとは、おウボウとほげしくなりわたり、學校生徒は途中をいそぐ。（北國より）

▼私は十一月號から美しい金の星の誌友の御なかまいりをさせていたゞきました。私は皆さんも御存知の事と思ひますあの野口先生の『青い目の人形』中にある佐渡ヶ島にすんで居るのです。それで野口先生によつて佐渡を紹介していたゞいたので、一層野口先生を御慕ひして居ります。

終りにのぞんで野口、岡本、寺内先生其の他の諸先生ならびに誌友者兄妹諸君の健康を御祈り致します。

佐渡ヶ島　三浦大船）

▼伊豆の南のはしで未知の人の作に打たれてゐます。仙波しげる君名方まさる君蔦松の中村ひさし君御活動をお喜びいたします。私も新しい年から、金の星の方に仲間入をさせていたゞき大いに諸ひ…と思つて居ります。終りに野口先生の御壯健を祈ります。（靜岡縣下田町　鈴木まさし）

▼賞金正に頂戴致しました。

拙ない童謡を御誌にお載せ下さいました光榮に又々かやうな金額をお送り下さいまして御禮の申上様も御座いません。此の後共一心に童謡を作つて投書致す覺悟で御座います。野口先生には吳々も宜しく。記者諸先生の御奮闘と金の星の益益發展する事を祈ります。

（東京　淺守一）

▼金の星童謡作家番附（第六卷一號より七卷一號迄）

横綱、岡本しな子（十點）
大關、佐藤よしみ（九點）
關脇、三須　英三（八點）
小結、大場　綸津（七點）
小結、湊　守一（七點）
小結、小西　行夫（七點）
前頭、伊藤　邦夫（五點）
前頭、立花　信夫（五點）
前頭、日高　紅椿（五點）

（採點法、推薦五點佳作一點）

皆様明けましておめでたう。此の中に僕の名が出てゐないから淋しいのです。僕の成績は……哀れ選外佳作三篇です。それつきりです。來年こそは僕が横綱になる年です來年の事を云ふと鬼が笑ふさうですが……（愛知縣　森ほたる）

▼愛讀者達で童謡誌を發行してゐられる方がありましたら、左記へお知らせ下さい。入會さして戴きます。（福井縣敦賀町末廣八九　若井方　藤野ふくみ）

▼一つ質問があります。誌上でお知らせ下さい。『時季とあつてゐない童謡』でもよいですか。お願致します。（甲府市サンタ、クロースより）

▽なるべくその時季のことを作つて下さい。（記者）

▼十二月號の童謡子供篇中に於けるゝ金子武夫さん、丸茂五郎さんちよつと貴方がたの御住所を見て右のうたをつくりました。お笑ひ下さい。

甲府の丸茂
綠町
東京の金子は
銀の町

さるく茂つた
森の中
五郎ちゃん一人で
泣いてゐた

小川の流に
金の玉
見つけて武ちゃん
よろこんだ

ところで、五郎ちゃん
泣きんぼう
武ちゃん、いたづら
ほんとかネ

（京都　三須英三）

▼福井縣の某氏に「投書券は讀者を無視した行爲だ」と正論だけはいた人に對して君は適例を以つて注意なさつたのは、金の星讀者一同は感る程と思ふでせうが然し此れを以つて萬人に適用するとはどんなものでせうか。此の問題について僕は色々の意見を持つて居て何時か申さうと思つてるものですが君に次の一事を云つて考へてもらひませう。「稅金ををさめない者でも選擧權を有する普通選擧が將に適用されんとするのは何を意味するものでせうか。」

此んな例で云々するなんてあてはまらないと申されるならば又何時かのべるまでです。（東京府　松村淑郎）

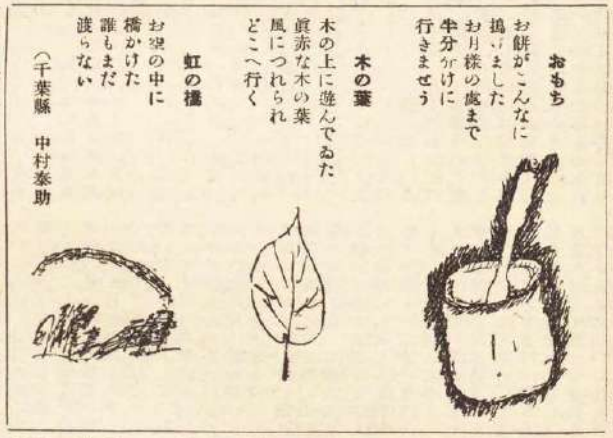
▼今年も、はやあと一ヶ月で終りを告げるのです。ずゐぶん御忙しい事と存じます。十二月號も有難くいただきました。表紙繪のサンタクロースのおぢいさんの繪を見たら、何だかお正月が目の前に來たやうな心持ちがしました。だまつてこの繪を見てゐると、サンタのおぢいさんが僕に「お前には、兵隊さんをやらうか。」と、にこ〳〵してやさしく、云つて居られるやうです。

妹も「このおぢさんが、大好きだ」と云つてゐます。

寺内先生や、岡本先生はどうぞこの後この榮ある「金の星」を一層きれいに立して下さい。

一月號

誌創刊
一束
地万雜



（千葉縣　中村泰助）

と自信とにほゝ笑むで青空のもとにほつかりと。この童謡誌は顧問として野口雨情、山村暮鳥、藤森秀夫、島木赤彦諸先生を頂きます。

▼「愛珠沙華」が咲きでました！童謡詩壇の主流ともなるべき意氣からいく〳〵にもお願ひ申します。（よしみ）

▼可愛いゝ童謡小曲雜誌「姫人形」を一月に創刊致します。皆様の御援助をお願ひ致します。會費は月に二十錢です。それから私たちは福岡市の圖書館内兒童室で、毎週土曜日午後二時から「童話會」をします。誰でも聞きにお出でなさい

福岡市西唐人町　石橋宗雄）

▼文藝雜誌『流星』を發行致しました。何卒皆様入會して下さい。そして共に仲良く研究してゆきませう。童話も童謡も募集してゐます金の星の愛讀者はみんな入會して下さい。私は首を長くして待つてゐます。（神奈川縣中郡伊勢原町三〇七番地　流星社岡山純義）

▼私は少年時代の思ひ出の爲に童謡の小雜誌を發刊しようと思つてゐます。どうか皆様自作の童謡に送料として二錢切手同封の上御申し込み下さい。優秀作品にはいささか乍ら賞品をさしあげて、投稿者全部に洩れなく作品を載せた小雜誌を無料にて差しあげます。（紀州田邊町福路町　檀上青華）

▼童謡誌『ざんなん』を出して研究しつゝあります。未熟なものです御援助下さい。（靜岡縣賀茂郡下田町　鈴木まさし）

▼僕は此度少年共同雜誌を發行します。諸君は非會員となつて下さいそして共に本誌文藝欄に奮ひませう。ハガキで申込んで下さい規則書お送りします。（神戸市湊川町六丁目四三　田中信一）

金の星一月號批評一束

一、一番好きな讀物は出目助さん道中記でした。讀んで居て大聲で笑ひました。それから涙ぐみました。懷かしい私のおばあさんに聞かせて上げたいお話です。

一、作曲の下に數字で譜が書いてあつたのが無學な私の喜びでした明るみでした。毎月のやうにお願ひします。

一、作曲の募集をして下さいませんか。大人篇の童話童謠と同じ地位で。推薦の作に先生の御作の次の頁へ發表して佳作は氏名のみ發表して下さい。（愛知縣一宮市　森ほたる）

▼一月號を讀んで氣に入りましたのは、

1、岡本先生の仔牛

2、野口先生選の大人の部及子供の部の童謠

3、山本先生選の自由畫

此の自由畫を、數は少くてもよいですから、大きく色刷にして口繪にしては戴けないでせうか。（栃木縣　永島信吉）

▼御説下さい。私は金の星を見る度に天性藝術畫家武井武雄先生のお畫が一番よいと思ひます。（鳥取縣　武部攻一）

▼「金の星」もだん〳〵盛になつて、いきますのでなによりです。又一月號で面白かつたのは「小鳥は空に」「金牛」「お貴賓り」でした。なほこれからもこれ等のやうな話を出して、大いに奮發して下さい。皆々様御身を大切にさようなら。（福井縣　松尾金四郎）

▼一月號を見まして皆立派だと思ひました。これと云つた缺點もない様です。殊に「小鳥は空に」「出目助さん道中記」など流石と思はれました。讀者から募集された數篇の作も皆金玉の出來榮ではありませんか。總じて私達は變化を喜びます。同じ様な所謂お伽噺の型にはまつたものばもうあき〳〵してゐますッどうかこの事もお忘れない様に表紙も口繪も水彩になりましたね。今迄のと較べて見ますとかういふものは矢張油繪より水彩の方がさつぱりしてよい様に思ひます。終に口繪作者の名が書いてある所に、野口先生の童謠でも載せて下さつたらと無理なお願ひでもいかがでしょう。（深川　藤本秀太郎）

▼金の星一月號の感想。毎號ながらよくまとまつたものでよろこんでゐます。殊に野口先生の童謠の長いのも一月號らしくて嬉しうございます。一番面白かつたものでは小鳥先生の「あッはッはうッふッふ」金の星に敬を受けた私でございます。希望等も大したものはございませんが、牛に就ての童話等時折募集下さる事。金の星一ば他の雜誌と違つて諸大先生の力作な讀めるのが力强うございます。また挿繪にしましても飛離て新しのがうれしうございます。終り乍ら、いつも發展してゆくのを祈ります。（大阪市　井口敏子）

▼名を聞いただに善本であると思つてけつさくぞろひ「金の星」の私は誌友であります。待ちあぐがれてゐた一月號が私の手に入つた時は鬼の首でも取つた様にうれしくございました！　いきなりすぐ頁をくつて見ましたが面しろい記事ばかりです。とう〳〵皆讀んで了ひました。其中でも加藤先生の原作「小鳥は空に」と言ふかなしい物語大へん面白くございました。私はこのやうな記事が幾つも〳〵本誌にのせられん事を望んでゐますもう私は二月號が待ちどほしくてこまつてゐます。「小馬」は發行になりませんかお知らせ下さい……（岡山市　大熊龍次）

▽折々見て必ず發行いたします。尚この外、讀者諸君から多數の批評に接しましたが、〆切に間に合はなかつたり、行數の關係で殘念乍ら掲載洩れになつたのが澤山ありました。（記者）

▼寒い冬が來ました。金の星社の諸先生、お變りもございませんか。私は郷里の小學校にて教鞭をとつてゐる者ですが、いつも「金の星」が童話雜誌の先頭に立つて奮鬪してゐるので、愉快です。子供達は毎月の「金の星」をどんなに待ちこがれてゐるか、一寸想像もつかない位です。私は「金の星」が届くと、すぐ教室へ持つて行つて、みなさん御覽、金の星が來ました。」といひます。すると、みんな、ワアーとトキの聲を擧げて、お話して下さい」と呼びます。（山川五郎）

▼昨夜、鈴蘭の會（私塾素人ばかりが集つて開いてゐる童謠童話の研究會）の集りで友の宅へ寄りました。その時、友は一册の雜誌を照會してくれました。「好いですれ」――その時、私はそう云つてその雜誌を三十分間位も繰つた後返しましたが、早速歸路最寄の書店で買求めました。――それが「金の星」です。「好いですれ」――と、私は友へ御役目的に云つたのではありません。自分が良いと思つたから良いねと云つたのです。そして自分が良いと思つた雜誌に誌友を募集してあるから、自分も加入させて頂きたいと思ひます。ついては規則がある様ですから、規則書拝見致したう御座います。どうぞ一部御送り下さい。（佐世保市　吉富正名）

▼童謠が御飯よりも好きだと云ふ「鈴蘭の會」の中から五人の可愛いい少女作家を照會します。皆な童謠病患者で御飯よりも童謠が好きだ相です。毎週日曜日　澤山の原稿を私のところへ持つて來て、さあなほして頂戴い、とてこずらせる人達です。よろしい！と先生援りを示してやるはずですが、實は私も童謠では一年生です。なほすだの、批評するなどは無論出來ません。それで私は一策を案出しました。それは先づ、私の手許に集つた童謠を、全部纏めて金の星の選者先生のところに送つて、先生方に選してもらうことにきめました。これだつたら間違いなしでつまり金の星に入選たしのはよく出來たので、甲の上。あとはまだ勉强が足らぬのです。――こう言つたら四年の小野と云ふ茶目さんは、今晩鮫空隊の飛行機でカステーラ一斤兩情先生と牧水先生のところへ持つて行つて、甲み頂つてくるんだつて――。（鈴蘭の會　吉富正名）

▼鷗來る里周防八代を去つて海軍奥のまちに來ました。自分から求めて……。靜より動へ、自給より文明俗境へ、仙境より人殺り船へ、八代の敎へ兒は「やくばの四に金あみの中に丹頂が二羽飼はれてゐます内務省にしてのでございます」「先生は逃げる時なあてでございました。私もなきました」など色々手紙を寄します。喧騷たる街の眞只中にたん蚤し、荒凉たる八代の原野を思つてゐます。終に八代在職の時美しいお本下さいました人々に感謝いたします。御證をしなかつたお方にすまないと思つてゐます。（奥市大正中學校　伊藤三千夫）

▼十二月號の中では三島霜川氏の「扇の的」が最も傑出してゐました。内容の豊富なドラマティックな處が好きです。推薦童謠「枯れ葉」も亦近來稀にみる傑作でした。充分「特選」の價値ある作と思ひます。新春號には僕の大好きな菊池寛、加藤武雄兩氏の作品が掲載されますとのこと、樂しみにお待ちして居ります。（都外川淳）

▼菊池寛先生のお作は殘念乍らうとう〆切までに間に合ひませんでした。次號には掲載出來る豫定で居ります。（記者）

▼記者様、關東もすつかり冬になりました。御僕在のこと、存じます。私が「金の星」を愛讀してから半年になります。これからも努力して投書します。小野崎一郎様貴作をなつかしく拝見しました。お便り下さい。三須英三様、いつもお奮ひですね、拙い子と御交際下さい。それから新年號で加藤武雄先生の「小鳥は空に」を拝見して大へん嬉しく思ひました。加藤先生は神奈川縣出身の方です。神奈川縣の讀者諸兄姉、お奮ひ下さい。（神奈川縣伊勢原町　岡山純義）

▼前に書いたのは私が生徒の中から餘り良く出來たので奬勵の爲投書したのです私達の村は鐵道から三里平坦部から一里半の山奥にある小さな一部落の分教場であります。私も今年始めて當方に來りました若い教員であります。「金の星」――は前から愛讀して居りましたそれを生徒にも見せる爲二部づゝ取つて見ております。私も是れから下手な様好なものをちよいちよい投書しますから記者様宜敷御願申します。（長野縣湖南校後山分教場　原みのる）

▼みなさん。すてきに寒くなりましたネー。お變りは有りませんかみなさんの中には文藝誌を發行して居られる方が澤山ある事　思ひます。僕の編輯してゐる「さくら草」と交換しませんか。住所は神戸塚本通四御旅筋です。共に進んで行きましよう。（高橋久藏）

金の星社 出版だより

〔二年號〕

狼少年

小島政二郎先生譯

『狼少年』は十月末に發行の豫定のところ、裝幀に豫想外の苦心をした爲め遂に延びて、漸くこゝに發行になりました。

裝幀は本社發行の「家なき子」と同型であつて、しかも、それに一層の苦心をしたものだけに、見るからに目も覺めるばかり立派な本であります。勇壯無比な此物語りは、幾度讀んでも盡きぬ深い興味があります。島國の小さなお話ばかり讀んでゐる諸君に、この熱帶の大森林の中から生れた一大雄篇のもたらす偉力は、如何に目覺しいものでせう。寺内萬治郎先生の裝幀と相まつて大好評です。是非書店にて一度本書を御覽下さい。(定價金壹圓九十錢送料十五錢)

シエークスピヤ物語

世界少年少女名著大系(9)

本書も十月はじめ出版の豫定のところ、組版を全然改めたため、發行が遲れて、本月十五日に出版になります。シエークスピヤ物語はこれまで少年少女の讀物として發行されたのは本書が最初だけに、各方面から非常に期待されてゐます。皆さんが名だけ聞いてゐて未だ讀むことが出來なかつたお話が、やさしく面白く讀むことが出來るのですから、大好評を受ける譯です。

イリヤード物語(近刊)

世界少年少女名著大系(13)

ギリシヤ神話

世界に傳へられてゐる有名なお話の中で、何が最も古くから傳へられてゐる雄大なお話かといへば、この「イリヤード物語」です。「オデッセー物語」と共にギリシヤの詩聖ホーマーの名作であつて世界のあらん限り傳へられる不朽の傑作であります。

お話はトロイの島に起つた大戰爭を書いたものであつて、實にすばらしく雄大勇壯な、しかも面白い〳〵物語りであります。一度本書を手にした者は、恐らく一生忘れることが出來ないだらうと思ひます。一月中頃出版の豫定ですが、御希望の方は今からお申込み下さい。

西遊記(近刊)

世界少年少女名著大系(14)

悟空、八戒、沙悟淨の三人の化物が、唐の三藏法師のお供をして西印度まで遙々お經をとりに行き、途中で種々の怪物に出遭ひ艱難辛苦する有名な長篇物語りです。その一部分は「金の星」誌上に掲げて大好評を受けましたが、かく一册にまとまつた西遊記を顯されたら、どんなに面白いことでせう。『西遊記』は、これまでに他より出版されてゐますが、本書のやうに不要な部分を捨てゝ、わかり易く面白く讀め、且つ無比の安價で發行されたものは他に斷じてありません。これは金の星社の名著大系の誇りとするところです。

募集

◎沖野岩三郎先生著『森の祈り』の讀後感を募集します。此の本を讀んでどんな感想を受けたか、それを二十字詰二十行の原稿紙二枚以内に記してお送り下さい。掲載の分に對しては、薄謝を呈します。宛名は金の星社「出版だより係り」へ。

『小公子』の作者として有名なバーネット夫人死す

◇「小公子」の名は日本でも古くから知られてゐます。飜譯が幾册も出て、隨分澤山の人に讀まれてゐます。「小公子」は最も古い書としてはこれ一つです。

◇從つてこの作者であるバーネット夫人の名も、知られてからかなり古いものです。

ところが、そのバーネット夫人が此の十月の廿九日に死んだといふ知らせが日本に屆きました。夫人の南現は英國のマンチエスターといふ處で貧乏な暮しをしてゐました。

◇生れつきお話を書くことが大好きで、給料鉛筆とノートとを離しませんでしたが、家が貧乏なために、その鉛筆やノートさへも買ふことが出來なくなりました。

◇或る日のこと、あはれな姿をした一人の少女が、その頃有名なバーネット博士の家を訪れました。「おぢさん、どうぞ菓を買つて下さい。私はそのお金で鉛筆とノートを買つてお話を書きたいのです。」と少女が云ひました。見ると、ぼろ〳〵の着物を着てゐて、足もはだしでした。博士は、少女をあはれに思つて、いろ〳〵と話を聞きました。そして、遂にこの少女を貰ひ受けて自分の娘としました。

◇少女はその後ある醫者と結婚しました。それから夫と共にパリに出て、一生涯命に學問をしました。この少女が後になつて「小公子」を表したバーネット夫人でありました。

夫人は今年七十五歳で、米國ニューヨークの郊外ロングアイランドといふ處の靜かな村で、眠るやうに安らかな死をとげられたさうです。

◇バーネット夫人の生ひ立ちは、その著書『小公子』の主人公とは全く境遇こそ變つてゐますが、波瀾の多い點では實に似てゐました。

懸賞創作募集

自由畫……山本鼎先生選
幼年詩……若山牧水先生選
綴方……編輯部選

〔注意〕題は何でもかまひません。諸君の日々見たり感じたり、したことや諸君のすきなものを、諸君のすきなやうに畫なり、詩なり、文なりにしてかいてください。一人で何題出してもかまひませんが、姓名は學校や學年（または住所と年齢）とともにおとさないやうにして下さい。用紙は自由畫はなるべく畫用紙に、幼年詩や綴方はなるべく原稿用紙（または半紙）に書いてください。よく出來た方には「金の星」特製の賞品を差上げます。次號〆切は一月廿八日（その以後は次號へ廻る）發表は三月號、宛名は東京市外田端三百五十一番地金の星社。

童謡……野口雨情先生選
童話……齋藤佐次郎先生選

〔注意〕童謡は十五行以内、童話は二十字詰二百行以内、優秀な作品は「推薦」または「特選」として發表いたします。推薦の場合は童話には五圓、童謡には二圓づつ、特選の場合は童話には拾圓、童謡には五圓づつ賞金として呈します。但し少年少女の創作童話にして「入選」の場合は「金の星」賞を呈します。締切、發表、宛名は少年少女の創作と同じです。原稿には必ず住所姓名を記して下さい。原稿はお返しいたしません。

定價壹冊金四拾錢送料壹錢
三ヶ月分三冊（送料共）壹圓二拾錢
半年分六冊（送料共）貳圓四十錢
一ヶ年分十二冊（送料共）四圓八十錢
但し新年號は特別號で五十錢ですから、御註文の節はこの分だけ必ず加へてお拂込み下さい。
振替口座東京五九五九六番

〔送金〕▽御註文は必ず前金で御拂込み下さい
▽送金は振替が一番便利で御座います
▽切手代用は（壹錢切手）一割増しです
〔注意〕▽第何卷第何號よりと書いてください
▽住所姓名ははっきり書いてください

廣告料は御照會次第お答へ致します

大正十四年一月九日印刷納本（毎月一回）
大正十四年二月一日發行（一日發行）

東京市外田端三百五十一番地
編輯兼發行人 齋藤佐次郎

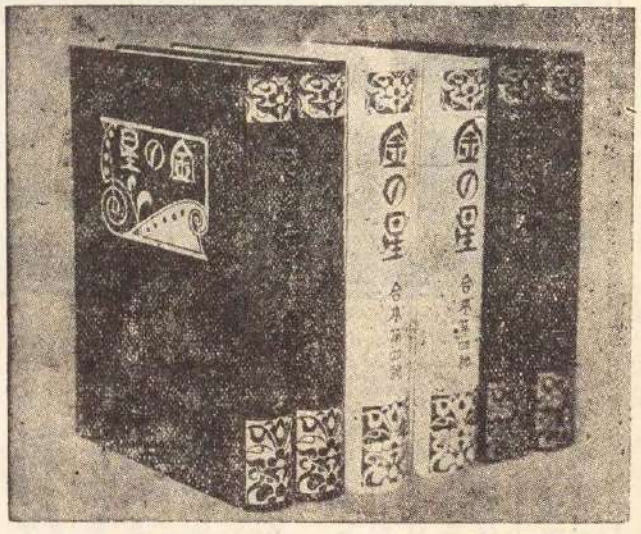
東京市小石川久堅町百八番地
印刷人 上村新輔

東京市小石川久堅町百八番地
印刷所 株式會社博文館印刷所

東京市外田端三百五十一番地
發行所 金の星社

振替口座東京五九五九六番
電話小石川五三八七番

ほるぷ出版複刻版'83



何度讀んでも、讀み飽きのせぬ金の星を、揃へて書架に置きたいとの、皆様のお望みにより出來ました。「金の星合本」は、二輯、三輯、四輯、と取揃へて御座います、裝幀は水島爾保布畫伯の意匠で、上圖寫眞の通り、それは〳〵、目の覺めるばかり、美しい本となつてをります。四季をり〳〵の少年少女の方々への適はしい贈り物と、好評を受けてをります。

金の星合本

（總クロース金箔押美本）

二輯（五卷一號ヨリ六號マデ）一冊定價金壹圓八拾錢

三輯（五卷七號ヨリ十一號マデ）一冊定價金壹圓五拾錢

四輯（六卷一號ヨリ六號マデ）一冊定價金貳圓

家なき子

三宅房子先生譯　寺内萬治郎先生裝幀並に挿畫

改正定價金壹圓八拾錢　送料金十五錢

・四六判函入總クロース美本・本文二百七十頁・挿畫十數葉入・

（定價は金壹圓拾錢の予定の處、定價改正の上、特に上製にしました。）

▽「家なき子」は、世界的の名作として、世界各國語に飜譯され、如何なる少年少女も是非一度は讀んで置かなければならない本として推薦されてゐます。

▽原作は佛國文豪エクトル・マローの作になつたもので、一人の孤兒の生涯を書いたものです。名家の家に生れながら、不思議な運命にもてあそばれて、遂に旅役者に賣られ、村から村へ、さすらひ歩く哀れな物語りです。

▽しかし、「家なき子」は、少年少女の涙をしぼらせるだけでなく、また大きな教訓を與へるものです。主人公が悲しい身の上でありながら、一つ一つと人生を學んで行くあたり、實に一大教訓小説ともいふべきです。歐米の各校がそつせんして、本書を推薦してゐるのも、これが爲めであります。出版發表以來注文殺到!! 賣切れぬ内お申込み下さい。

沖野岩三郎先生著　父戀し　▽定價金壹圓　▽送料十二錢

同　童話讀本　赤い猫　▽定價金九十錢　▽送料十二錢

本居長世先生作曲　人買船　▽定價金六十錢　▽送料四錢

同　一つお星さん　▽定價金六十錢　▽送料四錢

金の星社　東京市外田端三五一　振替口座東京九五九六番　電話京橋五九九五番

金の星社發行の名著

野口雨情先生著　青い眼の人形

野口雨情先生の名作童謡を澤山に集めた壯麗無比の本です。

▽定價金壹圓八十錢　▽送料十五錢

沖野岩三郎先生著　父戀し

父の行方をたづね歩く、姉と弟のあはれなく物語りです。

▽定價金壹圓　▽送料十五錢

三宅房子先生著　家なき子

旅役者となつて諸國をさすらひ歩く孤兒の物語りで、原作は佛國の名著です。

▽定價金壹圓八十錢　▽送料十五錢

武井武雄先生著　ブウ太郎鍛冶屋

武井先生獨得の面白い童話と畫を集めた本で、たまらなく面白い本です。

▽定價金壹圓六十錢　▽送料十五錢

沖野岩三郎先生著　童話讀本　赤い猫

日本で出來た最初の童話讀本で、最も面白くて爲めになる本です。

▽定價金九十錢　▽送料十四錢

金の星社　東京市外田端三五一　振替口座東京九五九六番　電話京橋五九九五番　東京石川小石川三五八七番

ライオン煉歯磨
坊ちやんや、
嬢ちやんの歯をみがくには、
ライオンねりはみきが
一番よろしう御座います。
味があまく、香がよく、
氣持好く歯がみがけます。
LION
TOKYO
MADE IN JAPAN